

## 近世近代京都における絵師・画家の居住地に関する 史的研究

著者	安 道永
発行年	2013-03-31
学位授与機関	関西大学
学位授与番号	34416甲第488号
URL	<a href="http://doi.org/10.32286/00000112">http://doi.org/10.32286/00000112</a>

平成25年3月期

博士論文

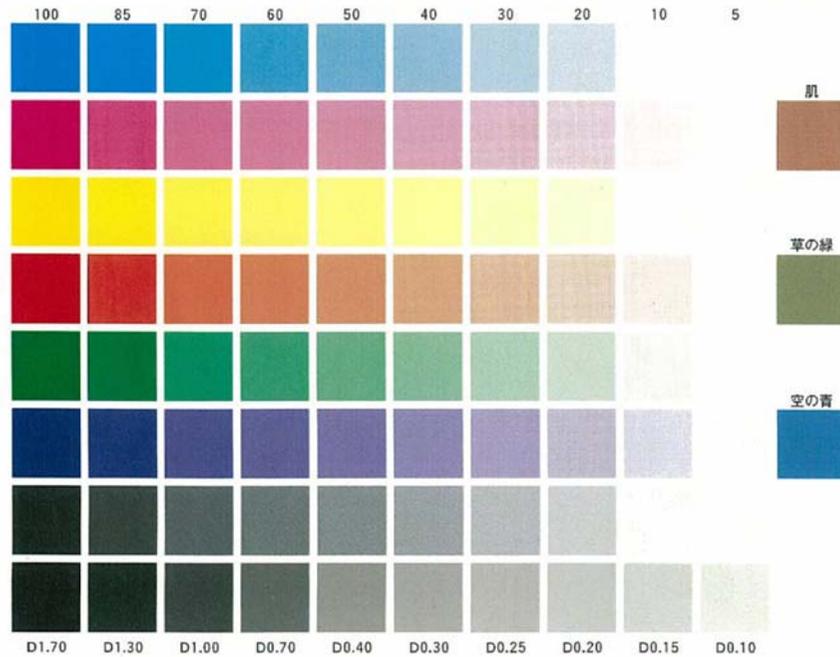
論題

近世近代京都における絵師・画家の居住地に関する史的 research

We conduct many of these  
We conduct many of these  
We conduct many of these



We conduct many of these  
We conduct many of these  
We conduct many of these



関西大学大学院 理工学研究科 総合理工学専攻

10D6005 安道永

目次	
序章	1
研究目的	
既往の研究と本研究の特色	
第1章 近世における絵師の居住傾向	5
1-1 はじめに	
1-2 『平安人物志』『皇都書画人名録』『京羽津根』について	
1-3 年代別における居住分布	
1-3-1 明和から天明における居住分布	
1-3-2 文化から天保における居住分布	
1-3-3 弘化から慶応における居住分布	
1-4 内裏周辺における居住分布	
1-5 郊外における居住分布	
1-6 小結	
第2章 近世における絵師の流派別居住傾向	29
2-1 はじめに	
2-2 町絵師	
2-2-1 四条派	
2-2-2 円山派	
2-2-3 岸派	
2-2-4 原派	
2-2-5 望月派	
2-3 御用絵師	
2-3-1 狩野派	
2-3-2 土佐派	
2-3-3 鶴沢派	
2-4 文人画家	
2-5 小結	
第3章 近世における絵師の居住地とパトロン	52
3-1 はじめに	
3-2 円山心挙	
3-3 呉春	
3-4 上山耕夫	
3-5 中林竹洞	
3-6 日根対山	
3-7 小結	
第4章 近世および近代の郊外居住	64
4-1 はじめに	
4-2 近世の郊外居住	
4-2-1 池大雅について	
4-2-2 原在中について	
4-2-3 岸駒について	
4-2-4 田中訥言について	
4-2-5 中林竹洞について	
4-2-6 日根対山について	
4-2-7 まとめ	
4-3 近代の郊外居住	
4-3-1 竹内栖鳳について	
4-3-2 上田麦僊と小野竹喬について	
4-3-3 まとめ	
4-4 小結	
結章	88
おわりに	91
関係既発表論文リスト	92
図版一覧	93

## 序章

### 研究目的

江戸時代における上方とは京都・大坂のことを指し、江戸に対立する言葉として用いられ、政治の優位性を江戸に譲ることになった京都にとって、江戸に対して経済・文化の優位性を誇示する言葉となった。民衆を中心として発展した元禄文化や化政文化を代表するように、近世においても京都は文化上の重要な位置にあった。それは近代以降も引き継がれていく。

このような京都では近世のなかごろから京都画壇なるものが形成されていく。これは、円山応挙や呉春をはじめとして岸駒や原在中など多くの絵師が京都で活動していた時代であり、彼らが開祖として知られる各流派は現在までその流れを継承している。それまでの絵画は寺院や、天皇や公家、武士など限られた階層の人たちの住宅などに描かれており、鎌倉幕府には土佐派、江戸幕府には狩野派が幕府のお抱え絵師として知られている。応挙たちはこのような絵画という文化を民衆にも浸透させ、画壇の勢力図を一手に塗り替えていった。近代に入っても、東の横山大観、西の竹内栖鳳と言われたように二大巨匠が台頭し、京都画壇の勢力は健在であった。

本研究は、このような絵師や画家を史的に捉え、近世近代京都における絵師・画家の居住地の実態を明らかにし、彼らの居住動向を歴史都市の形成過程の一様相として位置付けることが目的である。

なお、本研究では画を描く人たちの呼称として、近世においては「絵師」、近代においては「画家」という語を用いる。また、「文人画家」という語は近世と近代の区別はなく、統一して用いることとした。

### 既往の研究と本研究の特色

近世都市京都を対象とした研究の蓄積は膨大にある。伊藤毅氏は、法華宗をはじめとする洛中洛外の寺院分布とその意義を検討することにより、京都における中世後期から近世初頭への展開を論じた<sup>1)</sup>。登谷伸宏氏は、近世中期以降の京都の都市構造を明らかにするため、公家の集住形態に注目した研究を行った。町人地に居住していた堂上公家久世家を取り上げ、久世家の屋敷地の集積過程に注目した研究や、宝永の大火以前にみられる公家の集住形態の様相、その後の公家町再編過程において幕府が意図した公家町の防火対策に注目した研究がある<sup>2)</sup>。近世京都における防火対策に注目した丸山俊明氏は、江戸時代における京都の消防を検討することにより、町屋の建築形式への影響や変化の要因を論じた<sup>3)</sup>。辻品子氏は、近世末期下鴨神社周辺における社家町の構成（地割、規模、形態等）を明らかにし、それが現在どのように継承されているのかを検討した<sup>4)</sup>。

日本史の分野では、朝尾直弘氏が町共同体論を唱え、統一権力が町人のひとりひとりについて、彼が町人身分であるかどうかを決めたのではなく、「誰が町人身分であるかという

ことは町が決定した」という印象的な言葉で議論を提起した。つまり京都の町は家屋敷、財産、信用の共同保全を目的とした地縁的共同組織であった。とくに家屋敷は町人にとって中心的な資産であり、商取引に際しては町中が連帯保証したが、抵当の対象となつたのが家屋敷であった。そのため、家屋敷の持ち主が誰になるのかは町全体の関心事であり、彼をその町の町人と認めるには町人の合意が必要であった。朝尾氏はこうした町を地縁的・職業的身分共同体と規定した<sup>8)</sup>。朝尾氏の研究をうけて、吉田伸之氏<sup>9)</sup>や杉森哲也氏<sup>7)</sup>らが研究を重ねた。吉田氏は天正19年(1591)の洛中地子免許を起点に町人身分が析出されたとし、役の体系論の実証的研究を進めた。これは当該期における京都の権力と町人の関係を探る上で重要な論点を提示したものである。

近代都市京都を対象としては、中川理氏<sup>8)</sup>をはじめ石田潤一郎氏<sup>9)</sup>、矢ヶ崎善太郎氏<sup>10)</sup>、並木誠士氏<sup>11)</sup>らの研究がある。石田氏は、近代京都において市内およびその近郊に形成された住宅地の成立経緯と様態について検討した。矢ヶ崎氏は、近代京都の東山地域における別邸・別宅群の形成を推進した要因を明らかにし、別邸・別宅群にみられる建築と庭園に近代の「数寄空間」としての特質を見出した。とりわけ並木氏の研究は、中世から近代における絵師・画家の居所の動向を概観しており、本研究の内容と深く関わる。

本研究はこのような先行研究の成果を踏まえながら新たな史料を用いて知見を加え、これまで本格的に着手、解明されていなかった絵師・画家の居住地の実態を解明し、この新たな切り口をもって、近世および近代京都における都市の形成過程について、両時代の連続、不連続性を見出そうとしている。

## 註

- 1) 伊藤毅「中世都市と寺院」(高橋康夫・吉田伸之編『日本都市史入門 I 空間』東京大学出版会、pp. 17-42、1989年)
- 2) 登谷伸宏「堂上公家の町人地における屋敷地集積過程—久世家を例として—」(『日本建築学会計画系論文集』第581号、pp. 235-242、2004年7月)、登谷伸宏「公家町の再編過程に関する基礎的考察—宝永の大火と公家町再編に関する研究—その1—」(『日本建築学会計画系論文集』第600号、pp. 245-252、2006年2月)、登谷伸宏「元禄・宝永期における公家の集住形態と幕府の対応について」(『日本建築学会計画系論文集』第610号、pp. 245-250、2006年12月)
- 3) 丸山俊明「江戸時代の洛中農村の消防—江戸時代の京都の消防の研究(その7)—」(『日本建築学会計画系論文集』第73巻、第633号、pp. 2483-2488、2008年11月)など。
- 4) 辻晶子「近世末期下鴨神社における社家町を含む周辺地域の構成」(『日本建築学会近畿支部研究報告集』第50号、計画系、pp. 989-992、2010年5月)
- 5) 一連の研究は、朝尾直弘『朝尾直弘著作集』岩波書店、2004年などにまとめられている。
- 6) 吉田伸之『近世都市社会の身分構造』東京大学出版会、1998年

- 7) 杉森哲也『近世京都の都市と社会』東京大学出版会、2008年
- 8) 中川理『郊外住宅地開発を導いた学術・芸術・芸能に関わる人々の居住動向に関する歴史的研究—近代京都を事例として—』、課題番号14550636、平成14年度～平成15年度 科学研究費補助金 基盤研究(C)(2)、2004年3月
- 9) 石田潤一郎『《衣笠園》の形成—近代京都における住宅地形成(その2)—』(『日本建築学会近畿支部研究報告集』第31号、pp. 809-812、1991年5月)など。
- 10) 矢ヶ崎善太郎「近代京都の東山地域における別邸群の初期形成事情」(『日本建築学会計画系論文集』第507号、pp. 213-219、1998年5月)など。
- 11) 並木誠士「近代京都における画家の居所—中世から近代への展開」(注7前掲、pp. 27-34)

## 第1章 近世京都における絵師の居住傾向

### 1-1 はじめに

本章の目的は、近世京都における絵師の居住地について、その実態を解明する端緒として、年代を追って居住分布の傾向を明らかにすることにある。

近世京都では多くの出版物が刊行され、その中には人名録や地誌といった種類の書籍も含まれており、当時の芸術家や学者などの居所を知ることができる。本研究では、『平安人物志<sup>1)</sup>』『皇都書画人名録<sup>2)</sup>』『京羽津根<sup>3)</sup>』を用いた。これらの史料に収録される絵師の名前・流派・居所を抽出し、年代を追って居住分布の傾向を看取する<sup>4)</sup>。

先の史料において、『平安人物志』が近年注目されている<sup>5)</sup>。並木誠士氏は、特定できる絵師の居所を東西筋と南北筋に分解して、その頻度を抽出することで、東西筋では四条通が、南北筋では室町通がもっとも頻度が高いと指摘し、さらに、『平安人物志』9版の中で絵師の居所についてはそれほど大きな変化は見られない」と、結論付けている<sup>6)</sup>。田島達也氏は、『平安人物志』を配列・順位の問題に注目し、絵師および画壇という視点から検討した<sup>7)</sup>。絵師以外の職種では、久保智康氏は、鏝師に注目し居住分布図を作成している<sup>8)</sup>。並木氏は絵師の居住地に関する傾向を論じたが、近世における傾向を総括したものであり、近世のいつ頃からその傾向があらわれたのかを言及していないため、精細さを欠く。そこで本章では、公開されている情報を再整理しつつ、『平安人物志』のほかに『皇都書画人名録』『京羽津根』という新たな史料を加え、これまで作成されたものより、詳細な居住分布図を作成し、もって絵師の居住分布について、その傾向を追っていく。

1-2 では、『平安人物志』『皇都書画人名録』『京羽津根』について史料批判を加えたいうえで、これらの史料に収録される絵師の人数を把握する。さらに、居所が記載されている絵師については、その居所が特定できるかできないかを判断し、1-3以降で考察対象となる絵師を教え上げる。

1-3 では、1-2において特定できた居所の情報を用いて、年代ごとに居住分布図を作成し、各年代に見られる居住分布の傾向について詳細な分析を行い、これまで明らかにできなかった絵師の居住地について新たな知見を得る。

1-4 では、居住分布の傾向を全体的に分析した1-3に対して、内裏周辺に注目して分析を行う。天皇は古代より特別な存在であり、京都においても当然あらゆる影響を与えている。ゆえに、居住地である内裏を取り囲む周辺の様相を看取することは必須となる。

1-5 では、郊外に居所を構える絵師の居住動向を概観する。これにより、近代以降にみられる郊外居住地形成の発芽を近世に見出せる可能性を示す。なお、この郊外居住については第4章で詳細な分析を行う。

### 1-2 『平安人物志』『皇都書画人名録』『京羽津根』について

『平安人物志』は明和5年(1768)、安永4年(1775)、天明2年(1782)、文化10年(1813)、

文政5年(1822)、文政13年(1830)、天保9年(1838)、嘉永5年(1852)、慶応3年(1867)の計9版刊行された(図1-1)。編者は9版とも「弄翰子<sup>9)</sup>」である。版元は『平安人物志』明和5年版(1768)(以下、「明和5年版」とする。安永4年(1775)から慶応3年(1867)に刊行された版についても同様)が百足屋治郎兵衛(博昌堂)・銭屋七郎兵衛(芸香堂)、安永4年版が林伊兵衛・西村山良右衛門・石田善藏・銭屋七郎兵衛、天明2年版が林伊兵衛(文錦堂)・西村山良右衛門(載文堂)・美濃屋次右衛門(文盛堂)・銭屋七郎兵衛(芸香堂)、文化10年版が林伊兵衛(文錦堂)(のち堺屋仁兵衛(尚書堂)に版權が渡る)、文政5年版が堺屋仁兵衛(尚書堂)、文政13年版が堺屋仁兵衛(尚書堂)・榊屋利助(竹筒堂)、天保9年版が堺屋仁兵衛(尚書堂)・榊屋利助(竹筒堂)、嘉永5年版が堺屋仁兵衛(尚書堂)、慶応3年版が堺屋仁兵衛(尚書堂)である。

『皇都書画人名録』は弘化4年(1847)の序があるが、奥付に刊行年が記されていない(図1-2)。編者は吉田俊山で、版元は順祥堂ほかである。三条の東から京都を時計回りに回りながら、それぞれの場所に居所を構える絵師が収録されている。

『京羽津根』は『京羽二重』と『京羽二重大全』の流れを引き継ぎ、文久3年(1863)、元治元年(1864)、慶応元年(1865)、慶応3年(1867)、明治4年(1871)に刊行された(図1-3)。『京羽二重』は貞享2年(1685)と宝永2年(1705)に刊行され、『京羽二重大全』は延享2年(1745)に『京羽二重』を増補し、明和5年(1768)、天明4年(1784)、文化8年(1811)に刊行された。

表1-1は『平安人物志』『皇都書画人名録』『京羽津根』における絵師の収録人数を示したものである。『平安人物志』は明和5年版から天明2年版までは1巻1冊だったが、文化10年版から慶応3年版になると1冊を上巻・中巻・下巻・付録に分けられ、収録人数が大幅に増加した。また、絵師に限れば、天明の大火<sup>10)</sup>後に行われた寛政度内裏造営において、これまで御用絵師<sup>11)</sup>のみが内裏に従事していたが、幕府の財政難から町絵師<sup>12)</sup>も従事したこと<sup>13)</sup>で、町絵師の需要が増加したことも背景にあるのではないかと推測される。『皇都書画人名録』は収録人数が246人と同時期に刊行された嘉永5年版と比較すると約100人多く収録されている。『京羽津根』は御用絵師を中心に収録されているため、他の2つの史料と比べると収録人数は多くない。

表1-1 本研究で用いた史料に収録される絵師の人数

	収録人数(人)	居所記載(人)			居所不記載(人)
		居所特定	他国に遊専	居所不特定	
平安人物志 明和5年版(1768)	16	14	0	1	
平安人物志 安永4年版(1775)	20	17	1	0	
平安人物志 天明2年版(1782)	29	27	0	1	
平安人物志 文化10年版(1813)	93	82	0	10	
平安人物志 文政5年版(1822)	117	101	5	10	
平安人物志 文政13年版(1830)	163	149	4	6	
平安人物志 天保9年版(1838)	137	122	2	5	
平安人物志 嘉永5年版(1852)	147	136	0	5	
平安人物志 慶応3年版(1867)	102	94	0	2	
皇都書画人名録 弘化4年版(1847)	246	230	1	12	
京羽津根 文久3年版(1863)	15	15	0	0	



図1-1 『平安人物志』明和5年版(1768)の表紙(左)および画家の部(右)

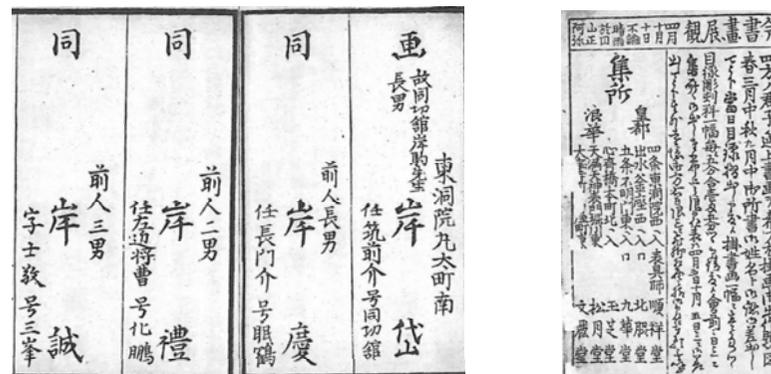


図1-2 『皇都書画人名録』弘化4年版(1847)(左)およびその奥付(右)

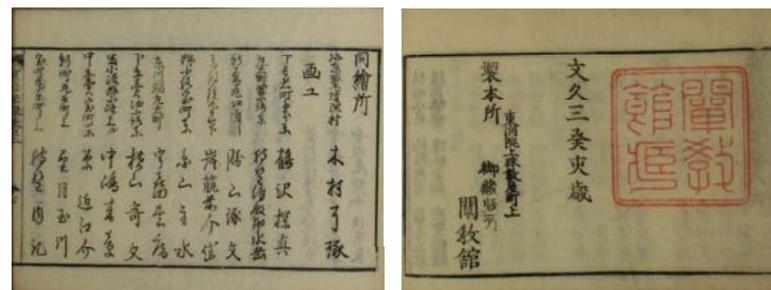


図1-3 『京羽津根』文久3年版(1863)(左)およびその奥付(右)

### 1-3 年代別における居住分布

#### 1-3-1 明和から天明における居住分布

表 1-2 は明和 5 年版、表 1-3 は安永 4 年版、表 1-4 は天明 2 年版に収録される絵師の一覧である<sup>14)</sup>。明和 5 年版および安永 4 年版によると、居住分布は全体に分散しており、その傾向は看取できない(図 1-4、図 1-5)。天明 2 年版によると、四条堺町から四条高倉には 10.3%<sup>15)</sup>、二条東洞院から二条新町には 13.8%の割合で絵師が居所を構えており、特定の通りに居所を構える傾向が天明から確認できる(図 1-6)。

#### 1-3-2 文化から天保における居住分布

表 1-5 は文化 10 年版、表 1-6 は文政 5 年版、表 1-7 は文政 13 年版、表 1-8 は天保 9 年版に収録される絵師の一覧である。文化 10 年版によると、四条富小路から四条室町には 11.8%、三条富小路から三条烏丸には 5.4%の割合で絵師が居所を構える。また、内裏周辺に居所を構える絵師が増加するが、詳細は 1-4 で述べる(図 1-7)。文政 5 年版によると、二条通には 9.4%、四条通には 8.5%の割合で絵師が居所を構える。特に二条両替町における居住分布が集中し、特定の地域に居所を構える傾向が文政から確認できる。また、内裏西方に居所を構える絵師が増加することも注目すべき傾向である(図 1-8)。文政 13 年版によると、四条通と二条通にはそれぞれ 9.2%、丸太町通と蛸薬師通にはそれぞれ 4.3%の割合で絵師が居所を構える。特定の地域に居所を構える傾向は、二条両替町の他に寺町丸太町、御池衣棚、四条東洞院において確認できる(図 1-9)。天保 9 年版によると、四条通には 9.5%、二条通には 6.6%、錦小路通には 5.8%、中立売通には 5.1%の割合で絵師が居所を構える。ここでも寺町丸太町、四条東洞院における居住分布が集中し、新たに空町中立売にも集中する(図 1-10)。

#### 1-3-3 弘化から慶応における居住分布

表 1-9 は『皇都書画人名録』弘化 4 年版(1847)(以下、「弘化 4 年版」とする)、表 1-10 は嘉永 5 年版、表 1-11 は『京羽津根』文久 3 年版(1863)(以下、「文久 3 年版」とする)、表 1-12 は慶応 3 年版に収録される絵師の一覧である。弘化 4 年版によると、四条通には 8.5%、二条通には 7.3%、丸太町通には 5.7%、六角室町から松原室町には 6.1%の割合で絵師が居所を構える。また、寺町丸太町と四条東洞院における集中に加え、寺町今出川と東洞院丸太町においても集中する。四条通以南に居所を構える絵師に注目すると、以前より増加することが確認できる(図 1-11)。嘉永 5 年版によると、室町通には 12.2%、四条通には 11.6%、二条通と丸太町通にはそれぞれ 6.8%の割合で絵師が居所を構える(図 1-12)。文久 3 年版によると、丸太町通には 16.7%の割合で絵師が居所を構える(図 1-13)。慶応 3 年版によると、四条通には 8.8%、二条通には 7.8%、三条通と丸太町通にはそれぞれ 5.9%の割合で絵師が居所を構え、さらに、鴨川周辺においても集中する(図 1-14)。

表 1-2 『平安人物志』明和 5 年版(1768)に収録される絵師の一覧

名前	流派	居所	名前	流派	居所
大西酔月	望月派	蛸薬師室町西入丁	島田元直	円山派	新町綾小路下ル町
円山応挙	円山派	四条麩屋町東へ入丁	調子武音		室町高辻上ル町
伊藤若冲		高倉錦小路上ル町	青山文起		七条伏見海道東へ入丁
池大雅*		智恩院袋町	建部凌岱		三条堀川東へ入町
与謝蕪村*			岡野石圃		烏丸夷川上ル町
副函谷		新町仏光寺下ル丁	長谷川青楓		八条東寺北門前
村田龍亨		高倉道場内	勝野范古		新町四条下ル町
鉅鹿民部		高倉竹屋町上ル丁	池玉欄*		祇園下河原

表 1-3 『平安人物志』安永 4 年版(1775)に収録される絵師の一覧

名前	流派	居所	名前	流派	居所
円山応挙	円山派	四条麩屋町西工入町	原在中	原派	葎屋町長者町下ル町
伊藤若冲		高倉錦小路上ル町	呉春	四条派	四条高倉西工入町
池大雅*		祇園下河原	鳥羽石隠		高辻諏訪町角
与謝蕪村*		仏光寺烏丸西工入町	源琦	円山派	六角室町東工入町
島田元直	円山派	新町綾小路下ル町	曾我蕭白		上京
池玉欄*		祇園下河原	倉屠龍		下立売黒門西工入町
俵山		誓願寺中西林庵	高東谷		真如堂前
望月玉仙	望月派	西洞院丸太町下ル町	温山*		
大友月湖		車屋二条上ル町	松隠*		
島雅修		黒門下立売上ル町	村上東洲	望月派	木屋町三条下ル町

表 1-4 『平安人物志』天明 2 年版(1782)に収録される絵師の一覧

名前	流派	居所	名前	流派	居所
円山応挙	円山派	四条堺町東入町	下村淳名		本阿弥屋舗内
伊藤若冲		高倉四条上ル町	芥川宗斐		西洞院中立売上ル町
与謝蕪村*		仏光寺烏丸西入町	三熊花顔		二条東洞院東入町
島田元直	円山派	新町綾小路下ル町	岸駒	岸派	高倉三条下ル町
望月玉仙	望月派	西洞院丸太町下ル町	長沢芦雪	円山派	御幸町御池下ル町
龍世華			紀棊亭		高辻新町西入町
大友月湖		車屋町二条上ル町	温山		誓願寺中
島雅修		黒門下立売上ル町	祖俊		相国寺中
原在中	原派	葎屋町長者町下ル	大島来禽		衣店竹屋町下ル町
鳥羽石隠		高辻諏訪町角	池玉欄*		祇園下河原
源琦	円山派	四条堺町東入町	岩漢嵩台		梨之木町
高東谷		河端二条下ル町	維明		相国寺光源院
村上東洲	望月派	木屋町三条下ル町	田中南山		堀川上立売下ル町
青木夙夜*		両替町二条下ル町	中村元緝		新町二条下ル町
山本守礼	山本家	西陣升屋町			





表 1-10 『平安人物志』嘉永5年版(1852)に収録される絵師の一覧

名前	流派	居所	名前	流派	居所	名前	流派	居所
土佐光平	土佐派	寺町丸太町	大角葉華	四糸島丸東	村瀬雙石	四糸派	鎌小路室町西	
土佐光清	土佐派	寺町丸太町	鈴木百年	鈴木派	山口運合		堺町裏川北	
土佐光文	土佐派	寺町丸太町	武沢揚岸		大宮一条南	泉崎南輔	新町四糸北	
鶴沢探龍	鶴沢派	下長者町千本東	横山幸溪	岸派	室町一条南	繪業師新町西		
狩野永岳	狩野派	室町丸太町東	岡本亮彦	四糸派	堺町四糸南	藤田来成	四糸・円山	
勝山琢文	勝山派	新鳥丸切通	岡本常彦	四糸派	東洞院四糸北	天高美	丸丸丸太町南	
岸岱	岸派	東洞院丸太町	吉田順祥	四糸派	四糸東洞院西	林其山	黒門中立亮南	
岸礼	岸派	室町四糸南	山田竜淵	四糸派	四糸川原町西	馬淵旭山	鎌馬口室町	
岸良	岸派	岩倉	塩川文馨	四糸派	繪業師新町西	磯田龜山	柳馬場四糸南	
岸蓮山	岸派	柳馬場二条南	森俊章	四糸派	御幸町御池北	中林竹洞*		
岸誠	岸派	岸岱三男父同居	大原春舟	四糸派	室町弘光寺南	小田海徳*	四糸派	
原在照	原派	中立亮室町東	林蘭雅	四糸派	塔之檜枝木丁	山本梅逸*		
梅戸在親	原派	小川中立亮北	駒井孝礼	円山派	丸丸丸太町南	岡本匡保*		
大口秀芳			石田逸翁	岸派	東洞院繪業師西	藤井彦彰*		
多村孝秀	円山派	高倉裏川北	吉江文雄	四糸派	小川繪業師北西	黒田西遊*		
島田雅香	円山派	釜座二条北	日根対山		両替町御池南	雨森敬亭*		
座田重就			武者小路室町西	森寛齋	円山派	堀川弘光寺北	桂吳鳳*	
下村一幸	円山派	御幸町二条北	森義章	四糸派	室町四糸北	桂青洋*		
河村瑞鳳	岸派	洛北市原	近沢百峰		御幸町錦小路北	原文琴*		
冷泉為基			西洞院下立亮北	笠川友泉	富小路二条南	伏日舒雄*		
福山清暉	四糸派	新町四糸北	木村梁舟	狩野派	四糸柳馬場西	秋吉錦水*		
中島来章	円山派	富小路錦小路北	山本燦齋	鶴沢派	寺町万寿寺南	義亮*		
吉村孝文	円山派	東中筋魚欄南	田辺春嶺		間之町魚欄北	清亮*		
長沢芦鳳	円山派	柳馬場四糸南	樋口懸江		不明門通魚欄	砂川柳絲*		
円山応立	円山派	姉小路高替町	佐々木懸水		東洞院錦小路南	中林竹溪*		
高倉在孝	原派	六軒町一条北	八木奇峰	四糸派	新町三糸南	脇坂湖山*		
望月玉川	望月派	新町丸太町北	岸順堂	岸派	高替町柳小路北	住日鶴仙*		
狩野永朝	狩野派	室町丸太町南	早藤春英	四糸派	六角塾屋町角	後藤田南溪*		
高橋正順			東洞院錦小路南	石田徳汀	鶴沢派	東中筋五糸南	前親久江*	
村上松蔭	岸派	錦小路西洞院東	海北友雄	海北家	塔之檜	室町繪堂*		
小川芦汀			一条室町西	上田桃楼	四糸派	伏見西替町	生川丸春*	
蒲生竹山	円山派	西六条	中川雲屏		仏光寺柳馬場西	吉本頑山*		
柴田仙溪	四糸派	東洞院裏川北	楯友隆	鶴沢派	東中筋五糸南	藤重善山*		
吉田公均	四糸派	堺町二条南	三谷五峰	四糸派	鎌小路室町西	菅草逸峰*		
藤村春汀			山科	高松圭隣		間之町二条南	沢呉成*	
原田左門			北嵯峨	綿田梅坡		広小路寺町東	窪田松濤*	
沢渡精奇	四糸派	四糸島丸東	仲尾菊翁	四糸派	東洞院七糸南	山本梅屋*		
中村春亭	四糸派	室町松原南	松村月樵	四糸派	四糸絵屋町東	原文肇*		
木村秀慈			柳馬場五糸北	林耕雲	四糸派	十丈坊辻子	俊玉*	
岸龍山	岸派	柳小路柳馬場東	長谷川玉峰	四糸派	柳馬場三条北	照堂*		
竹村文班	四糸派	堺町三糸北	窪田雷徳		釜座裏川北	熊阿*		
津田呉輔			新町今出川南	山口素岳	円山派	富小路松原南	忍達*	
吉坂徳隆	円山派	六角島小路西	山口旭峰	四糸派	油小路御池南	権岳*		
勝山琢如	勝山派	間之町二条北	箕田露峰		御室	瑞高*		
呉春園	岸派	一条室町十丈坊辻子	藤木斐洲		鎌訪町五糸南二町	永常*		
谷口華明	岸派	室町一条北	園村雷峰		高替町柳小路南	一風*		
中島華陽	岸派	聖護院村	小野玉嶺	望月派	衣柳柳小路北	田辺玄々*		
渡辺丹峰	円山派	東中筋柳前通南	園分文友	四糸派	松原愛宕寺中	大倉啓齋*		
黒田梅園			中川江雲		新橋木町丸太町南	高井文溪*		

表 1-11 『京羽津根』文久3年版(1863)に収録される絵師の一覧

名前	流派	居所	名前	流派	居所
土佐光文	土佐派	寺町丸太町上	宇喜田松庵		東川端丸太町
土佐光武	土佐派	寺町丸太町上	横山清暉	四糸派	下立亮油小路東
木村了塚		洛東聖護院村	中島来章	円山派	富小路錦小路上
鶴沢探真	鶴沢派	下長者町千本東	原近江介	原派	中立亮室町東
狩野永岳	狩野派	丸太町富小路東	望月玉川	望月派	新町丸太町上
勝山琢文	勝山派	新鳥丸切通	狩野永朝	狩野派	室町丸太町上
岸岱	岸派	東洞院丸太町下	長澤芦鳳	円山派	洛東靈山下
円山応立	円山派	姉小路室町東			

表 1-12 『平安人物志』慶応3年版(1867)に収録される絵師の一覧

名前	流派	居所	名前	流派	居所	名前	流派	居所
土佐光文	土佐派	寺町丸太町	武沢揚岸		大宮一条南	蒲生鳩峰		西六条
土佐光清	土佐派	交光文と同居か	岡本亮彦	四糸派	堺町四糸北	渡辺丹雄	円山派	
土佐光武	土佐派	光文宅の隣	岡本常彦	四糸派	木蓮町四糸南	西山元鳳		新門前細手東
鶴沢探龍	鶴沢派	下長者町千本東	鈴木百年	鈴木派	四糸高倉西	岡嶋清庵	四糸派	富小路柳小路北
岸礼	岸派	伏見	塩川文馨	四糸派	木蓮町四糸三丁南	熊谷直彦	四糸派	高倉三条角
岸誠	岸派	東洞院丸太町南	林蘭雅	四糸派	塔之段	前川五嶺	四糸派	堺町松原下
岸儀	岸派	父岸礼と同居か	森森彦	四糸派	高替町三条北	前川文嶺	四糸派	父五嶺宅に同居
原在照	原派	中立亮室町東	木村梁舟	狩野派	四糸柳馬場西	竹川友広	円山派	
梅戸在親	原派	小川中立亮北	田辺春嶺		間之町魚欄北	樋口葉岳		父葉江の裏六条に同居
多村孝秀	円山派	高倉裏川北	樋口翠江		東六条	岡本匡保*		上賀茂
下村良進	円山派	東木屋町二条南	佐々木懸水		洛東八坂	黒田西徳*		百万遍屋敷
島田雅香	円山派	釜座二条北	八木奇峰	四糸派	衣柳御池南	清亮*		双林寺大雅堂
高倉在孝	原派	六軒町一条北	林蘭雅	四糸派	十文字辻子	日根対山*		
小川芦汀			一条室町西	長谷川玉峰	四糸派	柳馬場三条北	名草逸峰*	
蒲生竹山	円山派	西六条	有山旭峰	四糸派	油小路御池南	山本梅屋*		丸丸丸光寺南
柴田仙溪	四糸派	東洞院裏川北	藤木斐洲		鎌訪町五糸南二丁	永常*		一条繪屋町
藤村春汀			山科	岡村雲峰		高替町柳小路南	一風*	
原田左門			北嵯峨	小野玉嶺	望月派	衣柳柳小路北	真亮*	
沢渡精奇	四糸派	四糸島丸東	園分文友	四糸派	松原愛宕寺中	原文肇*		御幸町二条南
中村春亭	四糸派	交光齋と同居	中川江雲		新橋木町丸太町	大倉啓齋*		
木村秀慈	四糸派	室町松原南	村瀬双石	四糸派	上京	高井文溪*		高辻柳馬場西
竹村文班	四糸派	柳馬場五糸北	天高美		丸丸丸太町南	山口碧海*		御幸町二條角
津田呉輔	四糸派	堺町三糸北	林其山		黒門中立亮南	重春徳*		柳馬場二條北
浦田貞輔			新町今出川南	馬淵旭山	鞍馬口室町	上野雪岳*		丸丸丸光寺南
吉坂徳隆	円山派			青龍山	岡嶋	森香軒*		大宮三糸北
中島有章	円山派	父来章と同居	川端玉堂	円山派	四糸東洞院西	中西耕石*	四糸派	清久三丁目
勝山琢如	勝山派	間之町二条北	小島彫斎		堺町六角南	中西耕巖*		木蓮町三条北
呉春園	岸派	一条室町十丈坊辻子	高橋上順		東洞院錦小路南	中西松石*	四糸派	龍井奥柳南
谷口華明	岸派	室町一条北	大角有隣		洛東寺中	大赤補蝶*		
中島華陽	岸派	聖護院村	岸竹堂	岸派	柳馬場柳小路北	張紅園*		柳馬場二条北

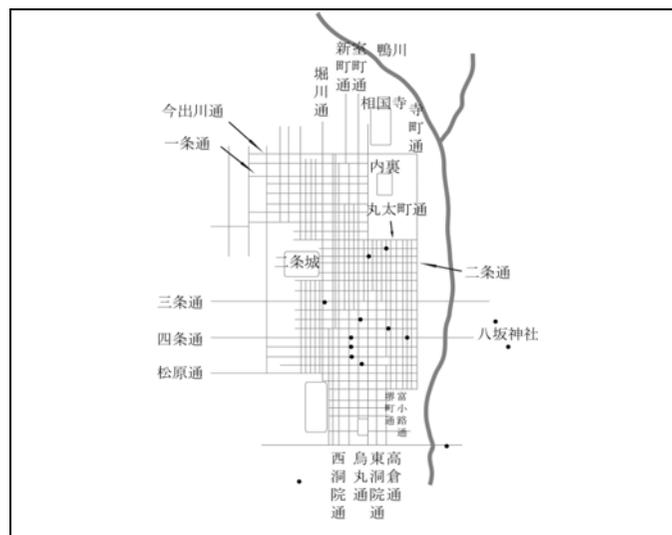


図 1-4 『平安人物志』明和5年版(1768)にみえる居住分布<sup>16)</sup>

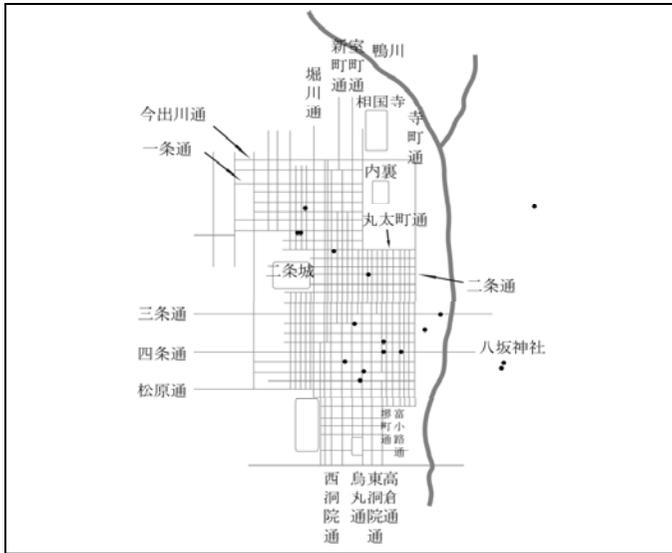


図 1-5 『平安人物志』安永 4 年版 (1775) にみえる居住分布

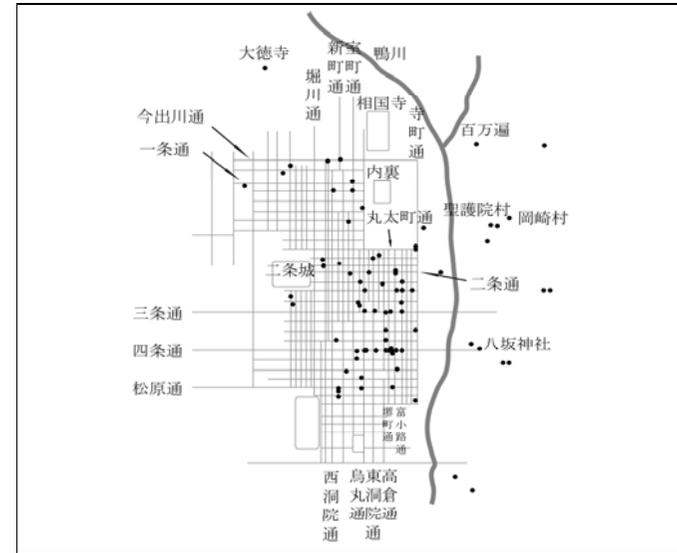


図 1-7 『平安人物志』文化 10 年版 (1813) にみえる居住分布

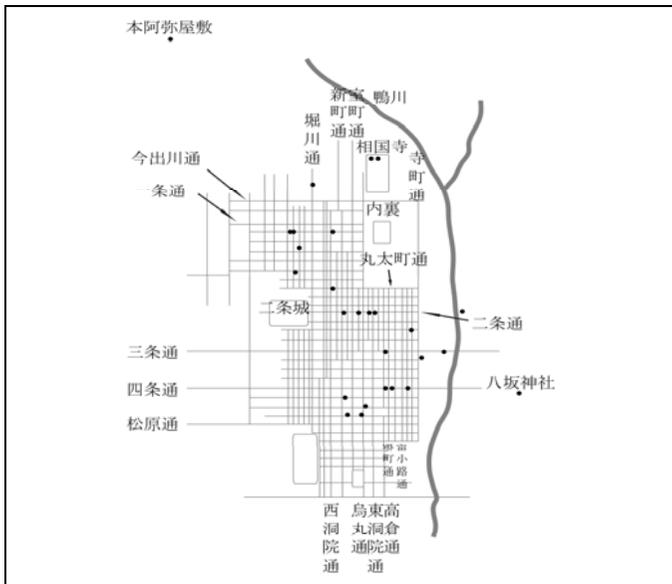


図 1-6 『平安人物志』天明 2 年版 (1782) にみえる居住分布

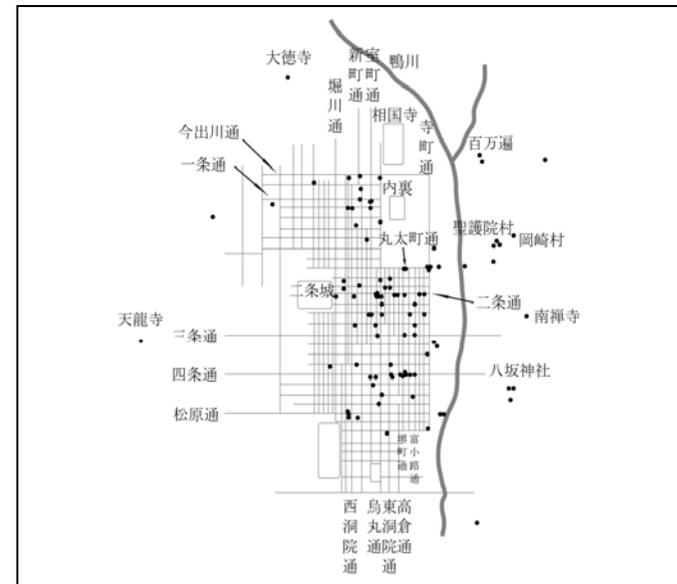


図 1-8 『平安人物志』文政 5 年版 (1822) にみえる居住分布

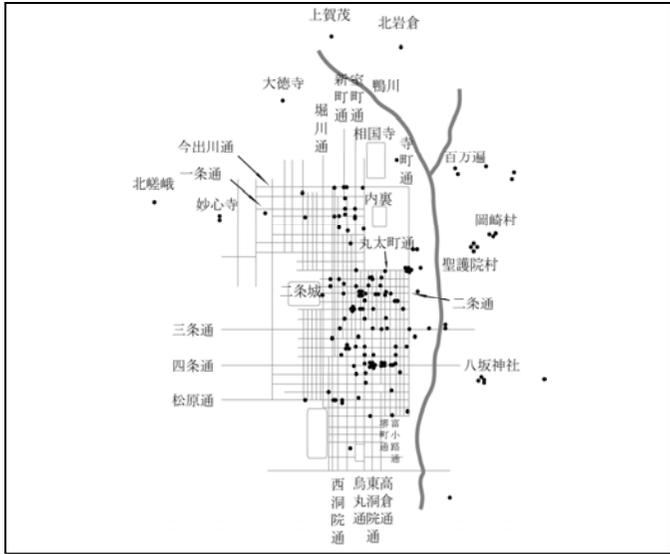


図 1-9 『平安人物志』文政 13 年版 (1830) にみえる居住分布

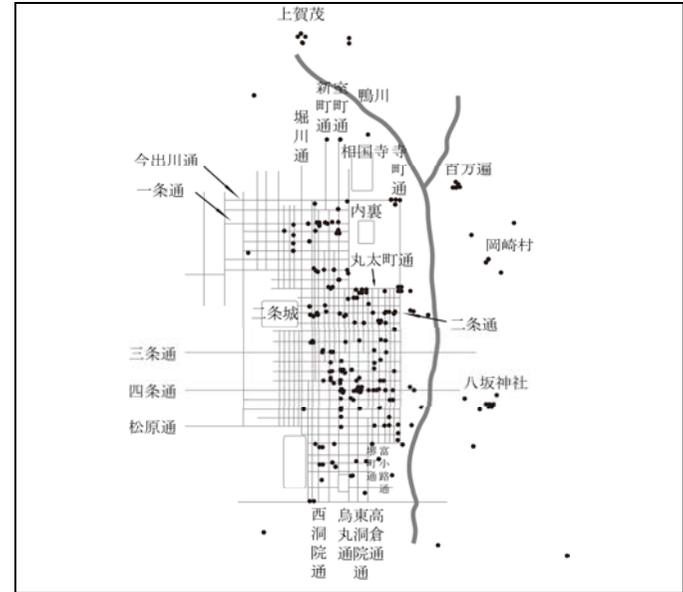


図 1-11 『皇都書画人名録』弘化 4 年版 (1847) にみえる居住分布

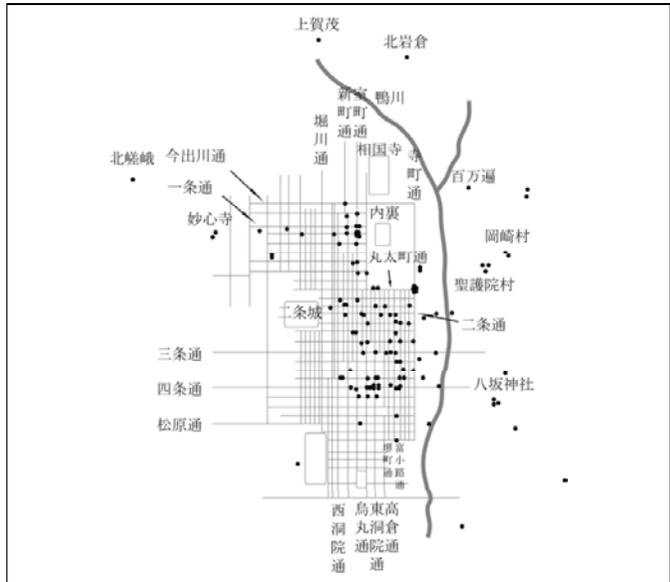


図 1-10 『平安人物志』天保 9 年版 (1838) にみえる居住分布

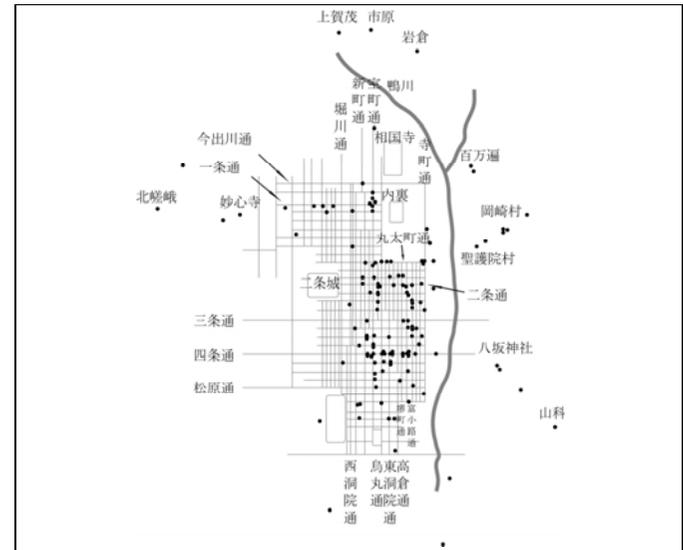


図 1-12 『平安人物志』嘉永 5 年版 (1852) にみえる居住分布

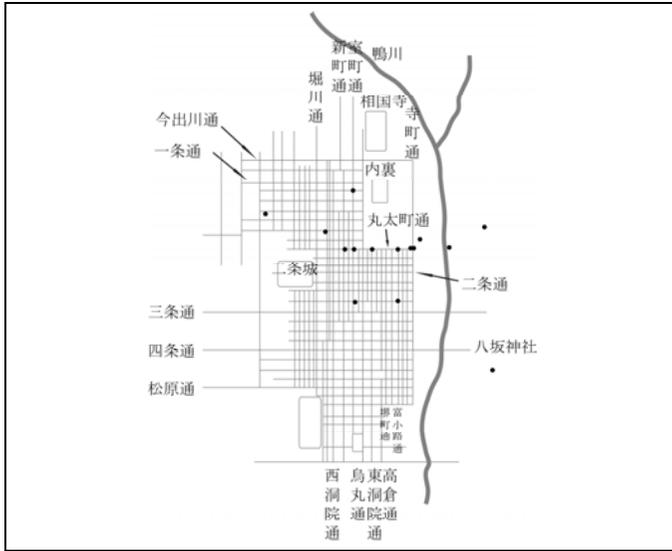


図 1-13 『京羽津根』文久3年版(1863)にみえる居住分布

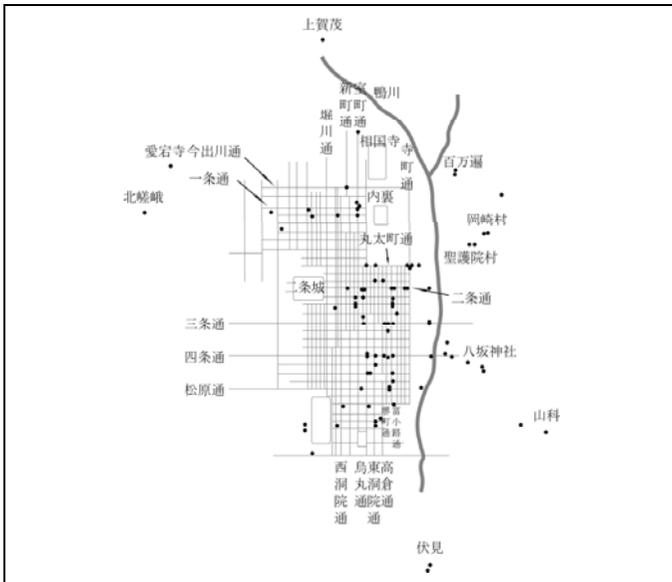


図 1-14 『平安人物志』慶応3年版(1867)にみえる居住分布

#### 1-4 内裏周辺における居住分布

『平安人物志』『皇都書画人名録』『京羽津根』によると、絵師が内裏周辺に居所を構えはじめるのは文化10年版以降である。しかし、御用絵師は文化10年版から収録されるようになるが、実際にはそれ以前から京都において居所を構えており、その場所は内裏周辺であった可能性がある。一方、町絵師が内裏周辺に居所を構えるようになったのは、文化10年版からである。その背景には、収録人数が29人(天明2年版)から93人(文化10年版)に増加したことも考えられるが、寛政度内裏造営への参加が主な要因であると推測される。

四条派は、四条通を中心に居所を構えていたことにその名前の由来がある。収録人数が137人(天保9年版)から246人(弘化4年版)に増加するが、弘化4年版において内裏北東角にあたる寺町今出川と内裏南方界限に居所を構え、今出川通りにまで居住分布が広がることがわかる。山山派は文化10年版から天保9年版によると、内裏西方にあたる下長者通と出水通に居所を構える。弘化4年版によると、居住分布は内裏の西方から南方へ移動する。岸派は文化10年版によると、内裏南方にあたる丸太町東洞院に居所を構える。文政5年版から慶応3年版によると、丸太町東洞院のほか、内裏西方にあたる一条通と中立売通界限にも居所を構える。中立売通界限には文化10年版によると、原派も居所を構える。望月派は文化10年版から嘉永5年版によると、居所の転移がみられるが内裏南西に居所を構える。狩野派<sup>17)</sup>は文化10年版から文政13年版によると、内裏の西方と南方に居所を構えるが、天保9年版と嘉永5年版によると、内裏南西へ移動する。上佐派は文化10年版から慶応3年版によると、一貫して内裏東南角にあたる寺町丸太町に居所を構える。鶴沢派は弘化4年版によると、内裏西方にあたる下立売通に居所を構える。

以上、内裏周辺の居住分布について、年代をおって詳細に跡付けた。これにより文化から天保において、絵師は内裏の南方と西方に居所を構えていたが、弘化以降、内裏西方に居所を構える絵師は減少し、内裏南方に居所を構える絵師は増加することが明らかになった(図1-15)。

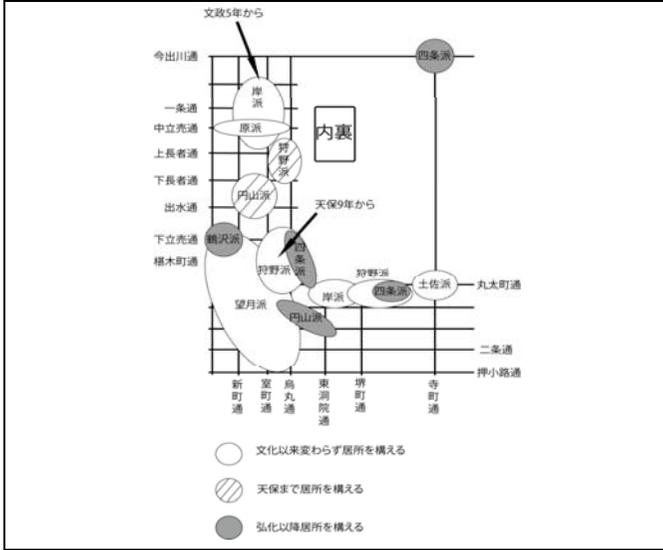


図 1-15 内裏周辺にみえる絵師の居住分布

1-5 郊外における居住分布

表 1-2 から表 1-12 において郊外<sup>18)</sup>に居所を構える絵師の一覧を表 1-13 に示した。絵師が郊外に居所を構えるのは、明和 5 年版からみられる。特に祇園界隈は池大雅や池玉瀾が居所を構えたのをはじめ、多くの絵師が居所を構えることになる。次いで聖護院、百万遍、岡崎村、伏見といった地域が多く、これらはいずれも文化 10 年版からである。その他、北方では大徳寺、上賀茂、岩倉、西方では妙心寺、北嵯峨、天龍寺、愛宕寺などが、こちらも文化以降みられる。郊外に居所を構える傾向は文人画家によくみられ、次いで四条派や岸派といった町絵師にみられる。一方、御川絵師では鶴沢派の竹内重方と土佐派の垣枝元章のみであり、御川絵師が郊外に居所を構えることは稀である。

このように郊外における居住分布は、文人画家や町絵師らが祇園界隈、聖護院村、百万遍、岡崎村などの鴨東地区や伏見、上賀茂、岩倉を中心として文化以降、増加傾向にあることがわかる (図 1-16)。

表 1-13 郊外に居所を構える絵師の一覧

名前	流派	居所	名前	流派	居所	名前	流派	居所
『平安人物志』明和5年版(1768)								
池大雅*	聖護院	聖護院	恒枝元章	土佐派	岡崎村	一風*	岸派	落東八百瀬
曹山文起	七条伏見海邊	入丁	谷口華明	岸派	洛北松崎	中林竹洞*	岸派	東山真如堂前
長谷川青楓	八条東寺北門前		岡本匡保*		上賀茂	香川景嗣		中岡寺
池玉瀾*	祇園下河原		龍井雪堂*		聖護院村	伏田斎庵*		中岡寺
『平安人物志』安永4年版(1775)								
池大雅*	祇園下河原	今大路悠山*	聖護院村		南谷坊有輝	岸派	上野崎	
池玉瀾*	祇園下河原	黒田西郷*	百万遍屋敷		羽書可亮	四条派	伏見稲荷社内	
高峯谷	貴如堂前	原文琴*	岡崎		真福院		紫野大徳寺	
『平安人物志』天明2年版(1782)								
下村淳名	本町外屋敷内	月峰*	東山双林寺		柴田仙溪	四条派	知恩院寺門前切通東	
池玉瀾*	祇園下河原	明堂*	大徳寺中		教亮*		東山双林寺傍	
『平安人物志』文化10年版(1813)								
原在中	原派	聖護院村	奇堂*		双林寺門前雲霞居	奇名鎌令	東山双林寺	
山口素綱	円山派	祇園栄町	高亮*		東山双林寺		双林寺前雲霞町東行當	
田中訪言	土佐派	伏見街道	清峯*		唐双林寺境地大徳堂	宮川白峰		
上田耕夫	円山派	祇園南	雀堂*					
甲斐文庵	望月派	白川御橋宮町	器外*		妙心寺中			
竹内重方	鶴沢派	百万遍竹門屋敷			『平安人物志』天保9年版(1838)			
世古鶴翠	聖護院村	岸駒	岸派	北宮倉	原田左門	北嵯峨		
三宅重見	上岡崎村	徳田東民	落東円山		中島華勝	岸派	聖護院村	
三谷五雲	円山派	藤村春汀	山科		中林竹洞*		真如堂前	
相応*		奥山永観堂	原田左門		岡本匡保*		上賀茂	
玉瀾*		同前(東山水観堂)	東東賣		黒田西郷*		百万遍屋敷	
月峰*		東山双林寺	谷口華明	岸派	洛北松崎	原文琴*	岡崎	
奇堂*		双林寺門前	中島華勝	岸派	聖護院	伏田斎庵*	岡崎	
明堂*		紫野大徳寺中 妙楽院	岡本匡保*		上賀茂	齋亮*	双林寺	
玉瀾*		東福寺中	龍井雪堂*		聖護院村	清亮*	双林寺大徳堂	
『平安人物志』文政5年版(1822)								
上田耕夫	円山派	南禅寺傍	今大路悠山*		聖護院	原文琴*	聖護院新道	
三谷五雲	円山派	百万遍竹門屋敷	原文琴*		岡崎	奇堂*	妙心寺中	
相応成	四条派	嵯峨天龍寺傍	伏田斎庵*		岡崎	瑞高*	伏見街道十丁南	
甲斐文庵	望月派	白川御橋宮町	月峰*		双林寺	一風*	落東百万遍	
竹内重方	鶴沢派	百万遍竹門屋敷	高亮*		双林寺	田辺玄々*	奥山山吹町	
世古鶴翠	聖護院村	清亮*	双林寺在大徳堂		『平安人物志』慶応3年版(1867)			
三宅重見	上岡崎村	玉瀾*	東福寺中		岸礼	岸派	伏見	
恒枝元章	土佐派	岡崎村	徳堂*		妙心寺中	浮世	交岸礼と同居か	
巨勢庸信	聖護院村	器外*	妙心寺中		藤村春汀	山科		
中林竹洞*	聖護院村	辰阿*	雲山		原田左門	北嵯峨		
広瀬花隠*	高台寺前	『皇都書画人名録』弘化4年版(1847)						聖護院村
黒田西郷*	百万遍屋敷	山本雪泉	祇園社内西梅坊		佐々木藍水		落東八坂	
明堂*	大徳寺中	駒井喜晴	四条派	下河原	國分文友	四条派	松原愛宕寺中	
玉瀾*	東福寺中	正智院	四条派	落東雲山	書籠山		岡崎	
月峰*		富禰道八		五条坂若宮八幡西南	大角有隣		落東吉田	
奇堂*		双林寺門前雲霞居	羽書可亮*		北百万遍屋敷	岡本匡保*	上賀茂	
器外*		妙心寺中	重福堂*	岸派	北百万遍屋敷	黒田西郷*	百万遍屋敷	
『平安人物志』文政13年版(1830)								
岸駒	岸派	往北岩倉	山本鶴雪*		上賀茂初官	中林竹洞*	岡崎	
岸連山	岸派	萬北山	岡本棟隆		上賀茂初官	日根対山*	聖護院村	
甲斐文庵	望月派	白川御橋宮町	岡本秀壽	四条派	上賀茂初官	一風*	百万遍	
世古鶴翠	聖護院村	藤木保必	聖護院村		真亮*		落東双林寺	
三宅重見	上岡崎村	山本彦彦	四条派	上賀茂初官				
藤村春汀	山科黒沙門堂	河村瑞鳳	岸派	市原野				
原田左門	北嵯峨	河村文隆	岸派	市原野				

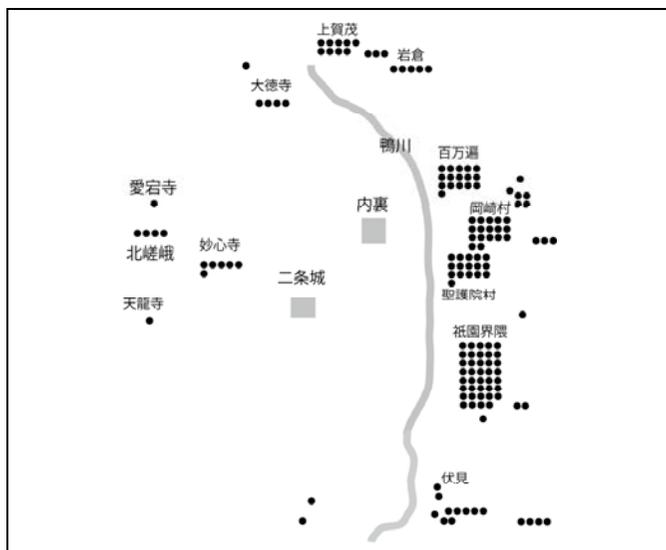


図 1-16 郊外にみえる絵師の居住分布

## 1-6 小結

以上、絵師の居住分布について、その傾向を年代順に看取した。さらに、これらを通して内裏周辺と郊外における居住分布の傾向も看取した。本章は次のようにまとめることができる。

- 1) 特定の通りに居所を構える傾向が天明から確認でき、文化以降その傾向が強くなる。主な通りは、二条通・四条通・三条通・丸太町通である。
  - 2) 特定の地域に居所を構える傾向が文政から確認できる。主な地域は、二条両替町・寺町丸太町・四条東洞院である。
  - 3) 弘化以降、四条通以南に居所を構える絵師が増加する。
  - 4) 内裏周辺では、文化から天保において絵師は内裏南方と西方にそれぞれ居所を構えていたが、弘化以降、内裏西方に居所を構える絵師は減少し、内裏南方に居所を構える絵師は増加する。
  - 5) 郊外に居所を構える絵師は明和から確認でき文化以降、増加傾向にある。主な地域は祇園界隈、聖護院村、百万遍、岡崎村といった鴨東地区や伏見である。また、郊外に居所を構える絵師は、文人画家に多くみられ、町絵師では四条派、岸派の絵師が多く、御用絵師はあまりみられなかった。
- 1)については、『平安人物志』の収録数も考慮すべきではあるが、天明2年版から確認で

きることを考えると、文化10年版以降の収録数増加がその傾向に拍車を掛けたと考えられる。四条通における集中は、四条派の存在が大きく関与するものと考えられるが、文化までは円山派の存在も軽視することはできない。また、四条通と室町通への集中は並木氏が指摘しているが<sup>10)</sup>、四条通は天明から、室町通は弘化から集中することが本章で明らかになった。

2)については、文政5年版から弘化4年版にかけて確認できる。御池衣棚と寺町丸太町を除き、集中する通りの範囲内である。寺町丸太町には上佐派が、四条東洞院には四条派が、東洞院丸太町には岸派が集中し、二条両替町・御池衣棚・室町中立売には流派に関係なく集中する。土佐派は寺町丸太町に居所を構える傾向があった、というように流派による居住分布の傾向が存在することを前者によってうかがえ、第2章で詳細な検討を加える。

3)に関して、四条通以南に居所を構える絵師の割合は、天保9年版まで10%を超えないが、弘化4年版以降、15%を超え、居住分布図と2つの視点から確認できる。

4)の内裏周辺における居住分布に関して、天明2年版と文化10年版の両版に収録される4人の絵師のうち、岸派の岸駒と円山派の島田元直が内裏周辺に移動し、かつこの2人は寛政度内裏造営に参加している。このように、内裏造営に参加した絵師が内裏周辺に移動しており、文化以降、多くの町絵師が内裏御用を勤めることに比例し、内裏周辺に居所を構える絵師が増加することから、内裏造営への参加が絵師の居住地に影響を与えた面があるのではないかと考えられる。これは西陣・伏見など京都における居住地形成とは異なるあり方が、近世の絵師居住の動向には確認できる、という意味で注目される。この絵師の居住地と内裏造営、つまりパトロンとの関係については第3章で扱う。

5)に関して、文人画家の中には僧侶も含まれ、彼らが郊外に居所を構えるのは、寺地が郊外に存在したためであるが、聖護院村や岡崎村などには僧侶でない文人画家や町絵師が居所を構える。このように近世から郊外に居所を構える風潮がみられ、近代以降にみられる郊外住宅地形成の発芽として捉えることができないだろうか。この郊外居住については第4章で扱う。

## 註

- 1) 森純三・中島理寿編『近世人名録集成』第一巻、勉誠社、1976年所収。他に、国際日本文化研究センターがウェブ上で公開している「平安人物志データベース」があり、適宜参照した。また、書名には『平安人物志』と『平安人物誌』の二通り表記があり、外題に限れば、初期は「志」、後期は「誌」となるが、見返・目次等では一つの版でも表記が分かれることも多い。本研究では明和5年版の外題・見返にならって『平安人物志』に統一した。
- 2) 森純三・中島理寿編『近世人名録集成』第四巻、勉誠社、1976年所収。
- 3) 『新撰京都叢書』第二巻、臨川書店、1986年所収。また、書名には『京羽津根』と『花洛羽津根』の2

通りの表記があるが、本研究では『京羽津根』に統一した。

- 4) 『京の絵師は百花繚乱』京都文化博物館、1998年において、『平安人物志』に収録される絵師の分布地図が作成された (pp. 316, 317, 318) が、明和から天明で1つの図、文化から文政で1つの図、天保から慶応で1つの図というように、3版をまとめた分布地図であり収録される絵師すべてを網羅していない。本研究で作成した分布地図は、居所が判明する絵師をすべての版ごとに反映させた。
- 5) 『平安人物志』については、1970年代に小笹喜二氏 (小笹喜二編著、平春生補稿『平安人物志 短冊集影』思文閣、1973年)、竹林忠男氏 (『平安人物志』およびその書家について、京都府立総合資料館『資料館紀要』2号、1973年)、宗政五十緒氏 (京都の文化社会—『平安人物志』化政版と京都— (林辰彦二郎編『化政文化の研究』岩波書店、1976年)) などの研究がある。
- 6) 並木誠十「近代京都における画家の居所—中世から近代への展開」(研究代表者中川理『郊外住宅地開発を導いた学術・芸術・芸能に関わる人々の居住動向に関する歴史的研究—近代京都を事例として—』、課題番号14550636、平成14年度～平成15年度 科学研究費補助金 基盤研究 (C) (2)、2004年3月)
- 7) 田島達也『『平安人物志』を読む』註4前掲。
- 8) 久保智康「京都の鏝師たち」(『日本の美術10号、No. 437』至文堂、2002年)
- 9) この人物については全く不明である。『平安人物志』の初版が出版された明和5年(1768)から9版目にあたる慶応3年(1867)では約100年間の時代差があり、最初の編者は途中で没しているはずである。この「弄翰子」は1代ではなく、何代かに渡って引き継がれた名前だと考えられる。
- 10) 天明8年(1788)1月、宮川町岡栗辻子(京都市東山区)の民家から出火したことに始まる。焼失地域は、南北は鞍馬口から七条通までの約6キロ、東西は鴨川の東から千本通までの約4キロにおよんだ。寛政度内裏造営はこの大火によって焼失した際の再建であり、これまで内裏で従事していた狩野派、土佐派などの御用絵師だけでなく四条派、円山派、岸派といった町絵師も参加するようになる。
- 11) 「一定の報酬を受け、専属して仕事をする画家。江戸時代からいわれたことばで、特に幕府に召し抱えられた絵師をさす。」(『日本国語大辞典 第2版』第5巻、小学館、2001年) 本研究において御用絵師とは狩野派、土佐派、鶴沢派の絵師のことを指す。
- 12) 「市井にあって絵画を描くことを職とする人。また、その人を卑しめていう語。」(『日本国語大辞典 第2版』第12巻、小学館、2001年) 本研究において町絵師とは四条派、円山派、岸派、原派、望月派の絵師や、どの流派にも所属しない絵師のことを指す。
- 13) 武川庸二郎「寛政度禁裏御所造営における絵師の選定について」(『近世御川絵師の史的研究—幕藩制社会における絵師の身分と序列—』思文閣、2008年)
- 14) 発行年順に表を作成し、左に収録される絵師の名前を、中央に絵師が所属する流派を、右に居所を示した。名前の表記は、『平安人物志』に登場する画家一覧(註4前掲)に従ったが、『皇都書画人名録』『京羽津根』では原文のまま川いたものもある。また、表1-3、表1-4に「望月玉仙」とあるが、原文は上段に「望玉蟾」、下段に「望月与五郎」である。初代望月玉蟾は宝暦3年(1753)もしくは同5年(1755)に没しており、「画家解説」(註4前掲)においても、望月玉仙と判断されているので、本研究もそれに従った。同様の事例が他にもあり適時、判断し表を作成した。流派を特定するにあたり、「画家解説」「流派系図」(共に註4前掲)、『日本書画名家辞典』柏書房、1981年、『辞典叢書15

日本書画人名辞書』東出版、1996年を参照した。また、『皇都書画人名録』において、例えば、「○○先生門人」と記載のある絵師については、師匠の流派が判明している場合、同じ流派とした。さらに、流派欄の表記については、「流派系図」(註4前掲)の表記に従い、「○○派」と「○○家」の二種類ある。名前の右側に「\*」がある絵師は文人画家であることを示す。『平安人物志』において、明和5年版から天明2年版では文人画家とそうでない絵師が一括して扱われており、文化10年版では上巻に登場する絵師が文人画家に相当し、文政5年版以降では文人画家の項目がある。中央が空欄の絵師はどの流派にも所属しない絵師であることを示す。居所が空欄である絵師は、『平安人物志』『皇都書画人名録』『京羽津根』において不記載であった。

- 15) 算出方法は、「(ある通りに居所を構える絵師の人数) / (収録数) × 100 (%)」である (小数点第2位を四捨五入)。この場合、天明2年版の収録数は29人で、そのうち3人が四条塚町から四条高倉に居所を構える。よって、その割合は「3/29 × 100 = 10.3%」となる。以下、同様の手順で割合を算出した。
- 16) 天保2年(1831)に作成された地図(考正:池田東籬亭、画:中邑有樂齋、版元:文叢堂竹原好兵衛)を使用して作成した(図1-5から図1-16についても同様)。
- 17) 狩野山楽を祖とする京狩野派。
- 18) 郊外の定義については第4章を参照。
- 19) 註6前掲。

## 第2章 近世京都における絵師の流派別居住傾向

### 2-1 はじめに

本章の目的は、近世京都における絵師の居住地について、その実態を解明する端緒として、流派別に居住分布の傾向を看取り、さらに、流派ごとの居住動向とパトロンとの関係性について、若干の考察を加えることにある。流派による居住分布の傾向が存在するという第1章での仮定に基づいて、詳細な分析を行うことで、その回答を得る。

表 2-1 は『平安人物志』『皇都書画人名録』『京羽津根』における絵師の収録人数と居所が特定できる人数を、流派別および文人画家についてまとめたものである<sup>1)</sup>。文人画家の収録人数が最も多い。流派別においては四条派、円山派、岸派といった町絵師が多く、御用絵師の収録人数はわずかである。

表 2-1 流派別および文人画家の収録人数

	四条派		円山派		岸派		原派		望月派	
	収録人数	居所特定								
平安人物志 明和5年版(1768)	0	0	2	2	0	0	0	0	1	1
平安人物志 安永4年版(1775)	1	1	3	3	0	0	1	1	2	2
平安人物志 天明2年版(1782)	0	0	4	4	1	1	1	1	2	2
平安人物志 文化10年版(1813)	7	7	24	20	6	5	5	3	2	2
平安人物志 文政5年版(1822)	11	10	16	13	12	12	6	4	2	2
平安人物志 文政13年版(1830)	20	19	13	12	19	19	6	4	2	2
平安人物志 天保9年版(1838)	17	16	13	11	16	15	4	4	2	2
平安人物志 嘉永5年版(1852)	27	25	13	12	14	14	3	3	2	2
平安人物志 慶応3年版(1867)	23	19	13	10	7	7	3	3	1	1
皇都書画人名録 弘化4年版(1847)	63	53	21	20	29	28	4	4	6	5
京羽津根 文久3年版(1863)	0	0	3	3	1	1	1	1	1	1

	狩野派		土佐派		鶴沢派		文人画家	
	収録人数	居所特定	収録人数	居所特定	収録人数	居所特定	収録人数	居所特定
平安人物志 明和5年版(1768)	0	0	0	0	0	0	3	2
平安人物志 安永4年版(1775)	0	0	0	0	0	0	5	3
平安人物志 天明2年版(1782)	0	0	0	0	0	0	3	3
平安人物志 文化10年版(1813)	2	2	6	6	5	3	19	18
平安人物志 文政5年版(1822)	4	3	8	8	4	3	31	25
平安人物志 文政13年版(1830)	4	4	6	6	3	2	51	42
平安人物志 天保9年版(1838)	3	3	5	5	3	2	47	38
平安人物志 嘉永5年版(1852)	3	3	3	3	4	4	40	35
平安人物志 慶応3年版(1867)	1	1	3	3	2	2	26	22
皇都書画人名録 弘化4年版(1847)	2	2	4	4	6	6	42	40
京羽津根 文久3年版(1863)	2	2	2	2	1	1	0	0

2-2 では、町絵師の居住地の傾向を分析する。具体的には四条派、円山派、岸派、原派、望月派の絵師を扱う。これらの流派は近世の中頃から現れた流派であり、彼らによって画壇の勢力図が塗り替えられた。

2-3 では、御用絵師の居住地の傾向を分析する。具体的には狩野派、上佐派、鶴沢派の絵師を扱う。彼らは朝廷や幕府のお抱え絵師であり、揮毫することによって御用を務めた。その起源は最も古い上佐派の場合であれば14世紀まで遡り、遠祖になると11世紀まで遡ることができる。

2-4 では、文人画家の居住地の傾向を分析する。文人画とは、文人すなわち中国の士大夫階級の人々が描いた絵画のことである。彼らは学問的修養の一環として芸術を嗜み、文人画も教養的行為として位置付けられ、世俗から逸脱して精神的な高みを旨指すことを基本においている。これが日本に伝わり、日本独自の発展を遂げた。よって日本の文人画と中国のそれは同様ではなく、日本では文人という階層自体、確立しているとはいえないため、拙き手の階層も同様ではない。

## 2-2 町絵師

### 2-2-1 四条派

四条派の開祖呉春（松村月溪）は、宝暦2年（1752）3月15日、京都の堺町四条下る町に住む金座年寄役松村恒程の長男として生まれた。名は豊昌・石・白、字は裕甫・可軒・允白、通称は文蔵、蕉雨・月溪・二葉堂などと号す。呉春と称するようになったのは、天明2年（1782）の春で、摂津呉服村の某酒造家に寄寓しており、その年の正月「呉具区村で春を迎えた」ことに囚んだものといわれている。はじめ大西酔月に師事し、その後、与謝蕪村について南画と俳諧を学ぶ。蕪村没後、円山応挙を慕って弟子になろうとしたが、応挙は断り、その代りに親友として接した。文化8年（1811）、59歳で逝去する。墓所は金福寺（京都市左京区一乗寺）。

四条派という名前の由来は、呉春が四条東洞院に居所を構えており、またその門人たちの多くが四条通界隈に居所を構えたことにある。自然写生を重視し、身近で親しみ深い上方の自然と市民的情感をこめた作風により、円山派と共に京派・写生派ともよばれ、広く上方新興市民層の支持を得た。

表2-2は、『平安人物志』『皇都書画人名録』『京羽津根』に収録される四条派の絵師を一覧にしたものである<sup>2)</sup>。四条派の絵師が四条通に居所を構える割合は、安永4年版：100%（1/1人）、文化10年版：71%（5/7人）、文政5年版：40%（4/10人）、文政13年版：42%（8/13人）、天保9年版：50%（8/16人）、弘化4年版：23%（12/53人）、嘉永5年版：32%（8/25人）、文久3年版：0%（0/1人）、慶応3年版：26%（5/19人）である<sup>3)</sup>。四条派の絵師は弘化から慶応において四条通に居所を構える割合が減少するが、安永以降、四条通を中心に居所を構えることがわかる（図2-1）。慶応3年版によると、夷川通より北に居所

を構える絵師がいなくなり、四条通の他、御池通、三条通、松原通へ分散する（図2-2）。

### 2-2-2 円山派

円山派の開祖円山応挙は、享保18年（1733）、丹波国穴生村（京都府亀岡市）の農家丸山藤左衛門の次男として生まれた。名は岩治郎・与古、字は仲均・仲選、通称は主水、一嘯・夏雲・仙嶺（僊嶺）・僊齋（僊齋）・雪汀・蘭溪などと号す。10代で画を志し京都に出た。はじめ玩具商のもとで眼鏡絵の制作に携わる。眼鏡絵とは、当時の日本では珍しかった透視図法の風景画を、鏡とレンズを通して覗くというみせものである。その後、石口幽汀（1721-1786）の門に入り、本格的な絵画を学んだ。幽汀は鶴沢探鯨の弟子である。寛政7年（1795）、62歳で逝去する。墓所は悟真寺（京都市右京区太秦）。

写生画といわれる応挙が確立した様式は、広く上方新興市民層の支持も得て、四条派と共に京派、写生派ともよばれる。彼らは比較的裕福な生産的商工市民層によって占められ、禁裏をはじめとする旧貴族社会との結び付きも強かった。応挙芸術にみる穏健で良識的な保守的体質は、広く上層貴紳層にも信頼され、禁裏や社寺の壁画装飾にも重用される。

円山派は応挙の後、応瑞、応震と血族により画系を伝承する。応挙門の中で長沢芦雪、源琦、山口素絢、奥文鳴、吉村孝敬、渡辺南岳、森徹山、西村楠亭、月僊、山跡鶴嶺を応挙十哲と呼ぶことがある。ただしこの人選には明確な根拠がなく必ずしもこの10名とはならない。

表2-3は、『平安人物志』『皇都書画人名録』『京羽津根』に収録される円山派の絵師を一覧にしたものである。明和5年版から文化10年版によると、円山派の絵師は全体に分散し、一方で四条通周辺に居所を構える絵師が目立つ（図2-3）。また、文化10年版から内裏西方へ居所を構える絵師が確認できる。文政5年版から天保9年版によると、円山派の絵師は全体に分散するが、四条通への集中がなくなる（図2-4）。弘化4年版から東中筋通界隈に居所を構える絵師が増加する。また、弘化から慶応において、竹屋町通より北に居所を構える絵師がいなくなる（図2-5）。

### 2-2-3 岸派

岸派の開祖は岸駒である。名は駒・昌明・矩、字は貞然、同功館・可観堂・鳩巢樓・葦齋・華陽・虎頭館・天開窟・蘭齋などと号す。出生年については、寛延2年（1749）出生説と宝暦6年（1756）出生説がある。ただし、没年については天保9年（1838）と一致する。生誕地についても金沢（石川県）説と高岡（富山県）説があり、それに異なる出生説が交差する。墓所は本禅寺（京都市中京区寺町広小路）。

岸駒は特定の師に入門し、そこから身を興したのではなく、独学で沈南蘋<sup>4)</sup>をはじめとする中国画や狩野派、洋風画をも加味した多方面の学習を行い、やがて一派をなした。特に虎の絵を得意とし、写生画風に世に出た。上京後、有栖川宮家に仕え、従五位下越前守を手にしたほどの人物である。

岸派は、岸駒とその子岸俗ともに長寿を保ったことで、江戸時代後期には大きな勢力となった。岸駒の後、岸俗や岸良、岸連山らによって画系が伝承される。岸俗は岸駒の妻子であるが、岸良は岸駒の女婿、岸連山は岸駒の孫娘の婿といったように、岸派では優秀な弟子を岸家の一員に組み入れ、画系の維持に努めた。

表 2-4 は、『平安人物志』『皇都書画人名録』『京羽津根』に収録される岸派の絵師を一覧にしたものである。文化 10 年版から、内裏南方にあたる丸太町東洞院界隈に居所を構える絵師が現われる。文政 5 年版および文政 13 年版によると、丸太町東洞院界隈の他、新たに内裏西方にあたる一条通・中立売通界隈と四条通界隈に居所を構える絵師が集中する(図 2-6)。天保 9 年版から嘉永 5 年版によると、丸太町東洞院界隈と一条通・中立売通界隈に居所を構える絵師が増加する(図 2-7)。文久 3 年版および慶応 3 年版によると、丸太町東洞院界隈と一条通・中立売通界隈の他、郊外(聖護院村、伏見)に居所を構えるのみとなる(図 2-8)。

### 2-2-4 原派

原派の開祖は原在中である。名は致遠、字は子重、在中・臥遊などと号す。寛延 3 年(1750)、原性園の子として生まれたと伝えられ、天保 8 年(1837) 11 月 15 日に 88 歳で逝去する<sup>9)</sup>。墓所は天性寺(京都市中京区寺町三条上)。

在中の師は石田幽汀と伝えられているが、一説に円山応挙に学んだとするものもある。また末裔梅戸在貞の談によれば、山本探淵について仏画の手ほどきを受けたことがあるといわれる。有職戦実の研究者として知られるようになり、写生画、中国画・明の画蹟を研究し、さらに上佐派の技法も摂取し大和絵の画法を消化してついに一派をなした。その画系は幕末を経て現在に及ぶ命脈を保つ。在中の画業として最も注意しなければならないのが、障壁画の制作である<sup>10)</sup>。

原派は、在中によって宮中と結びつきができて以来、宮中および公卿との結びつきを深め、「御所好み」と言われる。在中の後は、在明が継ぎ、在照、在泉へと続く。

表 2-5 は、『平安人物志』『皇都書画人名録』『京羽津根』に収録される原派の絵師を一覧にしたものである。原在中が安永 4 年版および天明 2 年版によると葎屋町長者町に、文化 10 年版によると聖護院村に居所を構えた他、浦野在成と林南嶺を除き、原派の絵師は一条通・中立売通に居所を構えることになる(図 2-8、図 2-9)。

### 2-2-5 望月派

望月派の開祖は望月玉蟾である。名は重勝・名玄、字は守静、通称は藤兵衛、玉蟾と号す。享年に 64 歳説と 83 歳説があり、また没年に宝暦 3 年(1753)説と同 5 年(1755)説があるため、生没年は不詳である。玉蟾は蒔絵師の家に生まれた。6 歳の時から上佐光成に弟子入りし正式な画を学んだ。次いで山口雪溪に師事した後、中国画を慕い、日本の画家では雪舟、狩野元信に私淑したと伝えられる。雪溪は雪舟の流れをくむ長谷川左近の門人

である。その門人に、四条派の開祖呉春が絵を学んだ大西酔月がいる。二代日玉仙、三代日玉川、四代日玉泉と続く。玉川ははじめ家系の村上東洲に、次いで岸駒の門に学んだ後、江戸の谷文晁を訪れたり、呉春の画を慕うなどした。

表 2-6 は、『平安人物志』『皇都書画人名録』『京羽津根』に収録される望月派の絵師を一覧にしたものである。望月派の絵師が居所を構えた地域は、内裏南西にあたる下立売通・押小路通・鳥丸通・西洞院通で囲まれた地域である。望月派本家はこの地域のみに居所を構えており、望月派本家以外の絵師はこの地域以外に居所を構えるが少数である(図 2-11)。

表 2-2 四条派絵師一覧

名前	居所	名前	居所	名前	居所
『平安人物志』安永4年版(1775)	山田竜淵*	西条富小路東	三浦益彦	同所北横町	
呉春	四条高倉西二入町	『皇都書画人名録』弘化4年版(1847)	侯野雪昂	丸太町下松町	
『平安人物志』文化10年版(1813)	藤井明忠	小飛空町	大角有隆	洛東吉田村	
余田如水	筒登町押小路北	駒井寛鶴	下河原	羽倉可亮	伏見福荷社町
岡本豊彦	四条東洞院東	橋田成明	安井御門荒天町	柴田仙深	知恩院古前切通東
松村景文	四条富小路西	正智院	洛東雲山		『平安人物志』嘉永5年版(1852)
紀広成	四条高丸西	藤澤九華	大佛御殿御門前	横山清輝	新町四条北
佐久間重慶	堺町四条北	仲尾利香	東洞院七条上二丁目	柴田仙深	東洞院表川北
別所東漢	富小路三条北	藤本菱洲	諏訪町魚塚北	吉田仙均	堺町二条南
『平安人物志』文政5年版(1822)	大角南棟	松原敷鹿町西		沢長精斎	四条馬丸東
岡本豊彦	四条東洞院東	園分文友	藤木屋所佛光寺橋北	中村春亭	室町松原南
松村景文	堺町四条北	山田龍淵	四条河原町西	竹村文親	堺町三条北
小田海樺	筒登町二条南	喜多川祭茶	京極四条中川ノ東住	岡本常彦	東洞院四条北
紀広成	藤枝天龍寺傍	榎河橋羽	御幸町四条下	吉田仙深	四条東洞院西
比喜多宇隆	室町一条南	松尾秀山	松屋町高辻下	山田龍淵	四条川原町西
須山龍溪	富小路三条南	岡本嘉彦	堺町四条下	堀山文鏡	福業新町西
松川龍橋	東馬町夷川南	岡本成彦	四条高倉南	森彦	福幸町御所北
百々広年	四条高倉東	岡本成彦	四条高倉南	大原宗舟	同所弘光寺南
田中白華	不明五条南	藤田信彦	四条東洞院東	林蘭雅	塔之橋坂下丁
小野淵雪	富小路四条北	内藤素文	東洞院四条上	吉江文雄	小川路東筋北西
岡本常白*	今澄浪花	細嶋昌房	錦小路東洞院西へ入	森義豊	室町四条北
『平安人物志』文政13年版(1830)	藤滋齋斎	西条馬丸東		八木奇峰	新町三条南
岡本豊彦	四条東洞院東	斎藤成彦	東洞院四条上	森義尊	六角熱屋町角
松村景文	堺町四条北	吉田龍祥	同所南側	上田龍橋	伏見唐町西
紀広成	四条東洞院西	上代亮彦	東洞院佛光寺下	三谷玉峰	錦小路室町西
小田海樺	筒登二条南	大原春舟	室町佛光寺上	仲尾利香	東洞院七条南
比喜多宇隆	寺町丸太町	中村春亭	室町松原下	松村白根	四条熱屋町東
別所東漢	富小路押小路南	吳玉文	大宮西面南側	林舞臺	十丈坊辻子
横山清輝	六角室町東	岩崎文礼	錦小路新町西	長谷川玉峰	柳馬場三条北
松川龍橋	東馬町夷川南	横山清輝	新町小路下	有山山崎	湖小路御所南
百々広年	四条高倉東	富崎露谷	當時内塾	園分文友	京原堂寺中
田中白華	不明五条南	竹川友広	観音堂辻子新町東	村瀬石右	錦小路室町西
柴田義峰	福業師室町西	森義章	室町四条上		『京羽津根』文久3年版(1863)
柴田仙深	三条東洞院東	横山春暉	新町錦小路下	横山清輝	下立売油小路東
吉田仙均	四条高倉東	三谷玉峰	錦小路室町西	『平安人物志』慶応3年版(1867)	
原田九美	福業師鳥丸西	村瀬双石	錦小路室町西	柴田仙深	東洞院表川北
小野淵雪	富小路四条北	清水春雪	新町錦小路上	沢長精斎	四条馬丸東
沢長精斎	四条馬丸東	堀川文鏡	福業師新町西	沢長素軒	父精斎と同屋
中村春亭	室町松原	八木奇峰	新町三条下	中村春亭	室町松原南
竹村文親	四条東洞院西	鎌田景毅	新町六角上	竹村文親	堺町三条北
百々広年	不明五条南	長谷川玉峰	堺町福業師上	岡本常彦	堺町四条北
岡本常白*	今澄浪花	早藤春英	六角胡馬場東	岡本常彦	不屋町四条南
『平安人物志』天保9年版(1838)	藤野輝堂	堺町三条上		堀川文鏡	不屋町四条三丁南
岡本豊彦	四条東洞院東	森義章	御幸町御池上ル	林蘭雅	塔之段
松村景文	四条東洞院西	富田光影	富小路一条下	森義尊	筒登町三条北
横山清輝	新町四条北	百々広年	同所(御幸町二条下ル)	八木奇峰	天龍寺池南
田中白華	堺町四条北	有山龍橋	湖小路御所小路下	林蘭雅	山崎四条北
比喜多宇隆	室町出水北	吉江文雄	同所(湖小路御所小路下)	林蘭雅	十丈坊辻子
別所東漢	柳馬場御池南	倉光忠彦	下立売御門南	長谷川玉峰	柳馬場三条北
柴田仙深	福丸押小路北	藤南斎	丸太町富小路東	園分文友	松原堂岩寺中
吉田仙均	室町錦小路南	藤津主水	丸太町三木木南	村瀬双石	上京
岡本常彦	塔之橋坂下	伏見素山	丸太町三木木南	岡本清輝	富小路御所北
横山清輝	新町四条北	岡本成彦	新町(御幸町二条下ル)	富崎露谷	富小路四条北
田中白華	室町松原東	岡本成彦	上寛彦坊前	前川宗徳	堺町松原下
比喜多宇隆	室町松原西	藤本保必	上寛彦坊前	前川文親	父五郎斎と同屋
竹村文親	四条東洞院西	山本幸彦	上寛彦坊前	中西貞吉*	清水三丁目
百々広年	柳幸町夷川北	山本幸彦	上寛彦坊前	中西貞吉*	清水三丁目
小田海樺*	六角柳馬場東	高山蘭英	寺町頭橋西口南	中西石右*	曙井奥洞院
早藤春英*	六角富小路西	林蘭雅	寺町今出川上四丁目橋之邊坂下町		

表 2-3 円山派絵師一覧

名前	居所	名前	居所	名前	居所
『平安人物志』明和5年版(1768)	三谷五雲	百万遍竹門屋鋪	蒲生竹山	西六条堀川七条南	
円山応挙	四条数屋町東へ入丁	矢野夜潮	四条塚町東	蒲生鳩峰	西六条堀川七条南
島田元直	新町綾小路下儿町	土岐濟美	上長者町釜座西	森寬齋	堀川佛光寺上儿
『平安人物志』安永4年版(1775)	山口正隣	衣棚出水南	中島来章	富小路姉小路上	
円山応挙	四条数屋町西工入町	中島来章	在大津	下村良進	御幸町二条上
島田元直	新町綾小路下儿町	福知白瑛	二条塚町西	麥田米成	柳馬場押小路下
源琦	六角室町東工入町	八田古秀	富小路姉小路南	多村拳秀	高倉夷川上
『平安人物志』天明2年版(1782)	世統希僊*	二条高倉西	伏原春峰	東洞院姉小路下	
円山応挙	四条塚町東入町	『平安人物志』文政13年版(1830)	岡村岩蔵	鏡座内	
島田元直	新町綾小路下儿町	西村楠亭	綾小路室町西	国并応文	両替町姉小路下
源琦	四条塚町東入町	吉村孝敬	西洞院松原南	島田雅喬	釜座二条上
長沢芦雪	御幸町御池下儿町	吉村孝文	西洞院松原南	吉坂鹿峰	康屋町竹屋町上
『平安人物志』文化10年版(1813)	長沢芦洲	柳馬場四条北	『平安人物志』嘉永5年版(1852)		
円山応瑞	姉小路両替町西	長沢芦鳳	柳馬場四条北	多村拳秀	高倉夷川北
円山応震		上田耕夫	今道浪華	島田雅喬	釜座二条北
吉村蘭洲	西洞院松原南	土岐濟美	中長者町新町東	下村一幸	御幸町二条北
吉村孝敬		山口正隣	衣棚出水南	中島来章	富小路姉小路北
吉村孝章	同前(西洞院松原南)	中島来章	衣棚御池北	吉村孝文	吉村孝文
山口素絢	祇園袋町	福知白瑛	二条塚町西	長沢芦鳳	柳馬場四条南
西村楠亭	新町仏光寺南	多村拳秀	高倉夷川北	円山応立	姉小路両替町
島田元直	蛤御門前	島田雅喬	釜座二条北	蒲生竹山	西六条
八田古秀	富小路姉小路南	世統希僊*	三条高倉西	吉坂鹿峰	六角富小路西
上田耕夫	祇園南	『平安人物志』天保9年版(1838)	渡辺丹崖	東中筋御前通南	
木下応受	両替町姉小路北	円山応震	姉小路室町東	駒井孝礼	烏丸線小路南
興文鳴	四条塚町東	多村拳秀	高倉夷川北	森寬齋	堀川仏光寺北
山跡鶴嶺	烏丸四条北	島田雅喬	釜座二条北	山口素絢	富小路松原南
長沢芦洲	柳馬場四条北	長沢芦洲	柳馬場四条北	『京羽津報』文久3年版(1863)	
並河源章	四条高倉西	長沢芦鳳	柳馬場四条北	円山応立	姉小路室町東
中島来章		中島来章	富小路姉小路北	中島来章	富小路姉小路上
佐々木大寿	四条塚町東	福知白瑛	二条塚町西	長澤芦鳳	洛東雲山下
矢野夜潮	姉小路大宮東	吉村孝文	新町御前通南	『平安人物志』慶応3年版(1867)	
土岐濟美	葦屋町上中立亮北	山口正隣	衣棚出水南	多村拳秀	高倉夷川北
橋公順	押小路間之町東	蒲生竹山	西六条	下村良進	東木屋町二条南
秀雪亭	諏訪町松原北	渡辺丹崖	東中筋御前通南	島田雅喬	釜座二條北
三谷五雲	百万遍屋鋪	吉坂鹿峰	柳馬場三条南	中島来章	柳馬場御池南
山口正隣	衣棚出水南	世統希僊*	三条高倉西	吉村孝一	西六条
世継希僊*	三条高倉西	『皇都書画人名録』弘化4年版(1847)	長沢芦鳳	八坂栞屋町	
『平安人物志』文政5年版(1822)	山口素岳	富小路松原下	円山応立	姉小路両替町	
円山応瑞	姉小路両替町西	長沢芦洲	柳馬場姉小路下	蒲生竹山	西六条
円山応震		長沢芦鳳	柳馬場姉小路下	吉坂鹿峰	
西村楠亭	綾小路室町西	駒井孝礼	烏丸綾小路下	中島有章	父来章と同居
吉村孝敬	西洞院松原南	大杉杉岳	新町五条上	川端玉章	四条東洞院西
吉村孝文		山本溪山	油小路五条上	渡辺丹崖	
山跡鶴嶺	仏光寺柳馬場東	吉村孝文	西六条中筋魚棚下	竹川友広	
上田耕夫	南禅寺傍	吉村孝一	西六条中筋魚棚下		
長沢芦洲	柳馬場四条北	渡辺丹崖	東中筋御前通下		

表 2-4 岸派絵師一覧

名前	居所	名前	居所	名前	居所
『平安人物志』天明2年版(1782)	谷口華明	洛北松崎	岸誠	東洞院丸太町南	
岸嶋	高倉三条下儿町	中嶋華陽	寺町丸太町北	車柳堂	北百万遍屋敷
『平安人物志』文化10年版(1813)	河村瑞鳳	新町中立亮北	横山華漢	室町中立亮上	
岸嶋	間之町竹屋町北	池之坊亭定*	四条東洞院(池之坊)	横山華漢	同町前入舎敷(室町中立亮上)
岸嶋	東洞院竹屋町北	『平安人物志』天保9年版(1838)	横山花渡	同町前入舎敷(室町中立亮上)	
河村文風	釜座夷川北	岸嶋	北岩倉	谷口華明	室町一条上
河村瑞鳳	岸嶋	東洞院丸太町南	泉春園	室町半丁西一条上	
横山華山	笹屋町	岸慶	東洞院丸太町南	下立亮小川東	
村上松堂	姉小路西洞院東	岸礼		辻南洋	元聖願寺小川東
『平安人物志』文政5年版(1822)	岸良	室町四条南	河村瑞鳳	市原野	
岸嶋	室町四條南	岸連山	柳馬場押小路北	河村文臨	市原野
岸嶋	東洞院竹屋町北	村上松堂	姉小路西洞院東	中島華陽	森道中程南側
岸良	室町四條南	村上松嶺	姉小路西洞院東	南谷坊有隣	上醍醐山
横山華山	室町一条南	河村瑞鳳	釜座夷川北	『平安人物志』嘉永5年版(1852)	
村上松堂	姉小路西洞院東	小沢華岳	新町武者小路南	岸嶋	東洞院丸太町
河村瑞鳳	釜座夷川北	近藤有芳	河原町丸太町北	岸礼	室町四條南
赤松鶴年	御池室町西	泉春園	室町中立亮南	岸良	岩倉
佐々木木風仙	両替町二条南	谷口華明	洛北松崎	岸連山	柳馬場二条南
村井三益	烏丸今出川北	中島華陽	聖徳院	岸嶋	岸嶋三男父同居
白井華陽	新町武蔵小路南	河村瑞鳳	新町中立亮北	河村瑞鳳	洛北市原
小沢華岳	新町武蔵小路南	横山華漢	室町一条南	村上松嶺	姉小路西洞院東
池之坊亭定*	在四条東洞院東(池之坊)	『皇都書画人名録』弘化4年版(1847)	岸龍山	押小路柳馬場東	
『平安人物志』文政13年版(1830)	福口觀雲	不明門通魚棚上	泉春園	一条室町十又坊辻子	
岸嶋	在北岩倉	田邊春嶽	間之町魚棚上	谷口華明	室町一条北
岸嶋	東洞院竹屋町北	石田漁翁	結慶町綾小路下	中島華陽	聖徳院村
岸慶	東洞院竹屋町北	岸良	室町四條下	横山華漢	室町一条南
岸良	室町四條南	岸五郎	室町四條下	石田逸翁	東洞院錦葉師南
岸連山	馬北山	村上松嶺	姉小路西洞院東	岸嶋堂	前替町押小路北
横山華山	室町一条南	小山寛嶺	堺町六角下	『京羽津報』文久3年版(1863)	
村上松堂	姉小路西洞院東	小沢華岳	柳馬場姉小路上	岸嶋	東洞院丸太町下
河村瑞鳳	釜座夷川北	加藤精英	結慶町二条上儿	『平安人物志』慶応3年版(1867)	
赤松鶴年	御池室町西	近藤有芳	二条富小路東	岸礼	伏見
佐々木木風仙	衣棚御池北	岸龍山	押小路柳馬場東	岸誠	東洞院丸太町南
村井三益	烏丸今出川北	岸連山	柳馬場押小路上	岸嶋	父岸礼と同居か
白井華陽	東洞院四條北	五井鳩山	室町榎木町上	泉春園	一条室町十又坊辻子
小沢華岳	新町武蔵小路南	岸嶋	東洞院丸太町南	谷口華明	室町一条北
近藤有芳	河原町丸太町西	岸慶	東洞院丸太町南	中島華陽	聖徳院村
泉春園	室町中立亮南	岸礼	東洞院丸太町南	岸竹堂	柳馬場押小路北

表 2-5 原派絵師一覧

名前	居所	名前	居所	名前	居所
『平安人物志』安永4年版(1775)	高倉在孝	六軒町一条北	『皇都書画人名録』弘化4年版(1847)		
原在中	葺屋町長者町下儿町	浦野在成	間町二条北	原在親	中立亮室町西
『平安人物志』天明2年版(1782)		『平安人物志』文政13年版(1830)		梅戸在親	小川中立亮上
原在中	葺屋町長者町下儿	原在中	小川中立亮北	畑南嶺	葺屋町上長者町上
『平安人物志』文化10年版(1813)		原在明	中立亮室町東	林其山	黒門中立亮上
原在中	聖徳院村	梅戸在親		『平安人物志』嘉永5年版(1852)	
原在明	中立亮室町東	原在善		原在照	中立亮室町東
梅戸在親		高倉在孝	六軒町一条北	梅戸在親	小川中立亮北
原在善		浦野在成	間之町二条北	高倉在孝	六軒町一条北
高倉在孝	六軒町一条北	『平安人物志』天保9年版(1838)		『京羽津報』文久3年版(1863)	
『平安人物志』文政5年版(1822)		原在明	中立亮室町東	原近江介	中立亮室町東
原在中	小川中立亮北	原在照	中立亮室町東	『平安人物志』慶応3年版(1867)	
原在明	中立亮室町東	梅戸在親	小川中立亮北	原在照	中立亮室町東
梅戸在親		高倉在孝	六軒町一条北	梅戸在親	小川中立亮北
原在善				高倉在孝	六軒町一条北

表 2-6 望月派絵師一覧

名前	居所	名前	居所
『平安人物志』明和5年版(1768)		『平安人物志』天保9年版(1838)	
大西酔月	蛸薬師室町西入丁	甲賀文麗	白川側梅宮町
『平安人物志』安永4年版(1775)		望月玉川	室町竹屋町北
望月玉仙	西洞院丸太町下ル町	『皇都書画人名録』弘化4年版(1847)	
村上東洲	木屋町三条下ル町	望月松溪	東洞院四条上
『平安人物志』天明2年版(1782)		望月玉来	烏丸竹屋町下
望月玉仙	西洞院丸太町下ル町	中西光女	下立売釜座西
村上東洲	木屋町三条下ル町	望月玉川	新町丸太町上
『平安人物志』文化10年版(1813)		望月玉溪	新町丸太町上
村上東洲	新町今出川北	清水珉山	前人在塾
甲賀文麗	白川側梅宮町	『平安人物志』嘉永5年版(1852)	
『平安人物志』文政5年版(1822)		望月玉川	新町丸太町北
甲賀文麗	白川側梅宮町	小野玉嶺	衣棚押小路北
望月玉川	烏丸竹屋町南	『京羽津根』文久3年版(1863)	
『平安人物志』文政13年版(1830)		望月玉川	新町丸太町上
甲賀文麗	白川側梅宮町	『平安人物志』慶応3年版(1867)	
望月玉川	室町夷川北	小野玉嶺	衣棚押小路北

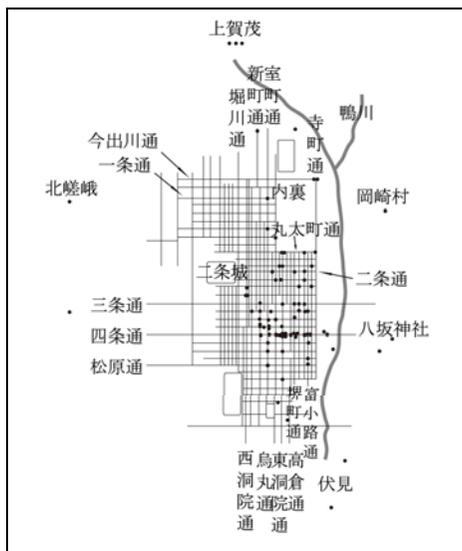


図 2-1 安永から嘉永にみえる四条派の居住分布<sup>7)</sup>

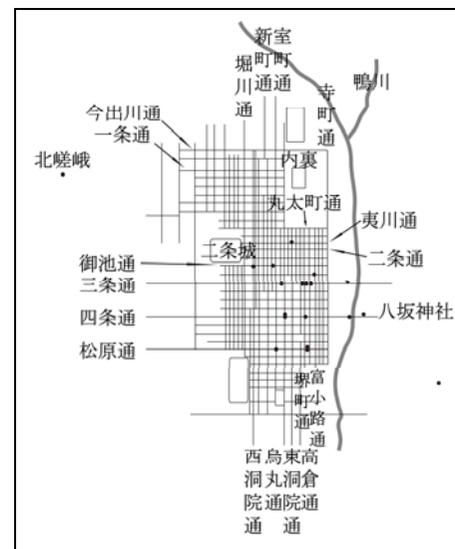


図 2-2 慶応にみえる四条派の居住分布

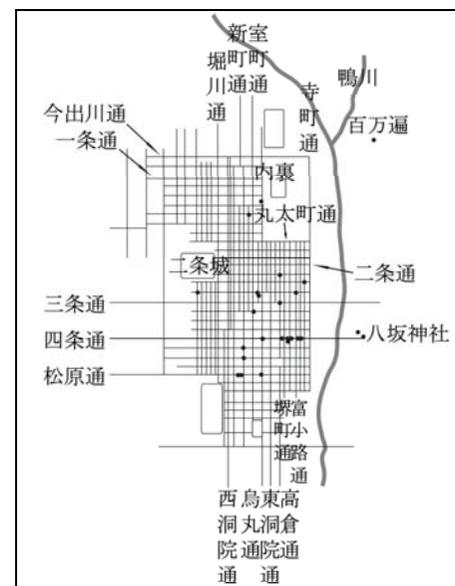


図 2-3 明和から文化にみえる田山派の居住分布

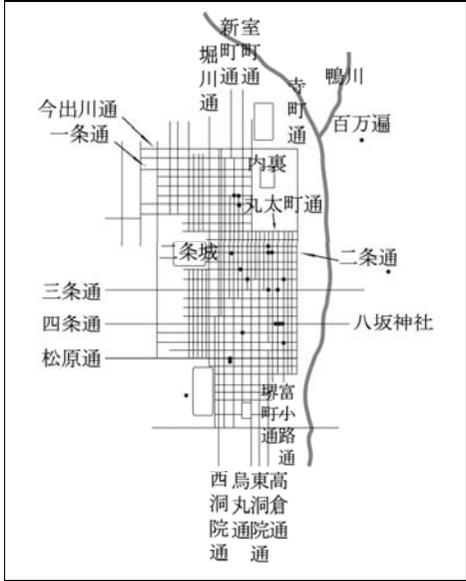


図 2-4 文政から天保にみえる円山派の居住分布

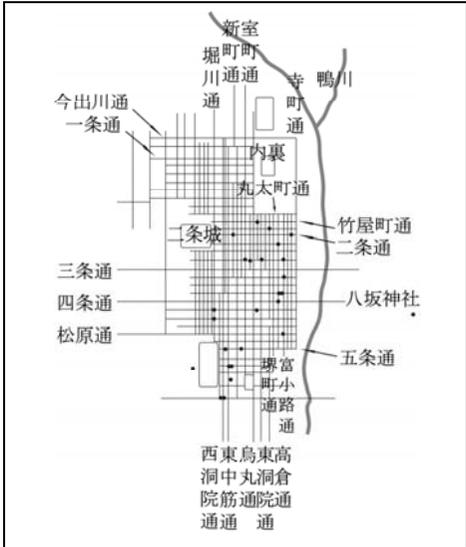


図 2-5 弘化から慶応にみえる円山派の居住分布

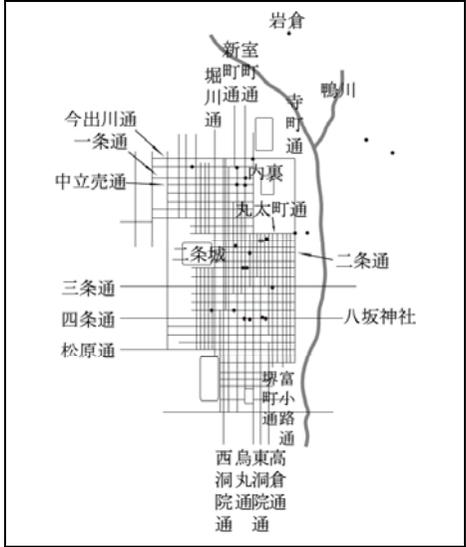


図 2-6 天明から文政にみえる岸派の居住分布

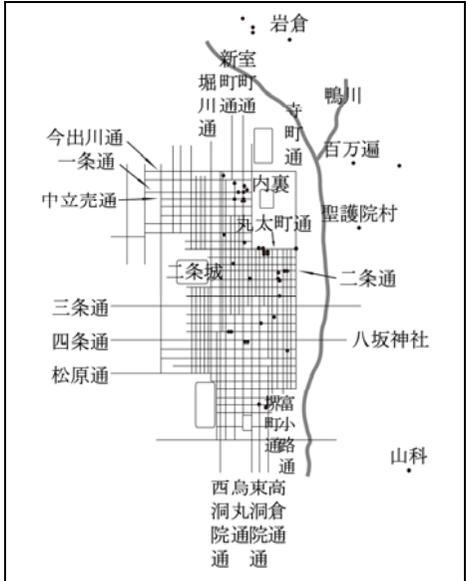


図 2-7 天保から嘉永にみえる岸派の居住分布

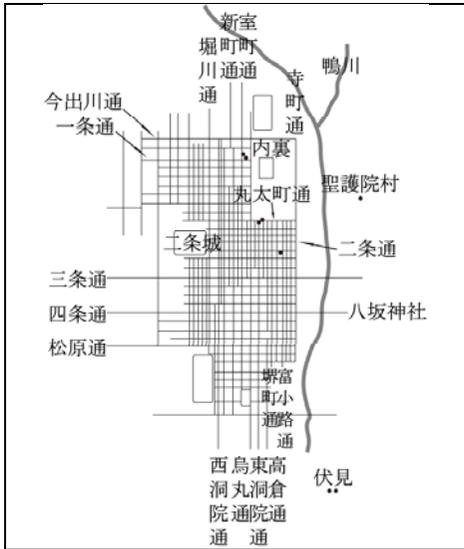


図 2-8 文久から慶応にみえる岸派の居住分布

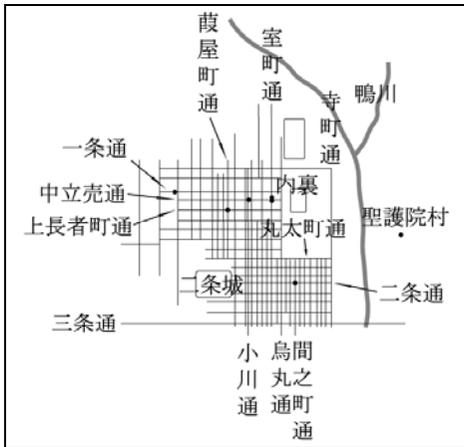


図 2-9 安永から天保にみえる原派の居住分布

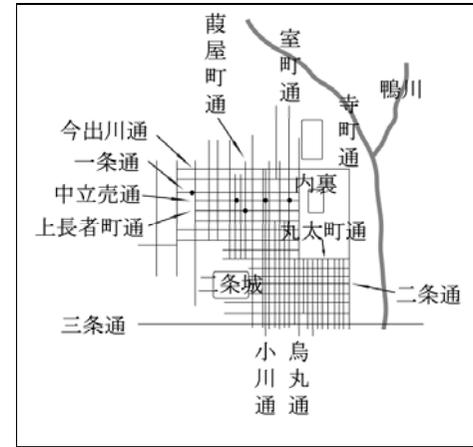


図 2-10 弘化から慶応にみえる原派の居住分布

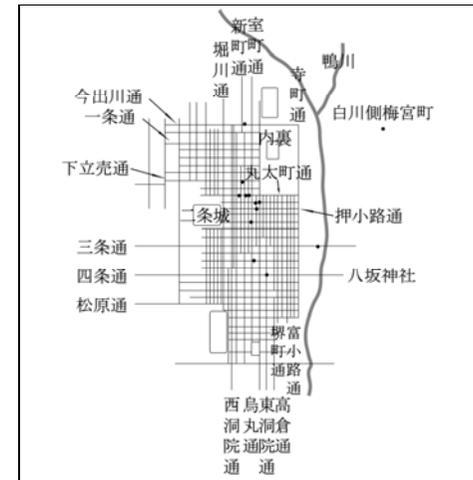


図 2-11 明和から慶応にみえる望月派の居住分布

## 2-3 御用絵師

### 2-3-1 狩野派

狩野派は、常に画壇をリードした点やその流派体制の巨大さからみれば、日本最大の流派と言って差し支えない。室町幕府の御用を受けていた狩野正信を祖とし、2代目元信の代

に元信様式を確立し、流派としての体制を固める。4代日永徳の代になり、織山信長、豊臣秀吉といった権力者との結び付きを強めた。その後、永徳の孫探幽が江戸幕府の御用絵師になり、その地位を確立する。

本研究における狩野派とは江戸に移り江戸幕府の御用絵師となった狩野本家の系譜ではなく、京都にとどまった狩野山楽、山雪の系譜を指し、江戸狩野派と区別し京狩野派と呼ばれることがある。山楽は永徳の弟子であり、家系の上では狩野家とは血縁関係にないが、画系の上では狩野派の正系を自認していたらしい。山楽以来、この家系を後援していたのは、九条家、二条家を筆頭とする公家層に東本願寺や随心院、妙心寺などの各宗派の大寺院である。

表 2-7 は、『平安人物志』『皇都書画人名録』『京羽津根』に収録される狩野派の絵師を一覧にしたものである。文政 5 年版および文政 13 年版によると、内裏南方にあたる堺町丸太町と、内裏西方にあたる蛤御門前、そして両替町二条に居所を構える（図 2-12）。天保 9 年版から文久 3 年版によると、内裏南西と両替町二条に居所を構えるようになる（図 2-13）。この地域は、望月派が居所を構えた地域と重なる。また、弘化以降、四条柳馬場に居所を構える絵師が現われ、四条通にまで居住分布が南下することがわかる。

### 2-3-2 土佐派

土佐派は中世より禁裏絵所<sup>8)</sup>預職にあり、日本でもっとも長い歴史を誇る流派である。禁裏の御用だけでなく、室町幕府の仕事にも従事していた。室町時代末期、当主である上佐光元を若くして戦乱で失い、それ以降しばらく絵所預職から離れる。その後、上佐光起は画流復興のため大和絵に新技法を導入することにより宮廷関係の人に注目され、承応 3 年（1654）光起 38 歳の時、禁裏絵所預職に復帰し近世土佐派の復活を果たす。それ以来、禁裏絵所預職を世襲し、幕末までその画系を維持し、内裏造営の際には必ず障壁画制作に参加する。江戸幕府の終わりと共に画壇での地位を降ろることになる。また、“土佐派中興の名手”と言われた田中訥言が、分家の光貞の門人にいる。

表 2-8 は、『平安人物志』『皇都書画人名録』『京羽津根』に収録される土佐派の絵師を一覧にしたものである。『平安人物志』『皇都書画人名録』『京羽津根』によると、土佐派本家は、寺町丸太町に居所を構える。『皇都書画人名録』『京羽津根』によると、土佐派本家以外の絵師は収録されず、『平安人物志』によると、文化 10 年版から天保 9 年版まで収録される。なかでも文化 10 年版から文政 13 年版によると、二条城界隈に居所を構える絵師の存在が確認できる（図 2-14）。以上より、土佐派は寺町丸太町と、文化・文政において二条城界隈に居所を構えることがわかる。

### 2-3-3 鶴沢派

鶴沢派は狩野探幽の高足である鶴沢探山を祖とする画系で、江戸中期には、上佐家と並ぶ宮廷の御用絵師であった。『古画備考<sup>9)</sup>』によると、元禄年間（1688-1704）、東山天皇の

依頼により、狩野探幽は探川を上洛させた。禁裏御用絵師として京都に居所を構え、一派を開くことになる。江戸時代中期から明治時代にかけて、江戸狩野の京都における拠点とも言うべき位置にあり、禁裏をはじめとする上流階級の御用を勤めるかたわら、京都はもとより大坂などにも多くの門人を抱えて狩野派様式による画技を普及させた。

表 2-9 は、『平安人物志』『皇都書画人名録』『京羽津根』に収録される鶴沢派の絵師を一覧にしたものである。鶴沢派の居住分布は主に、鶴沢本家・山本家・石田家において分かれる。鶴沢派本家は、文化 10 年版から文政 13 年版によると、油小路竹屋町に居所を構え、天保 9 年版から慶応 3 年版によると、下長者町千本に居所を構える。文化・文政では二条城界隈に居所を構えていたが、天保に入り居所の転移が確認できる。山本家は、文化 10 年版から嘉永 5 年版によると、寺町五条界隈に居所を構える。石田家は、文化 10 年版から慶応 3 年版によると、東中筋通界隈に居所を構える（図 2-15）。鶴沢家・山本家・石田家は同じ流派ではあるが、個別の居住分布を示すことがわかる。

表 2-7 狩野派絵師一覧

名前	居所	名前	居所
『平安人物志』文化10年版(1813)	狩野永朝	鳥丸下立売南	
狩野永俊	一条室町西	景山洞玉	両替町二条南
狩野永章	東洞院三条北	『皇都書画人名録』弘化4年版(1847)	
『平安人物志』文政5年版(1822)	木村梁舟	四条柳馬場西	
狩野永岳	鳥丸蛤御門前	狩野永獄	室町榎木町下
狩野永章	両替町二条南	『平安人物志』嘉永5年版(1852)	
景山洞玉		狩野永岳	室町丸太町東
狩野正英	堺町丸太町南	狩野永朝	室町丸太町南
『平安人物志』文政13年版(1830)	木村梁舟	四条柳馬場西	
狩野永岳	鳥丸蛤御門前	『京羽津根』文久3年版(1863)	
狩野永章	両替町二条南	狩野永岳	丸太町富小路東
景山洞玉	両替町二条南	狩野永朝	室町丸太町上
狩野正英	堺町丸太町南	『平安人物志』慶応3年版(1867)	
『平安人物志』天保9年版(1838)	木村梁舟	四条柳馬場西	
狩野永岳	室町下立売南		

表 2-8 土佐派絵師一覧

名前	居所	名前	居所
『平安人物志』天保9年版(1838)		『平安人物志』嘉永5年版(1852)	
土佐光孚	寺町丸太町	土佐光孚	寺町丸太町
土佐光清	寺町丸太町	土佐光清	寺町丸太町
土佐光祿	寺町丸太町	土佐光文	寺町丸太町
土佐光文	寺町丸太町	『京羽津根』文久3年版(1863)	
浮田一蕙	木屋町二条南	土佐光文	寺町丸太町上
『皇都書画人名録』弘化4年版(1847)		土佐光武	寺町丸太町上
土佐光孚	寺町丸太町上	『平安人物志』慶応3年版(1867)	
土佐光清	寺町丸太町上	土佐光文	寺町丸太町
土佐光文	寺町丸太町上	土佐光章	父光文と同居か
土佐光祿	寺町丸太町上	土佐光武	光文宅の南隣

表 2-9 鶴沢派絵師一覧

名前	居所	名前	居所
『平安人物志』文化10年版(1813)		石田有汀	東中筋雪踏屋町
鶴沢探泉	油小路竹屋町南	『皇都書画人名録』弘化4年版(1847)	
鶴沢探春		山本探齋	寺町万寿寺下
山本探淵	寺町五条北	石田悠汀	東中筋五条南
石田友汀	不明門雪踏屋町	栢友篤	東中筋五条南
竹内重方	百万遍屋鋪	吉田元禎	下立売小川角
『平安人物志』文政5年版(1822)		武田熙成	下立売小川角
鶴沢探春	油小路竹屋町南	鶴沢探龍	下長者町千本東
竹内重方	百万遍竹門屋鋪	『平安人物志』嘉永5年版(1852)	
石田友徳	東中筋雪踏屋町	鶴沢探龍	下長者町千本東
山本探淵	寺町五条北	山本探齋	寺町万寿寺南
『平安人物志』文政13年版(1830)		石田悠汀	東中筋五条南
鶴沢探春	油小路竹屋町南	栢友鷹	東中筋五条南
石田友徳	東中筋雪踏屋町	『京羽津根』文久3年版(1863)	
山本探淵	寺町五条北	鶴沢探真	下長者町千本東
『平安人物志』天保9年版(1838)		『平安人物志』慶応3年版(1867)	
鶴沢探春	下長者町千本東	鶴沢探龍	下長者町千本東
鶴沢探龍	下長者町千本東	栢友鷹	東中筋五条南

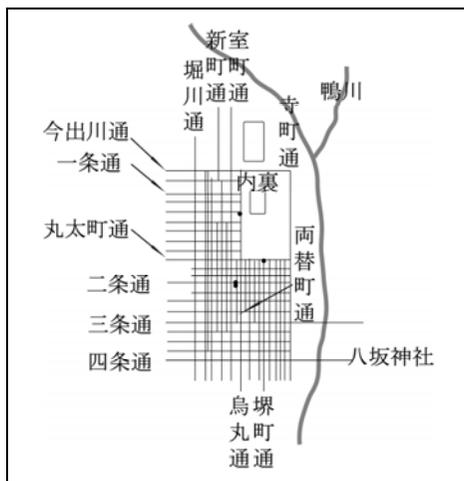


図 2-12 文政にみえる狩野派の居住分布

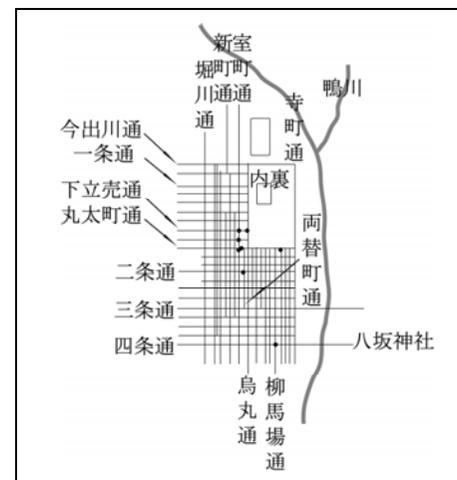


図 2-13 天保から慶応にみえる狩野派の居住分布

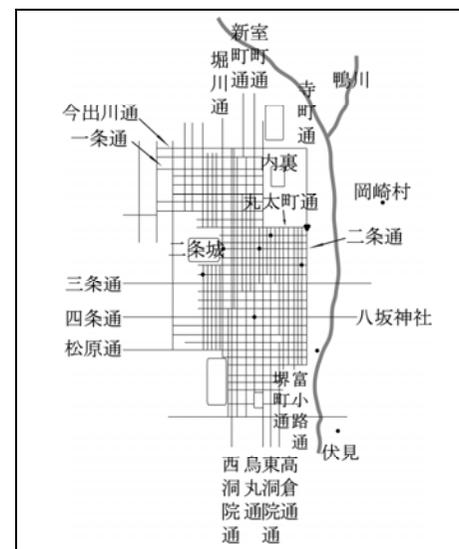


図 2-14 文化から文政にみえる上佐派の居住分布

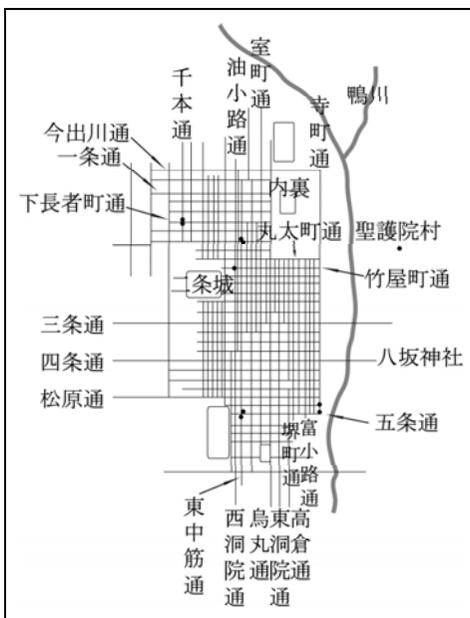


図 2-15 文化から慶応にみえる鶴沢派の居住分布

## 2-4 文人画家

文人画は、写生画と並んで、18世紀中期から後期に大流行をみた絵画である。文人画とは、文人すなわち中国の士大夫階級の人々がおこなう絵画のことである。水墨による山水画などの表現の様式が確立するのは、北宋から元にかけてである。明代後期には職業画家を圧倒して、文人画スタイルが主流となった。この流れが、日本におよんだのが、わが国の文人画である。明末の文人画家董其昌が文人画の系統を南宗、他方を北宗と呼んだことから、日本でも南宗画、南画と呼ばれる。このように、文人画とは描き手の階層によってつけられた名称であり、決まった様式を指すものではなかった。日本では文人という階層自体、確立しているとはいえないので、中国の文人画とはイコールではない。江戸時代中期になると、生活に余裕のある階層が増え、それにしたい自分でも楽しめる、新しく文化的な趣味が求められた。初期には少数の知識人によって試みられていたにすぎないが、ほどなくすぐれた文人画家が登場し、幅広い階層へと急速に普及していく。

表 2-10 は、『平安人物志』『皇都書画人名録』に収録される文人画家を一覧にしたものである。なお、『京羽津根』に文人画家は収録されない。文人画家は、全体に分散し際立つ居住分布はないが、郊外へ居所を構える絵師が多い。主な地域は祇園界隈、聖護院村、百万

遍、岡崎村、伏見、上賀茂、妙心寺であり、鴨東地区に集中することがわかる(図 2-16)。表 2-10 より、郊外に居所を構える絵師に注目すると、僧侶とそうでない絵師に分けることができる。僧侶は、双林寺や妙心寺など自らが修行を行う寺内や門前に居所を構えており、寺地が郊外に存在した結果である。一方、僧侶でない絵師は、聖護院村や岡崎村などに居所を構える。このように近世の文人画家にみられる郊外における居住分布は、僧侶とそうでない絵師から構成されている。

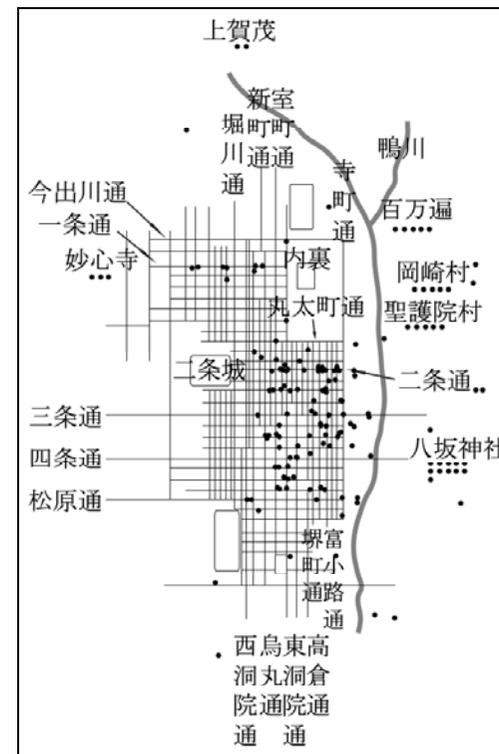


図 2-16 明和から慶応にみえる文人画家の居住分布



れる。

以上より、流派ごとの居住傾向はパトロンとしての公家、町人の存在と密接に関係していることが明らかになった。すなわち、流派による居住傾向の違いが、パトロンとの関係性の中に見いだせる、という新たな知見が得られた。

また、四条派の塩川文麟は、内裏御用を勤めるが、その絵画作業は自身の居宅兼アトリエで行っている。その居所は、慶応3年版によると、「木屋町四条三丁目」である。そこから眺める東山の夕景の美しさをめでて、その居を「山気夕佳処」と称した。近代以降、富岡鉄斎、橋本閑雪など多くの画家が、風流を求めて郊外に居所を構えた。風流を求めた居住地選択がすでに近世において確認できることは、注目すべき傾向であり、絵師・画家の郊外居住については第4章で詳細に述べる。

### 第3章 近世における絵師の居住地とパトロン

#### 註

- 1) 流派の特定は第1章と同様（第1章の註14参照）。
- 2) 表の作成は第1章と同様（第1章の註14参照）。
- 3) 割合の数値は小数点第1位を四捨五入した。
- 4) 享保16年（1731）に来崎し、熊斐（1712-1772）、宋紫石（1712-1786）、建部凌侍（1722-1774）らの南蕨派を生み出した。円山応挙や伊藤若冲などに大きな影響を与える。
- 5) 在中の出生には諸説ある。
  - ・若狭小浜（福井県小浜市）の藩主酒井家の奥医師原某の娘が藩主に仕え、一子をもうけたが、故あってその子を京へ連れ立ち、親類某に預けた。その子が長じて酒造業を営むようになる。これが在中の父性圏である。
  - ・その奥医師が性圏で、奥から下がった娘の連れ帰った乳児を性圏の三男とし、遠縁にあたる京都葎屋町下長者町上ルの酒造業坂本屋人右衛門の子として預けた。この子が長じて在中となる。
- 6) 相国寺、仁和寺、三玄院（大徳寺塔頭）、聖護院等の京都の寺院におけるものが挙げられる。
- 7) 天保2年（1831）に作成された地図（考正：池田東齋亭、画：中邑有樂齋、版元：文叢堂竹原好兵衛）を使用して作成した（図2-2から図2-16についても同様）。
- 8) 「平安時代、宮中で絵画の制作をつかさどった役所。画工司に代って置かれ、長官を別当といい、五位の蔵人が補せられた。鎌倉時代には春日・住吉・本願寺などの社寺が、また室町・江戸幕府も、これにならって置いた。」（『広辞苑 第4版』岩波書店、1994年）
- 9) 朝岡興偵編集、嘉永3年（1850）起筆。太田謹『増訂古画備考』（1904年）などがある。
- 10) 流派欄の表記は第1章と同様（第1章の註14参照）。

### 3-1 はじめに

本章の目的は、近世京都においてパトロンの存在が確認できる絵師の居住動向を看取り、さらに絵師の居住地とパトロンとの関係について、考察を行うことにある。

絵師とパトロンとの関係について、五十嵐公一氏は江戸時代前半の京都という条件で、「注文主と絵師の関係がどのようにして成立したのかである。これについては、一つ大きな特徴があった。注文主の血縁関係が深く関わっていた。」「注文主の血縁関係が、絵師の活動範囲を広げる役割を果たしていたのである。」と指摘している<sup>1)</sup>。また、絵師の居住地については、その動向全体を詳細に把握した研究を行った<sup>2)</sup>。このように、絵師とパトロンとの関係、絵師の居住地についての研究は行われているが、両者の相互関係について考察された研究は確認できない。

近世京都において多くの絵師がパトロンに庇護を受けたと考えられるが、史料等の制約により、その関係が確認できる絵師は一部に限られる。本章ではパトロンが存在が確認でき、さらに居所の動向も判明する円山応挙、呉春、上田耕夫、中林竹洞、日根対山について、居所の動向および居住地とパトロンとの関係を看取する。

3-2 では、円山応挙に注目する。応挙のパトロンとして円満院祐常と妙法院真仁親王が知られている。祐常が残した『萬誌』という記録や真仁親王の『妙法院真仁親王御直日記』から応挙との交友履歴を看取する。

3-3 では、呉春に注目する。呉春のパトロンとして真仁親王が知られている。真仁親王が書いた先の日記や『真仁親王閑東御参向之記 乾』から呉春との交友履歴を看取する。

3-4 では、上田耕夫に注目する。耕夫のパトロンとして和田隆侯が知られている。応挙や呉春に対し、耕夫については不明な点が少なくない。田能村竹田や木村兼葎堂と交友関係があり、竹田の『竹田荘師友画録』や兼葎堂の『兼葎堂日記』といった史料を用いて、耕夫についての情報を補いつつ、隆侯との交友履歴を看取する。

3-5 では、中林竹洞に注目する。竹洞のパトロンとして神谷天遊が知られている。竹洞は晩年、天遊を偲ぶ思徳追遠の碑を建てており、その碑文などから 2 人の交友履歴を看取する。

3-6 では、日根対山に注目する。対山のパトロンとして里井浮丘が知られている。浮丘は『行余楽記一』『行余楽記二』『口省簿』という記録を残しており、これらを用いて 2 人の交友履歴を看取する。

### 3-2 円山応挙

円山応挙は享保 18 年 (1733)、丹波国桑田郡穴太村 (京都府亀岡市曾我部町穴太) に農家丸山藤左衛門の次男として生まれ<sup>3)</sup>、寛政 7 年 (1795) 63 歳で逝去する。17 歳頃京都に川て、玩具商尾張屋勘兵衛のもとに奉仕し、そこで人形の制作や浮絵の制作に携わり、さ

らに、眼鏡絵を描いていた。画は狩野派の石山幽汀に学ぶ。

応挙の居所は表 3-1 の通りである。丹波国桑田郡穴太村で生まれた応挙は 17 歳頃、玩具商尾張屋に奉仕する。『平安人物志』によると、明和 5 年版 (1768) では四条麩屋町東へ入丁、安永 4 年版 (1775) では四条麩屋町西へ入町、天明 2 年版 (1782) では四条堀町東入町に居所を構えていることがわかる。その後、天明 3 年 (1783) には四条高倉通東入立売之町に居所を構える。このように京都における応挙の居所は四条通界隈にあった。

応挙のパトロンとして円満院祐常が知られている。祐常は享保 8 年 (1723) に生まれ、安永 2 年 (1773) 51 歳で逝去する。二条綱平の養子になり、12 歳で大僧都、18 歳で権僧正、22 歳で大僧正に任じられているが、円満院門主になった時期は明らかでない<sup>4)</sup>。

「七難七福図巻」制作の依頼を契機として、祐常は応挙のパトロンになる。明和 4 年 (1767) の「岩頭飛雁図」「四条河原納涼図」、同 5 年 (1768) の「七難七福図」、同 6 年 (1769) の「芭蕉童兒図屏風」「雨中山水図屏風」「雪中山水図屏風」、同 8 年 (1771) の「牡丹孔雀図」、安永元年 (1772) の「大瀑布図」など、多くの作品を応挙は祐常のために描いている。

また、祐常は『萬誌』という記録を残している。『萬誌』は 7 月を境に 1 年を前後に分け、前半冊と後半冊の 2 冊にその年の諸事万端が記されている。宝暦 11 年 (1761) から安永 2 年 (1773) までの記録である<sup>5)</sup>。他者に見せるものではなく祐常自身の覚え書であった。内容は「書画」「京便」「買取」「取次物」「詠」「替」「不訖」「借」「貸」「不時所得分」「詩歌連」「秘聞録」「雑記」「楽鞠」等の項目に分けて記述されている。この中で「秘聞録」の内容は極めて多岐にわたる<sup>6)</sup>。様々な内容が「誰々伝」や「誰々談」という形で書き留められており、「應舉伝」「円山伝」等々の形で応挙関連の記述が合計で 175 項目あり<sup>7)</sup>、祐常と頻繁に親交があったことが確認できる。

祐常の他に応挙のパトロンとして真仁親王が知られている。真仁親王は明和 5 年 (1768) に生まれ、文化 2 年 (1805) 38 歳で逝去する。閑院典仁親王の子で後桃園院の養子となり、光格天皇の兄にあたる<sup>8)</sup>。真仁親王のもとには多くの絵師、書家、知識人などが出入りし、妙法院サロンなるものを形成していた<sup>9)</sup>。真仁親王は『妙法院真仁親王御直日記』という日記を残している。天明 7 年 (1787) 1 月 1 日から 8 月 16 日までの日記である。応挙が真仁親王と出会った時期は不明であるが、『妙法院真仁親王御直日記』によると 1 月 15 日の記事が最初である<sup>10)</sup>。応挙は真仁親王の求めに応じて多くの作品を残している<sup>11)</sup>。また、この当時の応挙は、安永 4 年版および天明 2 年版において画家の分野で第 1 位に載るほど評判が高かったため、妙法院サロンでも重要な存在であったと推測できる。

表 3-1 応挙の居所

居所	最初の年	最後の年	番号*4	典拠
丹波国桑田郡穴太村	享保8年 1733年	寛延2年頃 1749年頃		『仙齋圖山先生傳』*5
四条柳馬場*1	寛延2年頃*2 1749年頃*2	明和5年以前 1768年以前	1	『円山應舉研究』*6
四条麩屋町東へ入丁	明和5年以前 1768年以前	安永4年以前 1775年以前	2	『平安人物志』*7
四条麩屋町西へ入町	安永4年以前 1775年以前	天明2年以前 1782年以前	3	『平安人物志』*8
四条堺町東入町	天明2年以前 1782年以前	天明3年 1783年	4	『平安人物志』*9
四条高倉通東入立売の町	天明3年 1783年	*3 *3	5	『円山應舉研究』

\*1：玩具商尾張屋の居所。

\*2：応挙が上京した時期については諸説ある。

\*3：天明の大火後の居所は不明であるため空白とした。しかし、四条通界限に居所を構えていたと考えられる。

\*4：図3-1の数字とそれぞれ対応（以下、表3-2から表3-4についても同様）。

\*5：奥文鳴著（平賀鶴岳稿本『鶴江漫筆』巻之5所収）

\*6：佐々木承平、佐々木正子『円山應舉研究』研究篇、中央公論美術出版、1996年

\*7：明和5年版

\*8：安永4年版

\*9：天明2年版

### 3-3 呉春

呉春は宝暦2年(1752)、堺町四条下る町に住む金座年寄役松村匡程の長男として生まれ、文化8年(1811)60歳で逝去する。はじめ大西酔月に学び、のち俳諧の師であった与謝蕪村に師事した。

呉春の居所は表3-2の通りである。堺町四条下る町に生まれた呉春は<sup>12)</sup>、安永4年版に載り、24歳で絵師として世に認められていた。安永3年(1774)23歳に描いた「秋景山水図」には「安永甲午冬十月既望写於百昌堂 存白」の款記がある。百昌堂は二条鴨川にあり、安永4年版によると、呉春の居所が四条高倉西へ入る町とあることから、おそらく画室として使用していたと考えられる。天明元年(1781)には父匡程と妻雛路を亡くし、与謝蕪村門下であった大坂池田の商人のもとに寓居する。その後、寛政元年(1789)四条高倉小路に居所を構え、同5年(1793)四条東洞院錦小路へ居所を移した。

天明7年(1787)頃、呉春は応挙の推挙により妙法院真仁親王の知遇を得ることになる。『妙法院真仁親王御直日記』に呉春関係の記事は2つしかない。1つは、

「(五月)十日 今日、月溪席書御請也。」

であり、月溪つまり呉春が席書を命じられ、これをお請けした記事である。もう1つは、

「(五月)拾四日 月溪来ル、於梅之間、席書。入夜、於新殿酒宴。於七疊半、主水席

書五枚、祝儀礼之ことし。」

であり、梅の間で呉春が席書を行った記事である。天明7年(1787)頃は妙法院サロンにおいて重要な位置ではなかった。しかし、文化2年(1805)の『貞仁親王閑東御参向之記乾<sup>13)</sup>』によると、皆川淇園、東東洋、円山主水<sup>14)</sup>といった妙法院サロンに出入りする多くの絵師、書家、文化人の中で、伴蒿蹊と呉春は特別扱いであったことがわかる<sup>15)</sup>。その他の記事にも呉春は応挙の息子である応端の上位にあり、貞仁親王から応挙の後継者と目されていた<sup>16)</sup>。つまり、応挙が没した寛政7年(1795)以降、妙法院サロンにおいて呉春は重要な存在であった。

表 3-2 呉春の居所

居所	最初の年	最後の年	番号	典拠
堺町四条下る町	宝暦2年 1752年	安永4年以前 1775年以前	1	『松村家略系』*1
四条高倉西へ入る町	安永4年以前 1775年以前	天明元年 1781年	2	『平安人物志』*2
大坂池田	天明元年 1781年	寛政元年 1789年		『呉春展』*3
四条高倉小路	寛政元年 1789年	寛政5年 1793年	3	『呉春展』
四条東洞院錦小路	寛政5年 1793年	文化8年 1811年	4	『呉春展』

\*1：逸翁美術館所蔵。

\*2：安永4年版(1775)

\*3：尼崎市総合文化センター『呉春展』尼崎市総合文化センター、1979年

### 3-4 上田耕夫

上田耕夫は宝暦10年(1760)、池田北ノ口(大阪府池田市木部から新町あたり)の豪農の家に生まれたと伝えられ、天保3年(1832)73歳で逝去する<sup>17)</sup>。幼少のころから画を好み、叔父である大徳寺無學和尚に就いて学を修めた<sup>18)</sup>。画は応挙に学び、のち蕪村・呉春の作風を慕った。本章で取り上げた他の絵師ほど、耕夫についての研究は進んでいない。『竹田荘師友画録<sup>19)</sup>』には耕夫の人となりや簡潔に記した一文があり、次に引用する。

上田耕夫京人。與栲亭先生相善。家於祇園祠南。距先生居亦不甚遠。先生終年杜門不出。唯耕夫招即往。性豪侈。喜植牡丹數十種。當其花時簾幕供張極盛。邀諸名士飲燕口以繼夜。先生乃有題贈矣。画好謝春星。学此徑營位置匠心殊苦。京派外別拔一幀。晚移坂府聞客歲棄世。

ここから次のことがわかる。儒学者の村瀬栲亭(1764-1818)と交遊があり、祇園神社の南に住んでいた。性格は贅沢で華やかな生活を好み、牡丹が好きであった。また、『兼葭堂日記<sup>20)</sup>』には、寛政3年(1791)11月8日から同10年(1798)9月3日までの7年間に計

17回の交友記録があり、2人の交際をうかがうことができる。

耕夫の京都における居所は、文化10年版および『竹田荘師友画録』によると祇園南（図3-1の㊦）、文政5年版によると南禅寺傍（図3-1の㊧）である。文政13年版および『竹田荘師友画録』によると大坂に居所を移していることがわかる。

耕夫のパトロンとしては和岡隆侯（1748-1803）の存在がある。隆侯は大坂の豪商で代々辰巳屋久左衛門を名乗っている。その財力は鴻池善右衛門や住友古左衛門と並ぶほどであった。隆侯との出会いがいつ頃からは不明であるが、隆侯の依頼で耕夫は僧白雲と文儒が松平定信の命で描いた「富士山図巻」を、寛政5年（1793）に谷文晁の「公余探勝図巻」を模写している。また寛政7年（1795）、隆侯とともに能登を周遊し、「海浜奇勝図」を描いている。さらに、隆侯は入手した鶴蘭が花を咲かせたのを記念して「鶴蘭図」を描かせている。このように、隆侯は耕夫のパトロンであったことがわかる。先の「鶴蘭図」は寛政12年（1800）4月18日の作品であることから<sup>21)</sup>、2人の関係は隆侯が没するまで続いていたと考えられる。

### 3-5 中林竹洞

中林竹洞は安永5年（1776）、名古屋城下杉之町通桑名町（名古屋市中区丸の内2丁目）に産科医中林玄棟の子として生まれ、嘉永6年（1853）78歳で逝去する。山本梅逸（1783-1856）と並び尾張を代表する文人画家である。14歳の時、尾張南画の先駆者の一人である山田宮常（1747-1793）に師事し、翌年、富商の神谷天遊（1721-1801）の知遇を得る。

竹洞の居所は表3-3の通りである。享和2年（1802）27歳のとき師である天遊が亡くなり、梅逸とともに京都に上る。江州瀬田磯田清左衛門の支援を受けて木屋町三条上に一戸を構え梅逸と共同生活をはじめ。同3年（1803）28歳のとき父の危篤の報が届き尾張に帰る。再上京の時期は諸説あるが、文化8年（1811）36歳のときには京都での活動が確認できる。この時の居所は衣櫛二条南である。その後、文化12年（1815）40歳のとき、眼病が悪化したため療養を目的として聖護院村へ一家をあげて移住している<sup>22)</sup>。文政13年（1830）までには高倉竹屋町北に、天保9年（1838）までには御幸町押小路北に居所を構えており、天保9年（1838）63歳のときには息子竹溪に家督を譲り、隠居を契機として東山の神楽岡真如堂前へ退隠する<sup>23)</sup>。

竹洞のパトロンである天遊は名古屋鉄砲塚町の永楽屋<sup>24)</sup>の主人として、永楽屋伝右衛門を名乗り、近世後期における名古屋画壇のパトロンとして知られている。竹洞は天遊が所蔵する古画を模写することで本格的に画の勉強を始める。また、竹洞という名は天遊から与えられた<sup>25)</sup>。神楽岡真如堂前に居所を構えた竹洞は、両親の碑を建てるとともに、自宅の庭に没後40年近くも経っている恩師天遊を偲ぶ思徳追悼の碑を建てる。その碑文には、「嗚呼、先生ノ余ニオケルヤ、恩義モットモ深シ、実ニソノ誘導提撕ノ厚キヲ感戴スルコト、三十余年ナリ」とあり、天遊の竹洞に与えた感化がいかに大きかったかがわかる。

表 3-3 竹洞の居所

居所	最初の年	最後の年	番号	典拠
尾張	安永5年	享和2年		『竹洞と梅逸』*1
	1776年	1802年		
木屋町三条上	享和2年	享和3年	1	『竹洞と梅逸』 『竹洞画論』
	1802年	1803年		
尾張	享和3年	文化8年		『竹洞と梅逸』
	1803年	1811年		
衣櫛二条南	文化8年	文化12年頃	2	『竹洞と梅逸』 『平安人物志』*2 『名古屋市博物館研究紀要』*3
	1811年	1815年頃		
聖護院村	文化12年頃	文政13年以前	3	『竹洞と梅逸』 『平安人物志』*4
	1815年頃	1830年以前		
高倉竹屋町北	文政13年以前	天保9年以前	4	『平安人物志』*5
	1830年以前	1838年以前		
御幸町押小路北	天保9年以前	天保9年	5	『平安人物志』*6
	1838年以前	1838年		
神楽岡真如堂前	天保9年	嘉永6年	6	『竹洞と梅逸』 『平安人物志』*7 『皇都畫人名録』
	1838年	1853年		

\*1：兼松齋門『竹洞と梅逸』画報社、1910年

\*2：文化10年版

\*3：神谷浩「中林竹洞」（『名古屋市博物館研究紀要』第9巻、名古屋市博物館、1986年）

\*4：文政5年版

\*5：文政13年版

\*6：天保9年版

\*7：嘉永5年版

### 3-6 日根対山

日根対山は文化10年（1813）、和泉国日根郡中庄村に日根又左エ門の三男として生まれ<sup>26)</sup>、明治2年（1869）57歳で逝去する。幕末における京都文人画家の第1位であったと評価されている<sup>27)</sup>。

対山の居所は表3-4の通りである。弘化3年（1846）34歳のとき御幸町二条下るに居所を構える<sup>28)</sup>。同4年（1847）35歳のとき両替町御池下る東側へ居所を移す。安政元年（1854）42歳のとき柳馬場二条下る東側へ、そして、制作活動の充実を求めて<sup>29)</sup>、文久元年（1861）49歳のとき聖護院若松町へ居所を移していく。

対山のパトロンとして同郷の里井浮丘が知られている。浮丘は寛政11年（1799）、里井家の次男として生まれ、慶応2年（1866）68歳で逝去する。里井家は廻船問屋を家業としていた豪商で、村役人も務めていた。36歳の時に兄が亡くなり里井家の当主となった。浮丘はその富により多くの書物や書画を所蔵し、これを広く開放していた。そのため、交友関係は多彩であった<sup>30)</sup>。さらに、浮丘は自身の活動を『行余楽記一<sup>31)</sup>』『行余楽記二<sup>32)</sup>』『日省簿<sup>33)</sup>』と題する記録に残していた。ここから対山と浮丘の関係を看取する。

『行余楽記一』は天保7年(1836)2月から同8年(1837)末までの記録であり、対山24歳から25歳にあたる。この約2年間で対山が登場する記事は14件確認できる。最初に登場するのは天保7年(1836)5月10日の条であり、

「楽亭展観書画於岸梅溪寺中 同遊者台山父子・町谷周啓」

とある。楽亭<sup>30</sup>が岸和田にある梅溪寺で展観した書画を対山親子が見に行った。なお、「台山」は対山の当時の号である。同年8月5日の条には、

「訪台山読芥子園画伝」

とある。浮丘が対山を訪れ、『芥子園画伝』という中国清代に刊行された書物を読んだ。さらに、天保8年(1837)11月10日の条には、

「夜読十八史略于台山子家」

とある。浮丘が対山を訪れ、十八史略という中国の歴史書を読んだ。このように、浮丘が所蔵する書物から画などを学んでいることがわかる。

『行余楽記二』は天保9年(1838)1月1日から同13年(1842)9月3日までの記録であり、対山26歳から30歳にあたる。この約5年間で対山が登場する記事は12件確認できる。天保13年(1842)4月10日の条に、

「対山移居于予南荘」

とあり、対山が浮丘の邸内に移ったことがわかる。対山はここに「芋海草堂」と呼ばれる画室を開く。

『日省簿』は天保15年(1844)9月16日から慶応2年(1866)8月8日まで全19冊の記録であり、対山32歳から54歳にあたる。1冊目から5冊目までは、天時(日付と天気)・往来・著作・居処・飲食・出入・書信の7つの欄に記し、6冊目から19冊目には、居処・飲食の欄がなくなり、天時・往来・著作・出入・書信の5つの欄に詳細な記述がある。天保15年(1844)10月28日の条に、

「陰晴不定 貸金三円及書画十品于対山為南遊資」

とある。対山はこの月末から紀州に出かけており、南遊とはこれを指し、金三円とは旅費であると考えられる。この他にも、

弘化4年(1847)3月17日「貸金五円於対山嘱于日又氏」

弘化4年(1847)6月25日「対山書来 廿二日発 貸五円金於対山」

弘化4年(1847)11月18日「対山書来 十六日発 貸金十両於対山并転致平松生所貸十金 通計二十円」

弘化5年(1848)4月22日「貸五円金於対山」

嘉永2年(1849)4月26日「対山書来 廿二日発 貸三円金於対山」

嘉永3年(1850)2月22日「貸三円金於対山」

嘉永3年(1850)4月26日「対山請借五円金 即貸五円金并報書」

のように、対山は浮丘から経済的援助を受けていたことがわかる。また、

弘化元年(1844)12月26日「晴夜雨 請江地雨後園于対山子」

嘉永元年(1848)10月22日「為対山轉致秋亭読易及蜀漢二傑図於山山氏」

嘉永5年(1852)10月11日「陰夜雨 対山寄所為岡野氏山水十二帖 八日発」

安政2年(1855)2月14日「為万代高林氏之寿図於対山贈潤筆金百疋」

安政2年(1855)11月2日「冬至 陰晴不定 高林氏寄 三円三方金 囑転致於対山」

安政2年(1855)11月3日「晴 贈五両三方金於対山 四日発」

安政2年(1855)11月4日「雨 対山一日書来 寄荷花遊魚図」

安政4年(1857)4月28日「贈千疋并一両二方半於対山氏 成子・深見二氏所囑」

安政4年(1857)5月17日「金千疋三十郎様分 式百疋反保様分」

文久2年(1862)1月17日「晴 為藏六氏贈三方金於対山」

文久2年(1862)2月23日「晴 対山十八日書并岸人某所需画山水来」

のように、対山は浮丘や浮丘を介して他の人から画の依頼を受けていることがわかる。さらに、

安政2年(1855)9月1日「陰 贈紅鯉六十六於越智貫名三十於対山」

安政2年(1855)11月10日「晴 贈蟹十枚於対山」

文久2年(1862)5月26日「雷雨 贈砂糖於対山訪某疾」

のように、浮丘は対山に様々な贈り物を届けており、京都に居所を移した対山も毎年正月に必ず一幅を浮丘に贈っている。このように、対山にとって浮丘は経済的援助のみを行うパトロンでないことがわかる。

表 3-4 対山の居所

居所	最初の年	最後の年	番号	典拠
和泉国日根郡中庄村	文化10年 1813年	弘化3年 1846年		『日根対山』*1
御幸町二条下る	弘化3年 1846年	弘化4年 1847年	1	『日根対山』 『日根対山雑巧上』*2 『皇都書画人名録』
両替町御池下る東側	弘化4年 1847年	安政元年 1854年	2	『日根対山』 『日根対山雑巧上』 『平安人物志』*3
柳馬場二条下る東側	安政元年 1854年	文久元年 1861年	3	『日根対山』 『日根対山雑巧上』
聖護院若松町	文久元年 1861年	明治2年 1869年	4	『日根対山雑巧下』*4 『平安人物志』*5

\*1: 『日根対山』泉佐野市教育委員会、1970年

\*2: 冠豊一『日根対山雑巧』上、近畿出版印刷、1988年

\*3: 嘉永5年版(1852)

\*4: 冠豊一『日根対山雑巧』下、近畿出版印刷、1988年

\*5: 慶応3年版(1867)

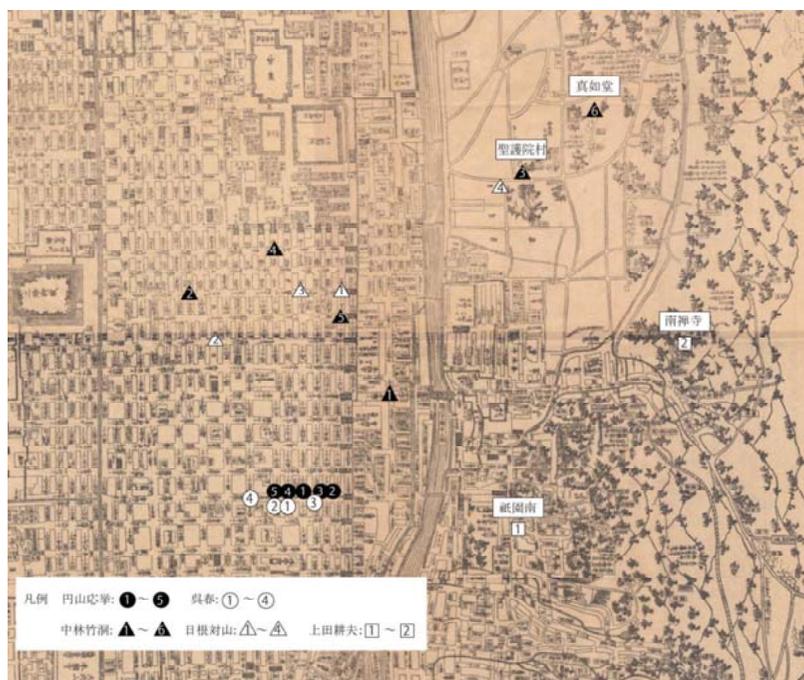


図 3-1 5人の絵師が京都において居所を構えた位置<sup>35)</sup>

### 3-7 小結

本章では、近世後期京都においてパトロンが存在が確認できる絵師の居住動向および居住地とパトロンの関係を取扱った。

応挙のパトロンであった祐常の居所は京都ではないが、天明 7 年 (1787) からパトロンになった真仁親王の居所は京都にあった。さらに、真仁親王は呉春のパトロンでもあった。このようなパトロンを持つ応挙と呉春の居所はいずれも四条通界隈に限定されていた。耕夫、竹洞、対山のパトロンは彼らが生まれた地域において財力を誇った人物であり、上京前からパトロンであった。彼らは京都において郊外に居所を構えており、一方、応挙と呉春は郊外に居所を構えることはなかった。つまり、パトロンが京都に在住する絵師は郊外に居所を構えず、パトロンが京外に在住する絵師は郊外に居所を構える傾向があった。

また、祐常の姉である青綺門院は櫻町天皇の后であり、櫻町天皇と開明門院の子である桃園天皇の孫が真仁親王である。このように応挙のパトロンであった祐常と真仁親王は親族関係にあった。江戸時代前半の京都という条件で「注文主と絵師の関係がどのようにして

成立したのかである。これについては、一つ大きな特徴があった。注文主の血縁関係が深く関わっていた。」「注文主の血縁関係が、絵師の活動範囲を広げる役割を果たしていたのである。」という五十嵐氏の指摘が、本章により江戸時代後半においても確認できた。つまり、パトロン存在は絵師の活動範囲を規定する面があり、新たなパトロン獲得は既存のパトロンとの関係とりわけ親族関係によるところが大きく、これは近世を通じて指摘できる。

### 註

- 1) 五十嵐公一『近世京都画壇のネットワーク ―注文主と絵師―』吉川弘文館、2010 年
- 2) 拙稿「近世京都における絵師の居住傾向」『日本建築学会計画系論文集』第 75 巻、第 654 号、pp. 2063-2071、2010 年 8 月)、拙稿「近世京都絵師の居住分布における流派別傾向」『日本建築学会計画系論文集』第 75 巻、第 667 号、pp. 2737-2745、2010 年 11 月)
- 3) 応挙の出身地については、『仙齋圓山先生傳』に「京師ノ人」とあることから京都説があったが、応挙門下であった岡村鳳水の『円山応挙伝』に「丹州桑田郡穴太村ノ人」「門生或ハ、師ヲ平安ノ人ナリト謂フ、是特ニ然ズ。余恐レラクハ年久シテ其実ヲ失フコトヲ。故ニ併テ事蹟ヲ述ブ。師恩ヲガレニ報ズル所以ナリ」とあることから丹波説が有力となっている。
- 4) 『華頂要略諸門跡伝』第百四十二
- 5) 宝暦 12 年 (1762)、同 13 年 (1763) の各 2 冊と明和 7 年 (1770) の後半冊、計 5 冊が欠失している。
- 6) 御茶の製法、豆腐やニンニクの調理法などの食事に関わること、薬湯の作り方、歯の処置などの医に関わることなどである。
- 7) 佐々木丞平、佐々木正子『円山應舉研究』研究篇、中央公論美術出版、1996 年に 175 項目すべてが紹介されている。
- 8) 今中寛司『妙法院真仁親王御直日記』に現れた写生派絵師たち (同志社大学文化学会『文化学年報』第 23・24 輯合併号、同志社大学文化学会、1975 年)
- 9) 応挙、呉春の他に、月隱、伊藤若冲、円山応瑞、山本守礼、岡本保孝、小沢芦庵、村瀬榜亭、皆川淇園、東東洋、伴蒿蹊、谷文晁などが妙法院に出入りしていた。
- 10) 十五口 昇頭圓山應舉入来、俣右近も来ル、席画有り。横物、秋海棠ミそさゝい。塀物、琴高重垂・ソテツ。同、栗ニ啄木。塀物、梅ニ鶯右近、山水同。横物、玉右近。横物、鶯・亀・松茸録うへ舉。知足・宗仙見物相願、應舉盃、右近口祝。
- 11) 書院待合の六枚屏風、三幅対の掛物、松・竹・福祿寿の三幅対などがある。
- 12) 呉春は従来、尾張生まれとされていたが、『松村家略系』により堺町四条下の町生まれと判明した。
- 13) 真仁親王は文化 2 年 (1805) に、『真仁親王関東御参向之記 坤・乾』という記録を残している。
- 14) 応挙と息子応瑞は主水を名乗ったが、応挙は寛政 7 年 (1795) に逝去したため、『真仁親王関東御参向之記 乾』における円山主水は応瑞のことを指す。

- 15) 註 8 前掲 pp. 30。
- 16) 註 8 前掲 pp. 30-31。
- 17) 木村重圭「上田耕夫について」(兵庫県立歴史博物館『塵界』第 16 号、兵庫県立歴史博物館、2005 年)において、生没年の検討がされている。
- 18) 小林雲山編『古今日本書畫名家全傳』二松堂、pp. 229-230、1931 年
- 19) 小林忠・河野元昭監修『日本絵画論大成』第 7 卷、ベリかん社、1996 年、大分県教育庁管理部文化課編『田能村竹田』資料集 著述篇、大分県教育委員会、1992 年などに所収。
- 20) 水口紀久・野山隆・有坂道子編『兼葭堂日記』藝華書院、2009 年所収。
- 21) 「寛政十三年庚申閏四月十八日写於鏡翠館耕夫」の落款がある。
- 22) 拙稿「近世後期京都における絵師の郊外居住について」(『日本建築学会計画系論文集』第 77 卷、第 678 号、pp. 1981-1986、2012 年 8 月)
- 23) 註 22 前掲。
- 24) はじめ質商、のち味噌醤油醸造業。
- 25) 兼松盤門『竹洞と梅逸』西報社、pp. 4-5、1910 年
- 26) ただし、墓誌銘は次男とする。
- 27) 「南面の緻密にして精神韻致ある者に至ては決して凡庸の企て及ぶべき所にあらず。近年我邦に於て之を能する者は、京都に日根対山あり、参河に渡辺華山あるのみ。」(倉野焯園編『鉄翁画談』鴻盟社、1886 年)「その兩渾厚にして和熟、筆力あつて筆力没し、また支那の臭味を脱し、適勁のうちに京畿優雅の趣を帯ぶ。余輩はこれを以て京都文人画家の第一位に置かんと欲す。」(藤岡作太郎『近世絵画史』金港堂書籍、1903 年)
- 28) 居所を構えたのは弘化 3 年 (1846) からであるが、天保 10 年 (1839) から同 12 年 (1841) にかけて、しきりに京都に滞在している。
- 29) 註 22 前掲。
- 30) 桃田栄雲、貴名海屋、岡田半江、斎藤楽亭、大國隆正といった人物と親交があった。
- 31) 泉佐野市史編さん委員会『新修泉佐野市史』第 2、3 卷、清水堂出版、2009 年所収。
- 32) 泉佐野市史編さん委員会『新修泉佐野市史』第 6 卷、清水堂出版、2005 年所収。
- 33) 里井家所蔵文書。
- 34) 京都の絵師斎藤楽亭を指す。
- 35) 天保 2 年 (1831) に作成された地図(考正：池田東籬亭、画：中邑有樂齋、版元：文叢堂竹原好兵衛)を使用して作成した。

## 第 4 章 近世および近代の郊外居住

#### 4-1 はじめに

絵師に関する居住地の実態を解明するべく、第1章では居住地の分布を年代ごとに看取り、その動向全体を把握した。第2章では流派別に居住地の傾向を看取り、流派ごとの居住動向とパトロンとの関係性について検討を加えた。これらの論考で、近世と近代における郊外居住の関係性を指摘したが、論証するまでには至らなかった。両時代における郊外居住の実態をそれぞれ解明すること、また両時代における郊外居住の連続、不連続性を明らかにすることが本章の目的である。

4-2では、近世における絵師の郊外居住の実態解明に努める。池大雅、原在中、岸駒、田中訥言、中林竹洞、日根対山に注目し、彼らの郊外居住地における生活の様相や著書、指図等の様々な視点から検討する。

4-3では、近代における画家の郊外居住の実態解明に努める。竹内栖鳳、田中麦僊、小野竹喬に注目し、文献史料や現存建物等から検討する。

#### 4-2 近世の郊外居住

京都は近世において芸術、文化の分野で日本の中心にあった。なかでも朝廷や幕府など一部の階層にとつての嗜好品であった絵画は町人文化の中にも浸透し、その需要が急速に高まり、絵師の動向は主流を形成していた。

『平安人物志』『皇都書画人名録』『京羽津根』に収録される郊外居住者は約90人におよぶが、史料等の制約により当時の状況が判明する絵師はごく一部に限られる。先の史料から池大雅、原在中、岸駒、田中訥言、中林竹洞、日根対山は郊外に居所を構えていたことが判明する。さらに、個々の研究蓄積が豊富にあり、当時の状況をうかがうことができる<sup>1)</sup>。本節では彼らに関して、居所の動向、制作活動等の軌跡をたどる<sup>2)</sup>。なお、豊臣秀吉(1537-1598)は都市改造政策の一環として、天正19年(1591)に御土居を築いた。御土居の内側は洛中、外側は洛外と呼ばれ、これに準じて本章では御土居の外側である洛外を「郊外」とする<sup>3)</sup>。

##### 4-2-1 池大雅について

池大雅は享保8年(1723)に京都両替町銀座中村氏の下役を勤めた池野嘉左衛門の子として生まれ、安永5年(1776)に54歳で逝去する。与謝蕪村(1716-1784)とともに日本における南画の大成者として知られている。

大雅の居所は表4-1の通りである。また、表4-1における居所の位置を図4-3に示した(ただし京都における居所に限る)。はじめ西陣菱屋町に住んでいたが<sup>4)</sup>、享保11年(1726)4歳のとき父が亡くなり、母とともに寺の内千本通へ居所を移したという。元文2年(1737)15歳のとき母とともに二条樋口町へ移住し、「袖亀堂」と呼ばれる扇子屋を開いた。寛保2年(1742)20歳のとき聖

護院村へ移住する。その後、延享2年(1745)23歳のとき知恩院古門前袋町へ居所を移し、東山双林寺門前の路傍で自筆の書画を売って生活していた。宝暦元年(1751)29歳のとき祇園神社の門前で茶店を営む百合の子町(玉瀾、1727-1784)と結婚し<sup>5)</sup>、神福院境内にある真葛ヶ原の草堂と呼ばれる家に住む(図4-1)。これにより大雅は、母がいる知恩院古門前袋町の家と妻玉瀾がいる真葛ヶ原の家を持つ。『平安人物志』明和5年版(1768)において、大雅と玉瀾の居所がそれぞれ「知恩院袋町」「祇園下河原」となっているのはこのためである。

図4-1は大雅の弟子である月峰(1760-1839)筆による真葛ヶ原の草堂である<sup>6)</sup>。図4-1の書入れを調べ、その周辺に記した<sup>7)</sup>。四方に東西南北が記され、上方が北、西が下河原通にあたる。人見少華氏によると<sup>8)</sup>、図面全体が神福院境内であり、祇園南林の一部であった。「隠居老尼宅」とあるのは社僧の老尼であったらしい。「祇園社僧神福院惣門」から「大雅堂へ行客此門より往来す」と書かれたところを通り、大雅堂を訪れたと思われる。「若林權右衛門宅、俗医也」や「手伝若松や十右衛門宅」については説明されておらず、どのような人物だったかは不明である。

図4-2は大雅の弟子である野呂介石(1747-1828)筆による池大雅居室図である<sup>9)</sup>。この図は大雅が逝去した16年後に野呂介石が記憶をもとに描いた図である。解説文は和歌山藩医であった今井元方で、一志齋などの号がある。「室之左間僅施三席霞棟居其中右間施六席妻玉瀾居之其中間為厨房」とある。これにより、左側は三畳で大雅の居室、右側は六畳で妻玉瀾の居室、中央は厨房であることがわかる。この居室が図4-1の「大雅堂」に相当する。また、「菜園之外四環皆堵」「一面開門」とあり、これらが図4-1の外廓、神福院惣門にあたる。

図4-1の「大雅堂」から南の方へいくと梅林があって、「此所白砂、大作品は快晴の日ここにて認」とある。大雅の居室は二畳であったので大作等を手掛ける際は、この白砂の場所で揮毫していた。大雅作品のなかには『芥子園画伝』などの中国から伝えられた画伝や画譜を研究して描かれたものや、地方を遊歴し、その先々の風景を画いたものがある。一方で、花草木を題材にした作品も多く確認できる。これらは白砂の周りに備わっていた、「めづらしき花等は此花壇に植る」とある花壇、「小サキ池、松藤等有」とある池、「此邊梅林」とある梅林などを題材にしたことも考えられ

表4-1 池大雅の居所

居所	最初の年	最後の年	番号*2	典拠
西陣菱屋町	享保8年 1723年	享保11年 1726年	1	『池大雅』*3
寺の内千本通	享保11年 1726年	元文2年 1737年	2	『池大雅』
二条樋口町	元文2年 1737年	寛保2年 1742年	3	『池大雅』
聖護院村	寛保2年 1742年	延享2年 1745年	4	『池大雅』
知恩院古門前袋町	延享2年 1745年	宝暦元年 1751年	5	『池大雅』
真葛ヶ原*1	宝暦元年 1751年	安永5年 1776年	6	『日本書人傳』*4 『平安人物志』*5

\*1: 大雅の居所を示す場合、真葛ヶ原は神福院境内、祇園下河原などと呼ばれることがある。

\*2: 図4-3の数字とそれぞれ対応(以下、表4-3から表4-6についても同様)。

\*3: 松下英蔭『池大雅』春秋社、1967年

\*4: 辻邦生「池大雅」(中田勇次郎編『日本書人傳』中央公論社、1974年)

\*5: 安永4年版

る。つまり、白砂周辺の景観が大雅の制作活動に欠くことのできない装置としての役割を果たしていたと考えることができ、この場所、ここからの眺望などが文人画家池大雅を形成していった要因の一つとして指摘できる。結婚を契機として真葛ヶ原へ居所を移した大雅が生涯この地に居所を構えたのは、制作活動を充実させる環境が備わっていたからだと考えられる。



図4-1 月峰筆 真葛ヶ原の草堂



図4-2 野呂介石筆 池大雅居室図

#### 4-2-2 原在中について

原在中は寛延3年(1750)に原性園の子として生まれたと伝えられ<sup>10)</sup>、天保8年(1837)に88歳で逝去する。狩野派の石田雨村(1721-1786)に画を学び、のち一家をなして原派の祖となる。

在中は『平安人物志』によると、安永4年版と天明2年版では葎屋町長者町下町(図4-3の①)に、文化10年版では聖護院村(図4-3の②)に、文政5年版と文政13年版では小川中立売(図4-3の③)に居所を構えていたことがわかる。

在中の作品について、制作年が判明する一部を表4-2に示す。在中は文化・文政期に相国寺、仁和寺、真如寺、三玄院、聖護院などの寺院に多くの障壁画を残している。表4-2において文化年間の作品は1点のみであるが、相国寺、仁和寺、三玄院、さらに高野山西室院に残る作品が多い<sup>11)</sup>。

在中は文化10年(1813)までに、葎屋町長者町下町から聖護院村へ居所を移しており、この時期以降、障壁画制作が盛んになっていることから、制作活動の充実を図ったことが一つの契機として指摘できる。さらに、二男の在明(1781-1844)が中立売町東に居所を構え<sup>12)</sup>、原派を継承していることから、隠居を契機とした移住であった可能性もある。つまり、在中が聖護院村へ居所を移した背景には、制作活動の充実と隠居という要因があったと考えられる。

表4-2 原在中の作品

制作年	作品名	制作背景・所蔵場所
寛政2年	1790年 「築漁図」	三時知恩寺書院(恭礼門院御殿を移築したもの)
寛政4年	1792年 「高浜盛夏図繪」	維明周奎(相国寺第115世)の賛あり 園松寺蔵
寛政8年	1796年 「神馬図絵馬」	今宮神社蔵
文化5年	1808年	西明寺模絵を描く
文政2年	1819年 「山水図」	相国寺蔵
文政2年	1819年 「琴棋書画図」	相国寺蔵
文政2年	1819年 「群仙図」	相国寺蔵
文政2年	1819年 「唐獅子・白象図」	相国寺蔵
文政3年	1820年 「鳥禽図」	三玄院蔵
文政3年	1820年 「虎図」	三玄院蔵
文政3年	1820年 「梅花小禽図・牡丹孔雀図」	三玄院蔵
文政3年	1820年 「松猿図」	三玄院蔵
文政4年	1821年 「旭日波濤図」	高野山西室院蔵
文政4年	1821年 「旭日波岩図」	高野山西室院蔵
文政4年	1821年 「高士喫茶図」	高野山西室院蔵
文政4年	1821年 「牡丹菊花図」	高野山西室院蔵
文政4年	1821年 「雪景山水図」	三玄院蔵
文政4.5年	1821.22年 「果実図」	高野山西室院蔵
文政4.5年	1821.22年 「鷹雁白鷺図」	高野山西室院蔵
文政4.5年	1821.22年 「竹虎図」	高野山西室院蔵
文政5年	1822年 「蘭亭曲水図」	高野山西室院蔵 在明、在親、在善との合作
文政5年	1822年 「溪流菊花図」	醍醐寺蔵
文政7年	1824年 「山水図」	仁和寺蔵
文政8年	1825年 「四季花鳥図」	仁和寺蔵
文政8年	1825年 「山水図」	仁和寺蔵
文政10年	1827年 「牽馬図絵馬」	大田神社蔵
文政12年	1829年 「花鳥図」	光格天皇が下賜したもの 聖護院蔵
文政12年	1829年 「波に鶴・竹に鶴図」	真珠庵蔵
文政12年	1829年 「花鳥図」	仁和寺蔵
天保5年	1834年 「山水図」	高野山西室院蔵

#### 4-2-3 岸駒について

岸駒は寛延2年(1749)に金沢で生まれ<sup>13)</sup>、天保9年(1838)90歳で逝去する。虎を題材にした作品を得意とし、岸派の開祖となる。

岸駒の居所は表4-3の通りである。安永8年(1779)31歳のとき堺町三條下るに居所を構える。同9年(1780)32歳のとき斎藤氏の女を娶り、三條烏丸へ移住する。天明2年版によると、この頃は高倉三條下る町に居所を構えている。寛政10年(1798)50歳のとき柳馬場錦小路上るに、享和2年(1802)54歳のとき東洞院丸太町下る町に、文化7年(1810)62歳のとき室町四條下る町に居所を構えている。『平安人物志』によると、文化10年版では間之町竹屋町北に、文政5年版では室町四條南に居所を構えていたことがわかる。文政7年(1824)76歳のときには洛北岩倉證光寺を再興し、ここに居所を構える。

天保9年(1838)12月5日、岸駒は柳馬場の居所で生涯を閉じ、遺体は25日、東洞院の居所から京極本禅寺に移され墓所に葬られた<sup>14)</sup>。ここから晩年、岸駒の居所は少なくとも3ヶ所あったことがわかる。岩倉の居所は廢寺を再興しており<sup>15)</sup>、また、両親の靈堂を建てるなど<sup>16)</sup>、これまでの居所には見られない要素が確認できる。さらに、岩倉に居所を構えた年齢やこの頃すでに長男の岸岱(1782-1865)に家督を譲っていることも考慮すると、隠居を契機とした移住であったと考えられるだろう。

表 4-3 岸駒の居所

居所	最初の年	最後の年	番号	典拠
金沢	寛延2年 1749年	安永8年 1779年		『天開翁略年譜』*1
堺町三條下る	安永8年 1779年	安永9年 1780年	1	『天開翁略年譜』
三條烏丸	安永9年 1780年	天明2年以前 1782年以前	2	『天開翁略年譜』
高倉三條下ル町	天明2年以前 1782年以前	寛政10年以前 1798年以前	3	『平安人物志』*2
柳馬場錦小路上る	寛政10年 1798年	享和2年 1802年	4	『天開翁略年譜』
東洞院丸太町下る町	享和2年 1802年	文化7年 1810年	5	『天開翁略年譜』
室町四條下る町	文化7年 1810年	文化10年以前 1813以前	6	『天開翁略年譜』
間之町竹屋町北	文化10年以前 1813以前	文政5年以前 1822年以前	7	『平安人物志』*3
室町四條南	文政5年以前 1822年以前	文政7年 1824年	6	『平安人物志』*4
洛北岩倉證光寺	文政7年 1824年	天保9年 1838年	8	『天開翁略年譜』『平安人物志』*5

\*1: 編纂された年代は不明。岸家に伝来する岸駒の年譜としてまとまった唯一のものであり、ここにしか見られない伝承も多い。

\*2: 天明2年版

\*3: 文化10年版

\*4: 文政5年版

\*5: 文政13年版および天保9年版

#### 4-2-4 田中訥言について

田中訥言は明和4年(1767)に尾張で生まれ、文政6年(1823)に57歳で逝去する。10代で京都に出て、円山応挙や原在中などを門弟に抱える石田幽汀に入門する。天明6年(1786)の幽汀没後は上佐光貞(1738-1806)に師事する。

訥言の居所は表4-4の通りである。尾張で生まれた訥言は10代ときに嵐山の大悲閣で僧として生活を送っていたが、やがて帰俗して幽汀の弟子となる。その後、文化8年(1811)頃から同10年(1813)頃まで生活の拠点を尾張に移す。現存作品も多数残っており、この頃が訥言の最も充実した時期であった。一方、文化10年版によると伏見街道とあり、京都における居所が記されている。文政元年(1818)52歳のとき富小路錦小路上る町に、文政5年(1822)54歳のとき両替町二条北に居所を構えており、文政6年(1823)55歳のとき嵐山へ居所を移す。

訥言は復古大和絵の祖として知られ、古画の模写を通して技を磨いた。剥落までも正確に模写するほどであった。そのため、晩年には絵師にとって命よりも大切な視力を失った<sup>17)</sup>。そこで青年時代に住んでいた嵐山の大悲閣で療養生活を送り、この地で生涯を終えた<sup>18)</sup>。つまり、訥言は療養を目的として嵐山へ移住したことがわかる。

表 4-4 田中訥言の居所

居所	最初の年	最後の年	番号	典拠
尾張	明和4年 1767年	安永6年 1777年		『古今墨蹟鑑定便覧』
嵐山	安永6年 1777年	文化8年頃 1811年頃	1	『松宇遺稿』
尾張	文化8年頃 1811年頃	文化10年頃 1813年頃		『田中訥言』*1
伏見街道	文化10年頃 1813年頃	文政元年 1818年	2	『平安人物志』*2
富小路錦小路上ル町	文政元年 1818年	文政5年以前 1822年以前	3	『大胎家及内田家書簡』
両替町二条北	文政5年以前 1822年以前	文政6年 1823年	4	『平安人物志』*3
嵐山	文政6年 1823年	文政6年 1823年	1	『田中訥言』

\*1: 山田秋衛『田中訥言』曾保津之舎、1938年

\*2: 文化10年版(1813)

\*3: 文政5年版(1822)

#### 4-2-5 中林竹洞について

中林竹洞は安永5年(1776)に尾張(名古屋桑名町あたり)の産科医中林玄棟の子として生まれ、嘉永6年(1853)に78歳で逝去する。山本梅逸(1783-1856)と並び尾張を代表する文人画家である。14歳で山田宮常(1747-1793)に入門し、翌年、神谷天遊に師事する。天遊は尾張の富商で竹洞のパトロンでもあり、さらに竹洞と梅逸を名付けたのも天遊である。

竹洞の居所については3-5で取り上げたが、表4-5として再度紹介する。郊外に居所を

移した時期とその場所は文化12年（1815）頃に聖護院村、天保9年（1838）に神楽岡真如堂前である。

弘化3年（1846）刊行の詩歌集『清白集』によると、48歳の竹洞は、咫尺の花すらぼやけてしまうほどの眼病を患っていた<sup>19)</sup>。また、文政12年（1829）成立の『知命記』には「眼疾を患て読書廃絶すること七年なり、常に志を遂げずして止みぬることを嘆す」とあり、40代後半にあたる文政年間の足掛け7年ほどは眼病に苦しんでいた<sup>20)</sup>。よって、文化12年（1815）頃の聖護院村への移住は、療養を目的としたことが指摘できる。

天保9年（1838）、竹洞は家督を息子竹溪（1816-1867）に譲り、神楽岡真如堂前に居所を移す。これ以降、数年間は作画活動を行うが、70代になると著作活動が主要になる。また、両親の碑を真如堂に建て、恩師天遊を偲ぶ恩徳追遠の碑を建てるなど<sup>21)</sup>、さらに世俗との関わりを避けて静かな隠棲生活を送っていた。

以上、聖護院村へは療養を目的とした移住、真如堂前へは隠居を契機とした移住であったことが考えられる。

表 4-5 竹洞の居所

居所	最初の年	最後の年	番号	典拠
尾張	安永5年 1776年	享和2年 1802年		『竹洞と梅逸』*1
木屋町三条上	享和2年 1802年	享和3年 1803年	1	『竹洞と梅逸』『竹洞画論』
尾張	享和3年 1803年	文化8年 1811年		『竹洞と梅逸』
衣棚二条南	文化8年 1811年	文化12年頃 1815年頃	2	『竹洞と梅逸』『平安人物志』*2 『名古屋博物館研究紀要』*3
聖護院村	文化12年頃 1815年頃	文政13年以前 1830年以前	3	『竹洞と梅逸』『平安人物志』*4
高倉竹屋町北	文政13年以前 1830年以前	天保9年以前 1838年以前	4	『平安人物志』*5
御幸町押小路北	天保9年以前 1838年以前	天保9年 1838年	5	『平安人物志』*6
神楽岡真如堂前	天保9年 1838年	嘉永6年 1853年	6	『竹洞と梅逸』『平安人物志』*7 『皇都書画人名録』

\*1：兼松蘆門『竹洞と梅逸』画報社、1910年

\*2：文化10年版

\*3：神谷浩「中林竹洞」『名古屋博物館研究紀要』第9巻、名古屋博物館、1986年

\*4：文政5年版

\*5：文政13年版

\*6：天保9年版

\*7：嘉永5年版

#### 4-2-6 日根対山について

日根対山は文化10年（1813）に和泉国日根郡中庄村で生まれ、明治2年（1869）57歳で逝去する。同郷の廻船問屋を家業とする里井浮丘が対山の才能をいち早く見出し、対山は浮丘所有の中国名画などから画を学んだ。また、浮丘は桃田栄雲、貫名海屋（1778-1863）、岡田半江（1782-1846）といった人物と親交があり、対山は浮丘の紹介により彼らから画の手ほどきを受けることができた。

浮丘は生涯を通して対山のパトロンであった<sup>22)</sup>。

対山の居所については3-6で取り上げたが、表4-6として再度紹介する。郊外に居所を移した時期とその場所は文久元年（1861）に聖護院若松町である。

現時点で確認できた対山の作品数は、御幸町二条下る時代が7点、両替町御池下る東側時代が42点、柳馬場二条下る東側時代が76点、聖護院若松町時代が159点である。また、京都において対山の画名があがったのは、両替町御池下る東側から柳馬場二条下る東側に居所を移した安政改元のころである。作品数も42点から76点と増加している。しかし、次の聖護院若松町時代は159点とさらに増加していることがわかる。これらは現在判明する対山作品の数であり、このほかにも多数の作品を対山は描いていると考えられるが、確認できる作品のうち聖護院若松町時代の作品が半数以上を占めている。つまり、聖護院若松町への移住は制作活動の充実を図ったことが一つの契機として考えられる。

表 4-6 対山の居所

居所	最初の年	最後の年	番号	典拠
和泉国日根郡中庄村	文化10年 1813年	弘化3年 1846年		『日根対山』*1
御幸町二条下ル	弘化3年 1846年	弘化4年 1847年	1	『日根対山』『日根対山雑巧上』*2 『皇都書画人名録』
両替町御池下ル東側	弘化4年 1847年	安政元年 1854年	2	『日根対山』『日根対山雑巧上』 『平安人物志』*3
柳馬場二条下ル東側	安政元年 1854年	文久元年 1861年	3	『日根対山』『日根対山雑巧上』
聖護院若松町	文久元年 1861年	明治2年 1869年	4	『日根対山雑巧下』*4 『平安人物志』*5

\*1：『日根対山』泉佐野市教育委員会、1970年

\*2：冠豊一『日根対山雑放』上、近畿出版印刷、1988年

\*3：嘉永5年版（1852）

\*4：冠豊一『日根対山雑放』下、近畿出版印刷、1988年

\*5：慶応3年版（1867）

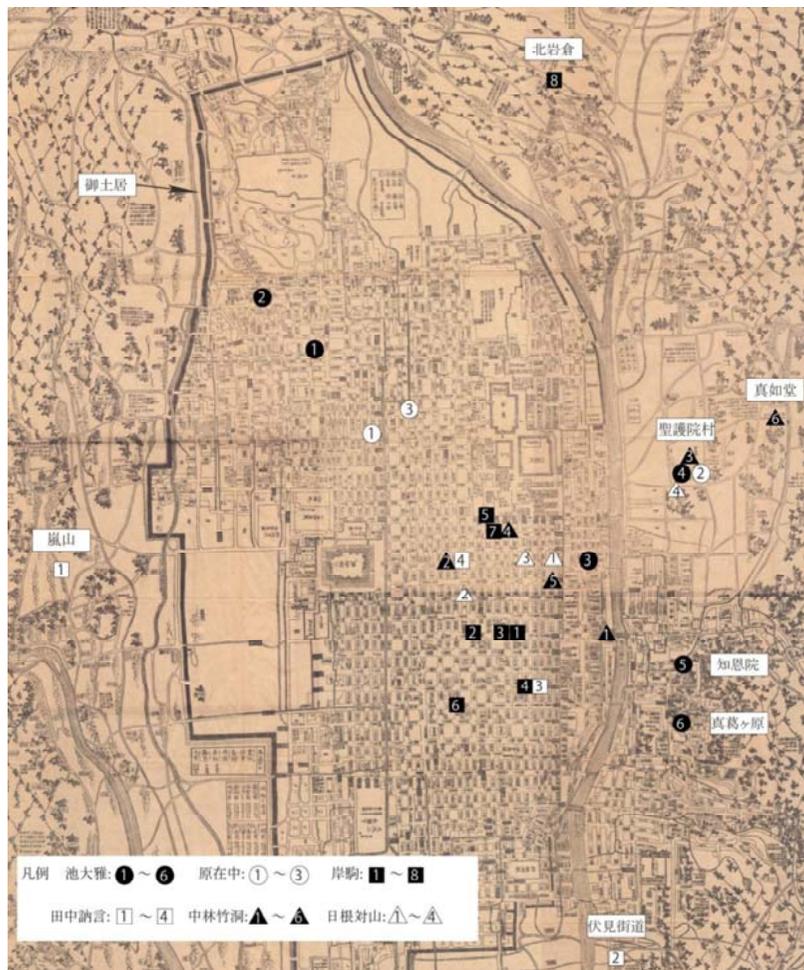


図 4-3 6人の絵師が京都において居所を構えた位置<sup>23)</sup>

#### 4-2-7 まとめ

以上、近世京都において郊外居住が確認できる絵師の動向を看取した。これらにより、近世京都における絵師は、

- (1) 制作活動の充実
- (2) 隠居の場

#### (3) 療養の場

を求め、郊外に居所を構えたことが明らかになった。

上記の (1) から (3) について若干の検討を行う。

(1) については大雅、在中、対山が指摘できる。大雅は真葛ヶ原の居所に、29 歳から 54 歳で生涯を終えるまでこの地に居続け、文人画の大成者として世に知られるようになった。この真葛ヶ原の居所において、大作品を揮毫していた白砂がある場所の周辺には、制作活動を充実させる環境があり、大雅にとって制作活動の拠点となっていたことが指摘できる。在中は寺院の障壁画制作が盛んに行われ始めた文化期に聖護院村へ移住する。対山は居所と作品数の関係を見ると、聖護院若松町時代の作品数が最も多くなっており、絵師として充実していたことがわかる。在中と対山、いずれも制作活動が盛んに行われた時期に郊外へ移住しており、その充実を図ったことが考えられる。

(2) については在中、岸駒、竹洞が指摘できる。在中が聖護院村に居所を構えた時期、息子の在明が原派を継承していることから隠居の場としての郊外居住であったと指摘できる。一方で、障壁画制作が盛んに行われている時期であることから、在中の郊外居住には、制作活動の充実および隠居の場を求めたことが考えられる。岸駒について、洛北岩倉證光寺の居所は廃寺を再興したものであり、さらに、両親の壺堂を建てるなど、柳馬場や東洞院などこれまでの居所には見られない要素が確認できる。また、岩倉に居所を構えたのは文政 7 年 (1824) 岸駒 76 歳のときであり、この時すでに息子岸侘に家督を譲っている。竹洞は竹溪に家督を譲り真如堂前へ移住する。その後、両親や天遊の碑を建て、世俗との関わりを避けるなど静かに余生を送る。岸駒と竹洞、両者とも家督を息子に譲り、これまでの居所では見られない要素が確認できることから、隠居の場を求めた郊外居住であったと考えられる。

(3) については竹洞、訥言が指摘できる。竹洞は文政年間、眼病に苦しんでいた。その前兆はおそらく文化年間からあらわれていたと思われる。その後、制作活動に影響が出るほど眼病が悪化し、文化 12 年 (1815) に聖護院村へ移住する。訥言は晩年、視力を失い、療養を目的として青年時代に住んでいた嵐山大悲閣へ移住する。両者とも眼病を患い、その後、郊外へ移住していることから、療養の場を求めた郊外居住であったと考えられる。

以上、近世における京都の絵師は様々な理由により郊外居住に至ったことを明らかにした。

#### 4-3 近代の郊外居住

近代に入り西洋文化とともに洋画も日本に浸透し、洋画を専門とした画家が現れる。これにより、画家にはこれまでの絵画を描く日本画家と洋画を描く洋画家が含まれる。本章では近代における郊外居住の実態を明らかにするとともに、近世におけるそれと比較検討を加えるため、研究対象とする画家は洋画家を除いた日本画家に限ることとする。

近世京都における絵師については『平安人物志』等の出版物により網羅的に把握できる。これは近代に入って『西京人物誌<sup>24)</sup>』とその名前を変えて継承されていく。しかし、明治12年(1879)の刊行のみであり、さらに収録人数は『平安人物志』と比べ減少しているため<sup>25)</sup>、近代の画家は近世の絵師のように網羅的に把握することが困難となる。そこで、本節では前節同様、郊外に居所を構えていたことが判明し、さらに個々の研究蓄積が豊富にあり、当時の状況をうかがうことができる画家に絞って考察する。具体的には竹内栖鳳、上田麦僊、小野竹喬である<sup>26)</sup>。まず彼らの居所の動向を把握し、次いで郊外居住の実態解明に努める。

#### 4-3-1 竹内栖鳳について

竹内栖鳳は元治元年(1864)11月22日に政七ときぬの長男として生まれ、昭和17年(1942)8月23日に逝去する。本名は恒吉、父政七は料亭「亀政」を営んでいた。はじめ上田英林<sup>27)</sup>に学び、のちに幸野模嶺(1844-1895)の私塾に入門する。横山大観(1868-1958)と並び近代を代表する日本画家で、近代京都画壇の巨匠であった。上田麦僊、小野竹喬、橋本関雪(1883-1945)、上村松園(1875-1949)等、多くの門弟を抱えていた。

栖鳳の居所は表4-7の通りである。御池通油小路西入森ノ木町12に生まれた栖鳳は、明治20年(1887)西陣で織物業を営む高山家の長女奈美との結婚を契機として、生家「亀政」の筋向かいに新世帯を構え、画家として独立する。昭和4年(1929)東山区高台寺南道松屋町371の新邸宅に転居する。栖鳳が居所を構えた場所としてはこの3か所が知られているが、ほかに別荘を2つ所有していた。1つ目は大正元年(1912)に嵯峨天龍寺の旧壬生家を別邸として購入し、邸内に自ら凶面を引いて新築した「霞中庵」である。嵐山を借景とした庭園は栖鳳の趣向で作庭されたといわれている。2つ目は昭和9年(1934)、湯河原にある天野屋の敷地の一角に居室と画室を兼ねて新築した別宅である。

表 4-7 竹内栖鳳の居所

居所	最初の年	最後の年	番号*
御池通油小路西入森ノ木町12	元治元年 1864年	明治20年 1887年	1
御池通油小路西入森ノ木町 (生家「亀政」の筋向かい)	明治20年 1887年	昭和4年 1929年	2
東山区高台寺南道松屋町371	昭和4年 1929年	昭和17年 1942年	3

中島理壽氏が編んだ「竹内栖鳳ノ年譜」(朝日新聞社文化企画局大阪企画部編『没後60年竹内栖鳳展』朝日新聞社、2001年)を参考にして作成。

\*: 図4-1の数字とそれぞれ対応(以下、表4-8、表4-9についても同様)。

#### 嵯峨の別邸「霞中庵」について

栖鳳は嵐山に近い嵯峨に別荘地を求め、大正元年(1912)に「霞中庵」と称される山荘を完成させる(資料1、2)。文久3年(1863)尊王攘夷派の公卿たちが京都から退去させら

れた、いわゆる「七卿都落ち」の1人であった壬生家の邸宅とそのまわりの茶畑を購入した栖鳳は5年がかりでこの山荘を造営したらしい。その広さは3,000坪にも及ぶ広大な造作であった。

庵は茅葺きで、六畳と四畳半とで、三畳の控室が付いてある。簡易に水屋が備へてある。本屋からの通廊は、面通りの北山丸太に斑竹が挟み使つてある。六畳の部屋の、床脇一間の一枚板は神代杉で、蝶貝螺鈿の散紅葉である。むろん下絵は父の作で、窓障子を開けると、薄が顔を出してゐた。そして天井は船底天井で、一本の太い煤竹が渡してある。欄間はこれも父の下絵で、桐の一枚板が霞形に彫り抜いてあるし、南庭に面した主柱は、樹皮のまゝの太い椿幹である。この柱は幾度も気に入らなくて、遂に父は庭の野生えの椿を切り倒して、使つた。

その他、この庵の各部を細記してゐては際限がない。なぜかなら、どの天井も、どの廂裏も、どの縁側も、どの障子も、一つとして同じではない。いずれも父特有の、軽い意匠が凝してあるし、襖紙も残らず父の下絵である。

では、この霞中庵全局の感触はどうか?それは、田舎家のやうでもあり、茶席のやうでもあり、実用の一屋のやうでもある。且つ、贅沢なやうでもあり、簡素のやうでもある。

これは栖鳳の息子竹内逸が亡き父を偲んで認めた回想記の一部である<sup>28)</sup>。「霞中庵」は栖鳳自ら凶面を引いたことで知られるが、この回想記から部材の一つ一つにまで栖鳳の眼が行き届いていたことがわかる。また田中日佐氏は栖鳳独特の空間感覚として三角形の平面がみられること、さらに嵐山を借景とした庭園が山懸有朋の無鄰庵<sup>29)</sup>庭園から影響を受けたことを指摘している<sup>30)</sup>。無鄰庵庭園は小川治兵衛<sup>31)</sup>(1860-1933)の作庭で明治27年(1894)着工、同29年(1896)竣工。栖鳳は無鄰庵を訪れ、有朋から画の依頼を受けたことがある<sup>32)</sup>。この時期が「霞中庵」完成の前か後かはわからない。しかし、無鄰庵庭園の竣工が明治29年(1896)、「霞中庵」の完成が大正元年(1912)であるから、田中氏の指摘通り栖鳳は無鄰庵の庭園から影響を受け「霞中庵」庭園の作庭に取り掛かつたとみてよいだろう。

以上のごとく、「霞中庵」では、無鄰庵庭園の影響を受けつつ嵐山を借景とした庭園を完成させており、栖鳳自身が「どうもな、景色のいゝトコロにあると、画が描きにくうな<sup>33)</sup>」と語るほどの景観であった。このような庭園の作庭を可能にしたのは、3,000坪にも及ぶ広大な敷地を確保したことが考えられる。市内にこの規模の敷地を確保することは困難であり、したがって郊外に求めることは必然となる。また、御池通油小路にあった本宅には門弟たちが下宿し、画を学ぶなど、多くの人が在住、往来する場所であったため、別荘として建てられた「霞中庵」は栖鳳が制作活動に専念できる場所であったことが指摘できる。



資料1 「霞中庵」全景



資料2 「霞中庵」書院から茶室に向かう廊下

#### 高台寺南道松屋町における居所

昭和4年(1929) 栖鳳は新しい邸を東山区高台寺南道松屋町371に建て、御池から居所を移した。「耕漁荘<sup>34)</sup>」の生活空間と「霞中庵」の別荘空間を折衷したような屋敷であった。1,300坪余りの敷地に木造瓦葺2階建て107.6坪、同平屋15.7坪、鉄筋コンクリート3階建て44.2坪、土蔵9.6坪などの建物があった。この邸は「東山艸堂」などの号がある<sup>35)</sup>。

家を建てる云ふ事は却々難しいものだと思います。此頃私は高台寺に小さな建築をやっているのですがどうもうまく行きませぬ。

何でも最初は大変な意気込みで、随分いろいろ凝った積りの設計をやってみたりしたものでした。支那の家の様な壁の厚いのも面白いなァと思ったり、蒐集品室と云った風な特別室もあったらえゝやろなァと思って見たり、夫れに間取りも間取りやけど外からみた恰好も気持ちが悪ゝ様にしたし、と兎に角いろんな注文を一つに纏め様と云ふ事になると却々思ふ様にならぬもので、まあまあさう大袈裟な事は措いて此際一応の間に合はせに小さなものにしとこかと云ふ様な事が到頭落ちになってしまった様な訳でした。そして、どうせ切りが無いし先づ此辺の事にしとこかと云ふ事になって、其設計を本職の建築をする人に見せるとなると、然し、一休雨樋は何処におつけになるお積りですと云ふ様な思ひも掛けなかった隙を突込まれて、成程さいどすなァと訳もない事に感心さされる様な事が出て来たりして、折角考へ込んだ積りの外見の恰好が散々になぶり壊されてしまったり、要するにそうした様な事で日が経って行く許りでした。

まあ座敷の床の天井を合天井にして螺鈿を嵌込んだりした位が山と云へば山ですか。切めて花の咲く頃迄には仕上げ一つ皆様に庭の花でも見て頂かう、と云ふ漠とした積りでやり掛った筈でしたが、さて昨日今日の所まで来て見ると花は散ってもどうやら仕事は手離れ相にもありませぬ。庭の桜の木は鳥渡珍しい古木ですが、前の所有者の時代に大根が切られて致命傷を負はされてみますので、今では側に代りの稚

木を植付けて後釜を用意して居ると云ふ様な心細い始末で決して大した自慢にはならないものです。眺めは、庭に出れば八坂の塔も入って来ますが、座敷からでは唯東山が見える位のところが取柄です。

これは栖鳳が雑誌『大毎美術』で語った記事である<sup>36)</sup>。当初、栖鳳は「東山艸堂」の設計に相当な意欲を持って取り組んでいた。中国建築の知識があったことや、生活空間だけでなく外見の意匠にまでこだわって設計を行っていたことがわかる。ある程度まとめた設計プランを建築家に見せたところ、雨樋がないことを指摘され、外見の意匠が大きく変更になった。この記事から、栖鳳は建築に対してある程度の知識があり、細部にわたり自らの趣向を凝らすほどであったが、雨樋を付け忘れていたことから設備についての知識はなかったといえるだろう。

また栖鳳は「霞中庵」で揮毫することについて、「どうもな、景色のいゝトコにあると、画が描きにくうてな」と語っており、「東山艸堂」を建てるにあたり、画室の窓を全部擦ガラスにして外からの視界を遮断した。

さらに田中氏によると、完成した図面に従って建てられたのではなく、一部屋が完成すればそれにまた一部屋を付け足していく、というやり方だったらしく、そのため余った計算外の空間は三角形の空間として処理されたらしい<sup>37)</sup>。その過程はともかく「東山艸堂」においても三角形の空間が確認できる。

以上のごとく、「東山艸堂」は1,300坪余りの敷地内に建ち、「霞中庵」同様、市内にこの規模の敷地を確保することは困難であったと考えられる。また、この地域は無鄰庵および対龍山荘に代表されるように別荘地が形成されており<sup>38)</sup>、当時の時流を踏まえたとも考えられる。さらに「霞中庵」における作庭では無鄰庵庭園の影響を受けており、栖鳳にとって特別な場所であった。画室の窓は全部擦ガラスを採用しており、制作活動に集中できる環境を整えているが、東山の景観は栖鳳の制作意欲をさらに湧き上がらせたと推測できる。

#### 4-3-2 土田麦僊と小野竹喬について

土田麦僊は明治20年(1887)2月9日に農業を営む千代吉とクラの三男として生まれ、昭和11年(1936)6月10日に逝去する。本名は金二、はじめ鈴木松僊に習うが、明治37年(1904)太田錦湖の紹介で竹内栖鳳に入門し、麦僊の号を得る。

麦僊の居所は表4-8の通りである。新潟県佐渡郡新穂村大字井内372に生まれた麦僊は、明治35年(1902)金沢村正覚坊の志和舜雅のもとに預けられ、翌36年(1903)志和舜雅に連れられて智積院に入ったが画家を志して出奔、法衣商峯芳吉の斡旋で二条新地大文字町北の町家に間借りする。明治42年(1909)御池通池小路西入る森ノ木町の栖鳳宅に寄宿する。大正元年(1912)竹喬とともに栖鳳宅から知恩院山内崇泰院に移り住み、同4年(1915)「遊女」のモデル大道千代との結婚を契機として、栗山口三条広道に新居を構える。大正8年(1919)北区等持院東町に住居を新築する。また、大正6年(1917)北野白梅町に、昭

和 8 年（1933）北区等持院東町の邸内に画室を設けている。

小野竹喬は明治 22 年（1889）11 月 20 日に才次郎と花代の四男として生まれ、昭和 54 年（1979）5 月 10 日に逝去する。本名は英吉、生家は濱中屋と号する文具商であったらしいが、のちには菓子屋とラムネ製造業を兼業していたらしい。竹内栖鳳に入門し、竹橋の号を得る。

竹喬の居所は表 4-9 の通りである。岡山県小田郡笠岡村笠岡に生まれた竹喬は、明治 36 年（1903）、長兄益太郎が下宿する御幸町錦上るにあった菓屋市川の 2 階に暮らす。明治 38 年（1905）、御池通油小路西入の栖鳳宅に寄宿する。直前には兄の出奔により油小路御池西入の寺で自炊生活を送っていた。明治 41 年（1908）、栖鳳寄宿室を出て下河原の益太郎宅に身を寄せたのち、富小路綾小路上るにあった従弟の浜田家に間借りする。大正元年（1912）、麦僊とともに知恩院山内崇泰院に移り住む。大正 4 年（1915）、粟田口三条広道に居所を構える。大正 5 年（1916）、トラヨと結婚し、知恩院山内林下町に移住する。大正 6 年（1917）、衣笠園に画室を新築し、住居を室町出水上るに移す。大正 7 年（1918）、住居を室町頭鞍馬口朝日通に新築する。大正 11 年（1922）、下鴨宮河町出町橋北、下鴨高野河畔御蔭端西詰と住居を転々としたが、10 月にはアトリエを等持院北町に定めたとされる。大正 12 年（1923）、7 月 21 日付けの葉書で画室を衣笠等持院境内に、住居を衣笠等持院中町 8 に移したことを通知する（資料 3）。昭和 4 年（1929）、衣笠等持院南側 55 に住む。昭和 6 年（1931）、8 月 15 日付けの葉書で等持院北町に移転したことを通知する。

表 4-8 上田麦僊の居所

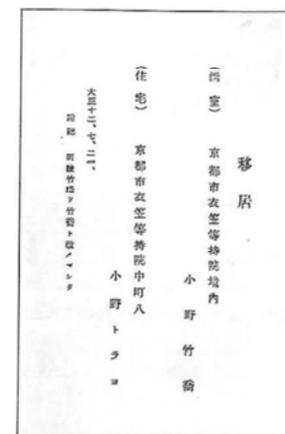
居所	最初の年	最後の年	番号
新潟県佐渡郡新穂村大字井内372	明治20年	明治35年	
	1887年	1902年	
新潟県佐渡郡金沢村	明治35年	明治36年	
	1902年	1903年	
二条新地大文字町北	明治36年	明治42年	1
	1903年	1909年	
御池通油小路西入森ノ木町	明治42年	大正元年	2
	1909年	1912年	
知恩院山内崇泰院	大正元年	大正4年	3
	1912年	1915年	
粟田口三条広道	大正4年	大正8年	4
	1915年	1919年	
北区等持院東町	大正8年	昭和11年	5
	1919年	1936年	

新潟県立近代美術館編『上田麦僊』土田麦僊実行委員会、2009 年において編まれた年譜をもとに作成。

表 4-9 小野竹喬の居所

居所	最初の年	最後の年	番号
岡山県小田郡笠岡村笠岡	明治22年	明治36年	
	1889年	1903年	
御幸町錦下る	明治36年	明治38年	1
	1903年	1905年	
御池通油小路西入森ノ木町	明治38年	明治41年	2
	1905年	1908年	
富小路綾小路上る	明治41年	大正元年	3
	1908年	1912年	
知恩院山内崇泰院	大正元年	大正4年	4
	1912年	1915年	
粟田口三条広道	大正4年	大正5年	5
	1915年	1916年	
知恩院山内林下町	大正5年	大正6年	6
	1916年	1917年	
室町出水上る	大正6年	大正7年	7
	1917年	1918年	
室町頭鞍馬口朝日通	大正7年	大正12年	8
	1918年	1923年	
衣笠等持院中町8	大正12年	昭和4年	9
	1923年	1929年	
衣笠等持院南側55	昭和4年	昭和6年	10
	1929年	1931年	
衣笠等持院北町	昭和6年	昭和54年	11
	1931年	1979年	

弓野隆之、上藺四郎、徳山亜希子、鶴見香織編『小野竹喬展』毎日新聞社、2009 年において編まれた年譜をもとに作成。



資料 3 大正 12 年（1923）7 月 21 日付けの葉書

以上、麦僊と竹喬の居所の動向を看取し、ともに知恩院山内崇泰院、粟田口三条広道、衣笠等持院に居所を構えたことがわかった。当時、十分な収入のない若い画家にとって、寺院は画を描くための広い部屋があり恰好の住まいとなっていた。彼らが知恩院崇泰院に移り住んだのもこのような理由であった。

#### 粟田口三条広道における居所

粟田口三条から南禅寺近傍における地域は明治末から大正にかけて別荘地が形成されていく。とりわけ、山懸有朋や伊集院兼常がこの地域に別荘を建設したのは周知の通りである。有朋の無鄰庵および兼常の対龍山荘には庭園が備わっており、これらは小川治兵衛の作庭、国の名勝に指定されている。麦僊と竹喬がこの地域に居所を構えたのは、このような当時の時流も踏まえたと思われる。また、無鄰庵や対龍山荘同様、両者の住居にも庭園が備わっていたかは不明であるが、周辺環境が制作活動の充実につながったと推測できる。

#### 衣笠等持院界隈における居所

この地域は藤村岩次郎により明治45年(1912)ごろから「衣笠園」として宅地化されていく<sup>39)</sup>。麦僊や竹喬の他にも村上華岳(1888-1939)、菊池契月(1879-1955)、吹田草牧(1890-1983)など多くの画家が居所を構え「画家村」の異名があった。麦僊と竹喬が栖鳳塾に入門したのはそれぞれ明治37年(1904)、明治36年(1903)とほぼ同時期である。また、明治42年(1909)には京都市立絵画専門学校に入学し<sup>40)</sup>、明治43年(1910)に田中喜作を中心として結成された「黒猫会」、さらにその後の「仮面会」への参加<sup>41)</sup>、また大正7年(1918)の国画創作協会の結成<sup>42)</sup>というように、近代における日本画革新運動を共に行動した麦僊と竹喬は特別な関係にあったと思われる。「衣笠園」には国画創作協会の結成に携わった村上華岳もいた。このように、近代的な絵画の創造を共通の目的とした彼らが、「衣笠園」に居所を構えることで、この地域が「画家村」と呼ばれるほどの特色を持つようになる。つまり、麦僊や竹喬たちは近代京都において、住宅地形成の一つの契機になったことが指摘できる。

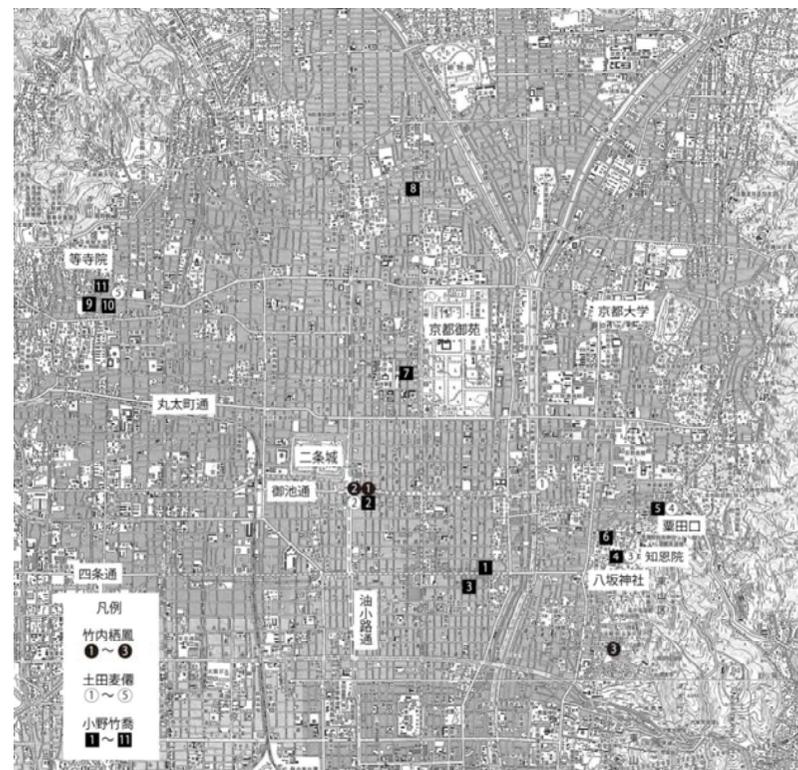


図 4-4 3人の画家が京都において居所を構えた位置<sup>43)</sup>

#### 4-3-3 まとめ

以上、近代京都において郊外居住が確認できる画家の動向を看取した。これらにより、近代京都における画家は制作活動の充実を求め、郊外に居所を構えたことが明らかになった。まず栖鳳について、「霞中庵」および「東山艸堂」の敷地は広大であり、この規模を市内に確保するのは困難となるため、その場所は郊外に求められた。「霞中庵」は御池通の本邸に多くの門弟が出入りしていた栖鳳にとって、制作活動が専念できる場であり、「東山艸堂」は画室の窓を全部擦ガラスに変更し、制作活動に集中できる環境を整えているが、東山の景観が栖鳳の制作意欲をさらに湧き上がらせる要因になったことから、制作活動の充実を求めて郊外に居所を構えたと指摘できた。次に麦僊と竹喬について、2人が居所を構えた粟田口三条界隈は、明治末から大正にかけて別荘地が形成され、これらの周辺環境などが制作活動の充実につながったと指摘できた。

麦僊と竹喬が居所を構えた衣笠等持院界隈には、ほかにも村上華岳、菊池契月、吹山草牧など多くの画家が居所を構え「画家村」の異名があり、近代京都において画家の集住は住宅地形成の一つの契機になったことを指摘した。

栖鳳は「霞中庵」と「東山艸堂」において建築の設計と庭園の作庭に自ら取り掛かった。三角形の空間という独自の意匠がみられ、建築に対しての嗜好性もうかがえるなど、画家が建築の設計に携わる初期の実例として位置付けることができる。

また栖鳳はその晩年、湯河原の天野屋に別宅を新築している。「東山艸堂」に生活、画業の拠点を移した昭和4年(1929)の秋、栖鳳は肺炎にかかり一時床に臥すことになった。その後、回復したものの同6年(1931)2月に今度は流行性感冒にかかったことがきっかけとなり、再び肺炎を併発し、さらに胃潰瘍に悩まされ専心治療に努めたが、5月に胆石症の発作に襲われ、この一連の不運により栖鳳は転地療養することになった。この転地療養の場として湯河原の温泉宿である天野屋に身を投じ、ついに同9年(1934)この宿の敷地に居室と画室を兼ねた別宅を新築した<sup>4)</sup>。つまり、療養を目的として湯河原に別宅を建てたことがわかる。

#### 4-4 小結

4-2では絵師の郊外居住について、4-3では画家の郊外居住について、その一端をそれぞれ明らかにした。つまり、近世の絵師は制作活動の充実、隠居の場、療養の場を求めて、近代の画家は制作活動の充実を求めて、郊外に居所を構えた。近世および近代を通して郊外居住に至る動機として制作活動の場を求めたことが共通している。その地域は栖鳳の別荘である「霞中庵」を除き鳴東地区にあり、両時代における東山の環境が絵師・画家にとって制作活動を充実させるものであったと推測できる。このように制作活動の充実を求めた郊外居住の風潮は近世から近代へ継承されていることが明らかになった。

近世の絵師が郊外に求めた隠居の場と療養の場については、まず隠居の場であるが、在中、岸駒、竹洞は郊外に居所を構えた後も揮毫は続けているが、在中と岸駒は家督を息子に譲り、竹洞は世俗との関わりを避けた生活を送っていたことから指摘できた。一方、近代の画家は郊外に移住後も制作活動を続け、逝去する直前まで展覧会に出品する作品を描いていることから、隠居の場としての郊外居住とは考えにくい。次に療養の場であるが、栖鳳は療養を目的として湯河原に別宅を建てており、ここには伊藤博文や夏目漱石なども療養している。これは近代以降、交通手段の発達や身分制度の崩壊による社会的立場の変化によって、庶民の行動範囲が広がり、その結果、近世では郊外に求められた療養の場が近代では他府県に求めることが可能になったと考えられる。つまり、近世においては郊外居住に療養の場が求められていたが近代においては求められなくなった、ということではなく、療養の場が郊外から他府県へ拡大したと捉えることができるだろう。これは近世から近代への変容過程において、庶民の生活習慣、社会情勢の変化という点で注目される。

以上、近世と近代における郊外居住の連続、不連続性について論じた。

また、麦僊や竹喬といった画家が、近代京都において住宅地形成の一つの契機になったことを指摘した。これは開発を意図したものではない点において、電鉄会社などの開発業者や政策の一環による近代以降の住宅地開発とは一線を画し、京都独自の住宅地形成の一端として捉えることができる。

さらに、郊外居住は近代画家の建築設計や作庭を導いた可能性がある。栖鳳が設計した住宅には三角形の空間という独自の意匠がみられ、作庭においては無鄰庵庭園の影響を受けながら嵐山を借景とした庭園を完成させるなど、どちらも栖鳳の嗜好性がうかがえる。これは画家が建築の設計等に携わる初期の実例として位置付けることができる。

#### 註

- 1) 池大雅については人見小華『池大雅』中央公論社、1926年、松下英麿『池大雅』春秋社、1967年、原在中については上居次義『原在中の西業』（『日本近世絵画』桑名文星堂、1944年所収）、岸駒については宮島新一「岸駒」（富山美術館編『岸駒』富山美術館、1987年）、田中訥言については山田秋衛『田中訥言』會保津之介、1938年、中林竹洞については兼松盛門『竹洞と梅逸』西報社、1910年、日根対山については『日根対山』泉佐野市教育委員会、1970年、冠豊一『日根対山雑攷』上下、近畿出版印刷、1988年といった基礎的研究がある。また、史料について、池大雅には『池大雅家譜』（佐々木米行『池大雅家譜（岡岡家本）』池大雅美術館、1982年が刊本にある）、岸駒には『天開翁略年譜』『岸駒揮毫日記』（いずれも富山美術館編『岸駒』富山美術館、1987年所収）、中林竹洞には『知命記』『清白集』、日根対山には『行余楽記一』（泉佐野市史編さん委員会編『新修泉佐野市史』第2、3巻、清水堂出版、2009年所収）『行余楽記二』（泉佐野市史編さん委員会編『新修泉佐野市史』第6巻、清水堂出版、2005年所収）『日省簿』（里井家所蔵文書）などがある。
- 2) 分析対象とする絵師の活動年について、池大雅と日根対山では約100年離れており、時代背景等が異なる。しかしながら、近世後期という時代は京都画壇の成立から発展をみせており、その流れを包括的に取り上げることが望ましい。さらに、近世後期を通して京都は芸術、文化の中心であったため、その全体を把握する必要がある。
- 3) 京都町奉行所の記録である『京都御役所向大概覚書』（岩生成一監修『京都御役所向大概覚書』上巻、清水堂出版、1973年）によると、京都の出入り口各所には杭木之文言があり「是より洛中荷馬口付のもの乗へからず」と明示されている。江戸時代、市街地の拡大とともに御土居の破壊が進み、特に東側において、河原町通、寺町通沿いは早くから市街地化するが、洛中と洛外の境はおおよそ鴨川であったことがわかる。
- 4) 大雅の出生地について、松下英麿氏（註1前掲）は西陣菱屋町と北山深泥池村（上京区上賀茂深泥町）とする説があり、大雅が生まれたとき、父は菱屋町に住んでいたことから西陣菱屋町と推定している。辻邦生氏（『池大雅』（中田勇次郎編『日本書人傳』中央公論社、1974年））は西陣菱屋町であったとしている。
- 5) 大雅の結婚時期については、他に延亨3年(1746)24歳説がある。しかし、松下英麿氏（註1前掲）は寛延元年(1748)、寛延3年(1750)などの長期旅行や『兼葭堂雜録』がこの説のもとになっていることから根拠が

- 薄弱であるとしている。
- 6) 人見少草『池大雅研究発表1—大雅堂を中心に—』洽陽藏、1937年所収の「大雅舊居圖」を転載した。
  - 7) 註6前掲を参考にした。
  - 8) 註6前掲。
  - 9) 註6前掲所収の「池無名居室圖」を転載した。
  - 10) 在中の出自については次の諸説がある。「①若座小浜の藩主酒井家の奥医師原某の娘が藩主に仕え、一子を儲けたが、その子を京へ連れ帰り親戚某に預けた。その子が長じて酒造業を営んだ。これが父性園である。」「②その奥医師がすなわち性園で、娘の連れ帰った乳児を性園の三男とし、遠縁にあたる京都葺屋町下長者町、酒造業坂本屋八右衛門の子として預けた。この子が長じて在中となる。」田邊昌平「原在中について～出自と写真を中心にして～」(敦賀市立博物館『京都画壇 原派の展開：特別展』敦賀市立博物館、2001年)と原在修「在中と原派」(京都府立総合資料館『原在中とその流派』京都府立総合資料館友の会、1976年)では、①の落胤説を採用している。
  - 11) 宮島新一「西流の形成と継承—り山・四条派と原・岸派—」(『日本屏風絵集成』第8巻、講談社、1978年)、松尾勝彦「原在中研究」(美術史學會『美術史』第114冊、便利堂、1983年)。
  - 12) 『平安人物志』文化10年版(1813)。
  - 13) 岸駒の出自については寛延2年(1749)説と宝暦6年(1756)説があり、出生地については金沢説と高岡(富山県)説があるが、いずれも明らかにはされていない(田邊昌平「岸駒の生没享年と作風についての一考察—岸矩・雅楽助時代を中心として～」(敦賀市立博物館『岸派の展開』敦賀市立博物館、2005年))。
  - 14) 『天開翁略年譜』より。
  - 15) 『天開翁略年譜』より。
  - 16) 『天開翁略年譜』より。
  - 17) 訥言の眼病に関する史料はほとんど残されていないが、『石亭画談』および『後素談叢』において、訥言失明の記述がある。
  - 18) 山田秋衛(註1前掲)。
  - 19) 「春日村居、四十余年一歩中、算来親友半帰空、書長村巷無人至、臥聽南窓竹樹風、清貧知足一村翁、自咲迎春囊更空、一病況回張藉患、看春咫尺尚朦朧 四十八歳在錦織村中患眼未癒」
  - 20) 弘化3年(1846)に刊行された『融齋画譜』の大倉笠山序にも「忠眼七年」とある。
  - 21) 「筆拙ふして古人の妙致にいたること能はずといへども、高尚を極ることを極ることを惜るは天遊翁の教示による所なり」(『知命記』より)のように、竹洞にとって天遊から受けた感化がいかにか大きかったかが窺える。
  - 22) 浮丘の他にも、島津久光、鍋島開叟、松平春嶽、山内容堂、武井松庵、野口正忠、平松蓋丘などが対山のパトロンとして確認できる。
  - 23) 天保2年(1831)に作成された地図(考正：池田東籬亭、西：中島有樂齋、版元：文叢堂竹原好兵衛)を使用して作成した。
  - 24) 『新撰京都叢書』第九巻、臨川書店、1986年所収。

- 25) 「画之部」には土佐光文、鶴沢深信、狩野永常、森寛齋、鈴木百年、岸竹堂、望月玉泉、幸野梅嶺、鈴木百穂、国井応文、巨勢小石、山本桃谷、鈴木百翠、久保田米僊、今尾景年、塩川文鶴、中島有章、原在泉、山田文厚、村瀬玉田、八木雲溪、長谷川玉峯、羽田月洲、野村文举、加納黄文、田光古月、前川文嶺、伊澤九楽、徳美友仙、桜井百嶺、鈴木瑞彦、吉坂鷹峯、跡見玉枝、田中有美、島田雅喬の35人、「南画」には中西耕石、田能村直入、梁川紅蘭、村田香谷、谷口露山、浅井小白、重春壇、前田荷香、池田雲樵、福島半仙、秦金石、池田雲濤、小田半溪、山本竹雲、杉原竹圃、山岡墨僊の16人、計51人が収録されており、102人が収録されている慶応3年版の半数である。
- 26) 竹内栖鳳については竹内逸『栖鳳閑話』改造社、1936年、松村梢鳳『本朝画人伝』巻五、中央公論社、1973年、平野重光『竹内栖鳳 芸苑余話』京都新聞社、1986年、田中日佐夫『竹内栖鳳』岩波書店、1988年、平野重光『栖鳳芸談(「日出新聞」切抜帳)』京都新聞社、1994年、廣田孝『竹内栖鳳 近代日本画の源流』思文閣出版、2000年、土田麦僊については松村梢鳳『本朝画人伝』巻五、中央公論社、1973年、辻鏡子『回想の父・土田麦僊』京都書院、1984年、柏木加代子『かきつばた 土田麦僊の愛と芸術』大阪大学出版会、2003年、小野竹喬については田中日佐夫、田中修二『海を渡り世紀を超えた竹内栖鳳とその弟子たち』思文閣出版、2002年などを参考にした。また、栖鳳、麦僊、竹喬を対象とした展覧会が開かれており、これらの図録なども参考にした。
- 27) 生没年は不詳。生家「亀政」の近隣にあった葉茶屋を営む主人で「葉茶屋の絵かきはん」と呼ばれていた。横山晴暉(四条派)の門人であったが、友禅の下絵や博物の標本画を描いて収入を得ていた。
- 28) 竹内逸「遺郎秋箱の記」(『國畫』塔影社、1942年12月号)
- 29) 有朋は無鄰庵と呼ばれる邸を二度にわたって造営している。一度目は長州吉田駅に當み、二度目は木屋町二条の山角倉別荘を購入、ここを無鄰庵と称し、二度目は南禅寺近傍である。栖鳳が影響を受けたと考えられる庭園は、南禅寺近傍に當んだ二度目の無鄰庵のことである。
- 30) 田中日佐夫(註26前掲)。
- 31) 七代目小川治兵衛。屋号は植治。江戸時代中期から続く日本庭園の作庭家・庭師。無鄰庵庭園のほかに対龍山荘庭園など多くの名庭を残す。
- 32) 田中日佐夫(註26前掲)。
- 33) 竹内逸「栖鳳遺作展小感」(桜井猶可編『栖鳳遺作展覧会』大雅堂、1943年)
- 34) 明治20年(1887)に父から買ってもらった生家の筋向いに構えた住宅の号。元々画家の堂号に用いられ、そのいわれは「中頃頃、耕漁荘と云ふ号を用ひたこともあります。これはつまり耕漁せずば食はずの意で、片方にさう云ふすななどのものを持ちながら芸術境に遊びたいのが私の本願でした」(竹内栖鳳「心境風景」『新潮』新潮社、1933年7月号)と栖鳳自身が語っているが、やがて画室だけでなく栖鳳邸の総称として用いられた。
- 35) 「霞中山房」「麓臺茨室」「東山々下是吾家」といった別号がある。
- 36) 竹内栖鳳「家を建てる」(『大毎美術』大毎美術社、1928年4月号)
- 37) 田中日佐夫(註26前掲)。
- 38) 近代におけるこの地域の別荘地開発については、矢ヶ崎善太郎「明治期における南禅寺近傍の別荘地開発」(京都工芸繊維大学工芸学部研究報告『人文』第38号、pp.49-65、1990年)、矢ヶ崎善太郎「近

代京都の東山地域における別邸郡の初期形成事情」(『日本建築学会計画系論文集』第 507 号、pp.213-219、1998 年 5 月)が詳しい。

- 39) 「衣笠園」については、石田潤一郎「《衣笠園》の形成—近代京都における住宅地形成(その2)—」(『日本建築学会近畿支部研究報告集』第31号、計画系、pp.809-812、1991年5月)といった研究がある。
- 40) 前身は京都市立美術工芸学校、その起源は京都府画学校である。
- 41) 「黒猫会」は批評家と日本画・洋画の青年画家たちの一種の談話会であった。集まったのは田中喜作を中心に麦僊、竹喬のほか、櫻野南陽、秦テルフ、福本古葉、杉浦香浦、田中善之助、黒田重太郎、新井謙也、津田青楓の合計 11 人であった。しかし、意見の相違により解散し、再び田中喜作を中心に麦僊、竹喬、謙也、重太郎、善之助の 5 人が「仮面会」を結成する。
- 42) 文展に不満、疑問を持った京都在住の若手画家、麦僊、竹喬、入江波光、榊原紫峰、野長瀬晩花、村上華岳によって、西洋美術と東洋美術の融合と、新しい日本画の創造を目指して結成された。
- 43) 1/25,000 地形図(国土地理院測量、2006年5月発行)をもとに作成した。
- 44) 「湯河原に魅せられた私は、いま永住のつもりで、腰を下ろして居る。」(竹内栖鳳「栖鳳清談」『翠彩』翠彩社、1940年3月号)と栖鳳自身が語っているように、この土地を気に入っていた。

## 結章

本研究で明らかにした要点は以下の通りである。

第1章では、近世京都における絵師の居住地について、その実態を解明する端緒として、年代を追って居住分布の傾向を明らかにした。

『平安人物志』『皇都書画人名録』『京羽津根』という近世京都で刊行された史料を用いて、約10年間ごとの居住分布を看取したことにより、天明、文政、弘化において居住分布の傾向に変化が生じた。天明では特定の通りに居所を構えるようになり、文政では特定の地域に居所を構えるようになり、弘化では四条通以南に居所を構える絵師が増加するようになる。このように居住分布は時代が進むにつれて集中し、さらに南方に拡大していくことを明らかにした。

さらに、内裏周辺および郊外に注目し、その居住分布の傾向をそれぞれ看取した。内裏周辺にみられる居住分布では、文化から天保において絵師は内裏南方と西方にそれぞれ居所を構えていたが、弘化以降、内裏西方に居所を構える絵師が減少し、内裏南方に居所を構える絵師が増加することを明らかにした。郊外においては、明和から居所を構える絵師が確認でき、文化以降、増加傾向にあること、また、その地域は祇園界隈や聖護院村といった鴨東地区に集中していること、さらに、郊外には文人画家や四条派、岸派といった町絵師に多くみられることを明らかにした。

第2章では、近世京都における絵師の居住分布について、流派別に傾向を明らかにし、さらに、流派ごとの居住動向とパトロンとの関係性について若干の考察を加えた。

流派ごとに看取した居住分布の傾向では以下のことを明らかにした。御用絵師は内裏や二条城界隈に居所を構える居住分布の傾向であった。町絵師は四条派と円山派のように独自の居住分布の傾向をみせる流派と、岸派、原派、望月派のように文化以降、内裏界隈に居住分布が集中する傾向をみせる流派に分かれる。文人画家は全体に分散するが、郊外とくに鴨東地区への居住分布が町絵師や御用絵師よりも集中する。

このように明らかになった流派ごとの居住分布の傾向とパトロンとの関係性を考察することで、居住地の傾向はパトロンとしての公家、町人の存在と密接に関係していることが明らかになった。つまり、流派による居住傾向の違いはパトロンとの関係性の中に見出せる、という新たな知見を得た。

第3章では、近世京都においてパトロンの存在が確認できる絵師の居住動向を看取し、さらに絵師の居住地とパトロンとの関係に注目して考察を加えた。その結果、パトロンが京都に在住の絵師は郊外に居所を構えず、パトロンが京外に在住する絵師は郊外に居所を構える傾向があったことを明らかにした。

また、パトロンの存在は絵師の活動範囲を規定する面があり、新たなパトロンの獲得は既存のパトロンとの関係とりわけ親族関係によるところが大きく、これは近世を通じて指摘できた。

第4章では、京都における近世の絵師および近代の画家にみられる郊外居住について、その一端をそれぞれ解明し、さらに、両時代の連続、不連続性について分析、検討を行っ

た。近世の絵師については制作活動の充実、隠居の場、療養の場を求めた郊外居住であったこと、近代の画家については制作活動の充実を求めた郊外居住であったことを明らかにした。

郊外居住に至る動機はなかで、制作活動の充実を求めたことが両時代に共通して看取でき、このような風潮が近世から近代へ継承されていくことを明らかにした。さらに、その地域は鴨東地区に集中しており、近世と近代を通して東山の環境が制作活動を充実させるものであったことを指摘した。

近世の絵師が郊外に求めた隠居の場と療養の場については、まず隠居の場としての郊外居住は近代の画家において看取できないため、両時代に連続性はみられなかった。次に療養の場としての郊外居住であるが、近代の画家は他府県に求めるようになり、これは交通手段の発達や身分制度の崩壊による社会的立場の変化にその根源を見出すことが出来た。つまり、療養の場としての郊外居住は近世から近代への連続性はみられないが、郊外から他府県へ拡大したと捉えると、近世から近代への変容過程において、庶民の生活習慣、社会情勢の変化という点で注目されることを指摘した。

また、麦僊と竹喬の居所の動向や当時の状況を看取することで、画家個人の動向が近代京都において住宅地形成の一つの契機になったことを指摘した。これは開発を意図したものではない点において、電鉄会社などの開発業者や政策の一環による住宅地開発とは一線を画し、京都独自の住宅地形成の一端と評価し得る。

さらに、郊外居住は近代画家の建築設計や作庭を導いた可能性がある。栖鳳が設計した住宅には三角形の空間という独自の意匠がみられ、作庭においては無鄰庵庭園の影響を受けながら嵐山を借景とした庭園を完成させるなど、どちらも栖鳳の嗜好性がうかがえる。これは画家が建築の設計等に携わる初期の実例として位置付けることができた。

以上の結果をまとめると、近世京都における絵師の居住分布は、全体的な傾向としては時代が進むにつれて集中と拡大の傾向にあり、居住分布を構成するある要素を抽出すると、内裏周辺では西方で分散、南方で集中し、郊外では文人画家や四条派、岸派といった町絵師の居住分布が目立った。流派別の居住傾向をみると、町絵師、御用絵師、文人画家それぞれに特有の傾向が看取でき、パトロンとしての公家、町人の存在と密接に関係していることを明らかにした。すなわち、流派による居住傾向の相違はパトロンとの関係に起因する面がある、という新たな知見を得た。パトロンが京都に在住の絵師は郊外に居所を構えず、パトロンが京外に在住する絵師は郊外に居所を構える傾向にあった。また、近世の絵師は制作活動の充実、隠居の場、療養の場を求めて郊外に居所を構えた。制作活動の充実を求めた郊外居住の風潮は近代の画家へ継承され、療養の場は郊外から他府県に求めるようになった。画家個人の動向が近代京都において住宅地形成の一つの契機になり得ることを示し、近代京都の独自性を見出した。さらに、郊外居住は近代画家の建築設計や作庭を導いた可能性があり、栖鳳はこの最初期の事例として見出すことができた。

## おわりに

本研究は建築史、都市史の分野ではこれまで本格的に着手、解明されていなかった絵師・画家を対象としている。とくに京都は近世および近代において日本画壇の中心的な位置にあり、彼らの居住地の実態を解明することは、近世都市ならびに近代都市京都の都市変容の過程を紐解く手掛かりとなった。

「近世近代京都における絵師・画家の居住地に関する史的研究」という論題で研究を進めてきたが、近世の絵師に関する史料の博搜、分析に思いのほか時間を費やしてしまい、近代の画家を扱った論考が一部に限られてしまった。近世の絵師と同様に近代の画家についても居住地の分布を網羅的に把握することや、パトロンとの関係を検討するべきであった。また、他の地域との比較、検討を行い、京都にみられる独自性や日本全体にみられる普遍性について分析するなど、解明すべき残された課題は少なくないが今後の課題として研究を継続していきたい。

本研究の端緒は『平安人物志』に収録される絵師の情報整理からであった。大学院に進学し、研究対象となる題材を模索していた筆者にとってこれが博士論文作成の第一歩になるとは思いもなかった。もともと京都に生まれ育った筆者はこの馴染みのある地域の歴史に興味を持っており、絵師・画家に関連する史料を博搜、分析するにつれて歴史研究の醍醐味に魅せられ、研究を進めることになった。情報整理が完成し、その成果を学会に発表したが、これに至るまでにはかなりの月日を費やした。その後この研究を深化させるべく、ただひたすらに関連史料を博搜し続け、研究成果をまとめていった。本論文はこのような経緯を経て、関西大学に提出する学位請求論文としての一心の体裁をもってまとめることができた。これはひとえに筆者がこれまで賜った学恩のおかげである。

藤田勝也先生には、研究に関して全くの初心者であった筆者にいろはからご指導していただいた。筆者のなかなか抄らない研究を辛抱強く見守っていただき、論文としてまとめるきっかけを与えていただいた。また、研究室の活動の一環として行った建造物等の調査では、建物遺構を教材として建築史学の理解を深めるご指導をいただいた。日頃のご指導とあわせて深謝申し上げる次第である。

藤田先生ほか末包伸吾先生、河井康人先生には論文審査の労をお取りいただき、公聴会では有意義かつ厳しいご意見を賜った。今後の研究の糧としお礼申し上げます。今後の研究の糧としお礼申し上げます。今後の研究の糧としお礼申し上げます。今後の研究の糧としお礼申し上げます。

## 関係既発表論文リスト

### 序章

書き下ろし

### 第1章 近世における絵師の居住傾向

安道永「近世京都における絵師の居住傾向」、査読あり

『日本建築学会計画系論文集』第75巻、第654号、pp.2063-2071、2010年8月

### 第2章 近世における絵師の流派別居住傾向

安道永「近世京都絵師の居住分布における流派別傾向」、査読あり

『日本建築学会計画系論文集』第75巻、第657号、pp.2737-2745、2010年11月

### 第3章 近世における絵師の居住地とパトロン

書き下ろし

### 第4章 近世および近代の郊外居住

#### 第1節 近世の郊外居住

安道永「近世後期京都における絵師の郊外居住について」、査読あり

『日本建築学会計画系論文集』第77巻、第678号、pp.1981-1986、2012年8月

#### 第2節 近代の郊外居住

書き下ろし

### 結章

書き下ろし

## 図版一覧

- 図 1-1 森銑 ；・中島理寿編『近世人名録集成』第一巻、勉誠社、1976 年所収
- 図 1-2 森銑 ；・中島理寿編『近世人名録集成』第四巻、勉誠社、1976 年所収
- 図 1-3 早稲田大学所蔵
- 図 1-4 天保 2 年（1831）に作成された地図（考正：池田東籬亭、画：中邑有樂齋、版元：  
文叢堂竹原好兵衛、関西大学建築史研究所蔵）を用いて筆者作図
- 図 1-5～図 1-16 図 1-4 と同様
- 図 2-1～図 2-16 図 1-4 と同様
- 図 3-1 図 1-4 と同様
- 図 4-1 人見少華『池大雅研究発表 1—大雅堂を中心に—』洽陽蘆、1937 年所収の「大雅舊居圖」  
を転載
- 図 4-2 人見少華『池大雅研究発表 1—大雅堂を中心に—』洽陽蘆、1937 年所収の「池無名居室圖」  
を転載
- 図 4-3 図 1-4 と同様
- 図 4-4 1/25,000 地形図（国土地理院測量、2006 年 5 月発行）を用いて筆者作図
- 資料 1 平野重光『竹内栖鳳 芸苑余話』京都新聞社、1986 年所収
- 資料 2 平野重光『竹内栖鳳 芸苑余話』京都新聞社、1986 年所収
- 資料 3 笠岡市立竹喬美術館『小野竹喬のすべて Part I』笠岡市教育委員会、1993 年所収